平安京右京二条二坊十一町· 西堀川小路跡、御土居跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京二条二坊十一町· 西堀川小路跡、御土居跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1 1区第1-1面全景(北から)



2 2区第2面全景(西から)



1 1区第2面溝8 木製品出土状況(北西から)

1 区第 2 面溝 8 水晶製数珠玉出土状況 (北東から)



3 溝8出土水晶製数珠玉

序文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財(遺跡)は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう 努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市 考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極 的に進めているところです。

このたび、京都地方合同庁舎新築工事に伴う平安京跡、御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成26年2月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 所 長 井 上 満 郎

例 言

1 遺跡名 平安京跡、御土居跡 (文化財保護課番号09H221)

2 調査所在地 京都市中京区西ノ京笠殿町38 京都地方気象台構内

3 委 託 者 国土交通省 近畿地方整備局

4 調査期間 2012年5月8日~2012年9月7日

5 調査面積 1,224 ㎡

6 調査担当者 高橋 潔・モンペティ恭代

7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「花園」、「山ノ内」を参考に し、作成した。

8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI (ただし、単位 (m) を省略した)

9 使用標高 T.P.: 東京湾平均海面高度

10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。

11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。

12 遺構規模 特に断らない限り、遺構検出面での規模を記載する。深さも検出面からの深度を示した。

13 遺物番号 種類ごとに通し番号を付した。土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、土製品は「土」、金属製品は「金」、銭貨は「銭」、石製品は「石」、木製品は「木」をそれぞれ頭に付した。写真番号も同一とした。

14 釈 文 墨書土器と木簡の釈文は、西山良平氏(京都大学)、吉野秋二氏(京都産業大学)に依頼した。

15 本書作成 高橋 潔・モンペティ恭代

16 執筆分担 高橋 潔:1・2・5

モンペティ恭代:3・4(1)~(8)

竜子正彦: 4(9)

付章1:パリノ・サーヴェイ株式会社

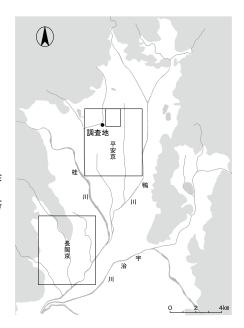
付章2:丸山真史(奈良文化財研究所)

付章3:塚本珪一(日本甲虫学会)

17 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作

成には、資料業務職員および調査業務

職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1.	調查	経過	1
	(1)	調査に至る経緯	1
	(2)	調査区の設定	1
	(3)	発掘調査の経過	2
	(4)	整理作業と報告書作成	4
2.	遺跡	の概要	5
	(1)	位置と環境	5
	(2)	周辺の調査	7
3.	遺	構	12
	(1)	基本層序	12
	(2)	遺構の概要	13
	(3)	平安時代以前の遺構	13
	(4)	第2面の検出遺構	13
	(5)	第1-3面の検出遺構	19
	(6)	第1-2面の検出遺構	22
	(7)	第1-1面の検出遺構	23
4.	遺	物	25
	(1)	遺物の概要	25
	(2)	土器類	25
	(3)	瓦類	36
	(4)	土製品	38
	(5)	金属製品	39
	(6)	銭貨	40
	(7)	石製品	41
	(8)	木製品	42
	(9)	種実	47
5.	ま	と හ	53
付章	f 1	自然科学分析	57
付章	£2	西堀川小路西側溝から出土した動物遺存体	71
付章	£3	西堀川小路西側溝から出土した昆虫遺体	76

卷頭図版目次

- 巻頭図版1 遺構 1 1区第1-1面全景(北から)
 - 2 2区第2面全景(西から)
- 巻頭図版2 遺構・遺物 1 1区第2面溝8 木製品出土状況(北西から)
 - 2 1区第2面溝8 水晶製数珠玉出土状況(北東から)
 - 3 溝8出土水晶製数珠玉

図 版 目 次

- 図版1 遺構 遺構平面図1 第2面 平安時代前期(1:250)
- 図版2 遺構 遺構平面図2 第1-3面 平安時代中期から室町時代(1:250)
- 図版3 遺構 遺構平面図3 第1-2面 室町時代から安土・桃山時代(1:250)
- 図版4 遺構 遺構平面図4 第1-1面 安土・桃山時代以降(1:250)
- 図版 5 遺構 東壁断面図 (1:100)
- 図版6 遺構 東西セクション東半断面図およびオルソ図(1:100)
- 図版7 遺構 東西セクション西半断面図およびオルソ図(1:100)
- 図版8 遺構 杭列状況図(1:150)
- 図版9 遺物 溝1出土土器実測図1(1:4)
- 図版10 遺物 溝1出土土器実測図2(1:4)
- 図版11 遺物 溝8出土土器実測図1(1:4)
- 図版12 遺物 溝8出土土器実測図2(1:4)
- 図版13 遺物 瓦拓影・実測図(1:4)
- 図版14 遺物 土製品・金属製品実測図(1:4、金1のみ1:1)
- 図版15 遺物 銭貨拓影、石製品実測図(1:1)
- 図版16 遺物 溝1出土木製品実測図、溝8出土木製品実測図1(1:4)
- 図版17 遺物 溝8出土木製品実測図2(1:4)
- 図版18 遺物 溝8出土木製品実測図3 (1:4)
- 図版19 遺物 溝8出土木製品実測図4(1:4)
- 図版20 遺物 溝8出土木製品実測図5(1:4)
- 図版21 遺物 溝8出土木製品実測図6(1:4)
- 図版22 遺物 溝8出土木製品実測図7(1:4)
- 図版23 遺物 溝8出土木製品実測図8(1:4)

- 図版24 遺構 1 1区第1-1面全景(北西から)
 - 2 2区第1-1面全景(北西から)
- 図版25 遺構 1 2区第1-1面全景(北東から)
 - 2 1区第1-2面落込み16(南から)
 - 3 1区第1-2面溝15(北東から)
- 図版26 遺構 1 2区第1-2面断割り掘下げ部[北](西から)
 - 2 2区第1-2面断割り掘下げ部[南](西から)
 - 3 2区北壁(東半)氾濫堆積状況(南から)
- 図版27 遺構 1 2区第1-3面路面12(北東から)
 - 2 2区第1-3面井戸6(北から)
 - 3 1区第2面全景(北から)
- 図版28 遺構 1 1区第2面全景(北西から)
 - 2 2区第2面全景(北から)
- 図版29 遺構 1 1区第2面溝1(北から)
 - 2 2区第2面溝1(北から)
 - 3 1区第2面溝8(北から)
- 図版30 遺構 1 2区第2面溝8 (北から)
 - 2 2区第2面溝8 馬下顎出土状況 (西から)
 - 3 1区第2面溝1杭列c断割り状況(北西から)
 - 4 2区第2面路面4石敷部分(南から)
- 図版31 遺物 溝1出土土器
- 図版32 遺物 溝8出土土器1
- 図版33 遺物 溝8出土土器2
- 図版34 遺物 溝8出土土器3
- 図版35 遺物 瓦
- 図版36 遺物 土製品、銭貨、金属製品、石製品
- 図版37 遺物 溝8出土木製品1
- 図版38 遺物 溝8出土木製品2
- 図版39 遺物 溝8出土木製品3
- 図版40 遺物 溝8出土木製品4
- 図版41 遺物 溝8出土木製品5
- 図版42 遺物 墨書土器赤外線写真
- 図版43 遺物 墨書土器·木簡赤外線写真

挿 図 目 次

図Ⅰ	調査位直図(1:2,500)	1
図2	調査区配置図(1:1,000)	2
図3	調査前全景(南東から)	3
図 4	1区重機掘削および作業風景(南東から)	3
図5	1 区堀 17 重機掘削(東から)	3
図6	1 区堀 17作業風景(北東から)	3
図7	1 区東西セクション南断割り (西から)	3
図8	1 区溝 8 掘下げ作業(北から)	3
図9	2区溝8掘削風景(南東から)	3
図10	現地説明会風景 (北西から)	3
図11	2区埋戻し状況(北から)	3
図12	調査終了状況(南東から)	3
図13	平安京と御土居(100,000)	6
図14	周辺調査地点図(1:5,000)	7
図15	基本層序 (1:40)	12
図16	平安時代以前の遺構(1:500)	14
図17	溝 1 セクション断面図(1:50)	15
図18	溝 8 遺物出土状況図(1:100)	16
図19	溝8セクションC-C'、D-D' 断面図 (1:50) ····································	17
図20	溝 1 杭列 c 実測図(1:100)	18
図21	井戸6実測図(1:20)	20
図22	路面12·柱穴列13実測図(1:100)	21
図23	出土土器実測図1 (1:4)	34
図24	出土土器実測図2(1:4)	35
図25	出土塼実測図(1:8)	38
図26	伏見人形	39
図27	銭6実測図(1:2)	40
図28	銭6	40
図29	石製品実測図1 (1:2)	41
図30	石製品実測図2 (1:8)	42
図31	石製品実測図3 (1:2)	42
図32	出土種実(草本)	50

図33	出土種実(木本)	51
図34	遺構変遷図1 (1:500)	54
図35	遺構変遷図 2 (1:500)	55
	±	
	表目次	
表1	周辺調査一覧表	8
表2	遺構概要表	13
表3	遺物概要表	25
表4	溝 1 出土土器破片数計測表	26
表5	溝8出土土器破片数計測表	30
表6	溝群11出土土器破片数計測表	33
表7	氾濫堆積14出土土器破片数計測表	34
表8	盛土19出土土器破片数計測表	35
表9	堀17出土土器破片数計測表	36
表10	4mmメッシュ篩による選別種実一覧表	48
表11	メロンの仲間大きさ計測表・グラフ	48
表12	4・2・1 mmメッシュ篩による選別種実一覧表	49
	付表目次	
付表1	杭観察表	78
付表2	2 土器観察表	81
付表3	瓦観察表	84
付表4	载貨観察表	85
付表5	水晶製数珠玉観察表	86
付表6	· 木製品観察表 ······	88

平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡

1. 調査経過 (図1~12)

(1)調査に至る経緯

本調査地は京都地方気象台構内であり、平安時代の平安京右京二条二坊十一町南東部とその東側で南北に通る西堀川小路、そして安土・桃山時代に築造された御土居土塁および西側の堀にあたっている。

この京都地方気象台構内に、京都地方合同庁舎新築工事が計画された。これに伴って京都市文化市民局文化都市推進室文化財保護課(以下「文化財保護課」という。)が試掘調査を行った。その結果、遺構が良好に遺存していることが明らかとなったため、工事に先立って発掘調査を行うことが必要と指導された。工事主体である近畿地方整備局より、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、文化財保護課の指導のもとに発掘調査を実施した。

(2)調査区の設定

京都地方気象台構内は、北側が太子道通、西側が西土居通に面した北東角の、南北97m、東西46mの南北に長い敷地である。調査着手前の状況は、敷地の北1/3に東西棟の鉄筋コンクリート

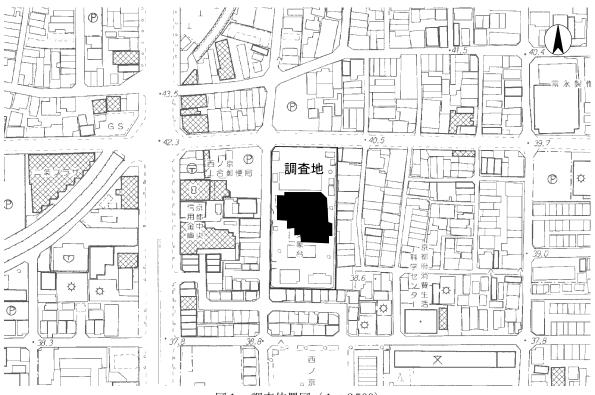
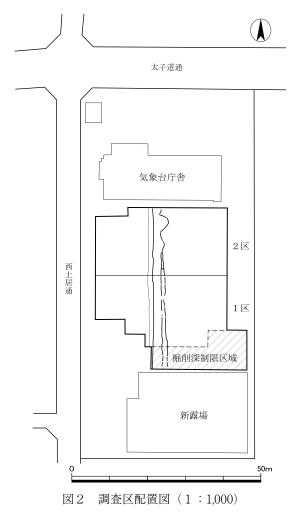


図1 調査位置図(1:2,500)



造地上2階、一部3階建ての気象台庁舎(昭和43年築、現庁舎)があり、南2/3には建物がなく、敷地中央には測候用の露場が占めていた。今回、現庁舎の南、敷地のほぼ中央に、鉄筋コンクリート造地上4階、地下1階の京都地方合同庁舎が新築されることとなった。

調査範囲は、新築される庁舎建物範囲(1,065 ㎡) とその南側で建物建設に伴って行われる掘削により遺構の破壊が予想される「掘削深制限区域」 (192 ㎡)をあわせた1,257 ㎡を対象とし、最終的には、うち1,224 ㎡を調査することとなった。

調査区はほぼ南北の中央で半分に分け、南半を 1区、北半を2区として反転調査とした。1区の 重機掘削中の排土の一部を場外へ搬出して処分を したが、残りは場内に仮置きをして、調査終了時 にその土で埋戻しを行った。なお、1区南側の「掘 削深制限区域」については工事掘削深が標高40 m と浅いため、第1面の調査にとどめ、以下の掘削 は行っていない。

(3) 発掘調査の経過

調査は平成24年(2012)5月8日に機材等の搬入、調査区の範囲設定を行い、翌9日に南半の1区より開始した。重機によって現代盛土・攪乱埋土および西半の御土居堀部分の埋め土の除去を行い、第1面、安土・桃山時代の御土居の調査に入った。第1面の全景写真撮影を6月5日に行い、第1-2面(御土居築造前)の遺構写真は6月11日に撮影した。第1面調査中に当初地山と考えられていた第1-2面以下の砂礫を主体とする層が平安時代以降の洪水堆積層である疑いが生じたため、1区中央に設けた東西セクションの南側を4mの幅で断割り状に、重機で掘り下げた。その結果、第1面より約2m下層に平安時代の遺構面が良好に遺存していることが判明し、この平安時代の遺構面を第2面として東西セクション北側の調査を進めた。第2面の全景写真撮影は6月27日に行った。

1区の調査は7月11日に収束、重機による埋戻しとともに引き続いて2区の掘削を行った。2 区は1区同様、重機によって現代盛土・攪乱埋土および西半の御土居堀埋め土の除去を行い、第1 面の調査に入った。第1面の全景写真撮影は7月24日に行い、第1-2面の調査を行った後、7月 30日より下層洪水砂礫層の重機掘削に入った。この途中、西半に路面状堆積を認めたため、記録作成を行った(第1-3面)。第2面の全景写真撮影は8月23日に行い、遺構を完掘後、9月3日か



図3 調査前全景(南東から)



図5 1区堀17重機掘削(東から)



図7 1区東西セクション南断割り(西から)



図9 2区溝8掘削風景(南東から)



図11 2区埋戻し状況(北から)



図4 1区重機掘削および作業風景(南東から)



図6 1区堀17作業風景(北東から)



図8 1区溝8掘下げ作業(北から)



図10 現地説明会風景(北西から)



図12 調査終了状況(南東から)

ら6日に埋戻しを行い、7日に撤収した。遺構の記録は、実測図と写真撮影により行った。実測図は、1・2区ともに各面ごとに平面図(1/20)と断面図を作成した。調査区壁面については断面図(1/20)を作成し、1区の東西セクションの北壁については断面の画像を残す必要を認めたため、オルソ測量を行った。写真撮影は全景写真および遺構の個別写真を大判カメラにより専門職員が撮影し、その他については調査担当者が35mmカメラで撮影した。調査の成果については、8月16日に広報発表を行い、18日に現地説明会を実施した。約550名の方々が参加された。

なお、第2面の西堀川小路西側溝下層の堆積土は水分を含んだ粘土質で木質などの遺物の遺存 状況が良好で、微細な遺物を含んでいることが判明した。このため、堆積土を取り上げて水洗いし 篩(5mmメッシュ)で受けて収集し、遺物などの選別採集を行う「水洗選別」作業を行った。また、 平安時代の当地周辺の植生や古環境の分析・復元のため、西堀川および西堀川小路西側溝の埋土 に含まれる植物遺体のうち、花粉などの分析は(株)パリノ・サーヴェイに依頼した。西側溝で検 出した動物遺体の分析は、独立行政法人奈良文化財研究所客員研究員の丸山真史氏にお願いした。 また、調査の間、以下の方々にご指導・ご助言などをいただいた。記して謝意を表したい。(順

石田志朗・釜井俊孝・冨井 真・西山良平(京都大学)、増田富士雄(同志社大学)、和田晴吾・木立雅朗・高 正龍・河角龍典・原田昌浩(立命館大学)、國下多美樹(龍谷大学)、丸山真史(奈良国立文化財研究所)、中塚 良(向日市埋蔵文化財センター)、古川 匠(京都府教育員会)、三

好孝一(大阪府文化財センター)、髙田 徹、中村武生、塚本珪一(日本甲虫学会)

(4) 整理作業と報告書作成

不同・敬称略)

整理作業および報告書の作成は、2013年7月1日より開始した。

整理作業としては、まず出土遺物の洗浄作業、遺物内容の点検、調査中に作成した実測図類の点検などを行った。続いて、遺物については、遺構毎に接合作業を行って実測を行う遺物の抽出、遺物実測図の作成、報告書掲載用に作成した版下をスキャニングしデジタル・トレースを行った。遺構については、まず出土遺物の検討を経て各遺構の所属時期を決定し、各時期の全体図を作成、それぞれスキャニングの上デジタル・トレースを行った。個別の遺構についても必要に応じて、版下を作成し、スキャニングの上デジタル・トレースを行った。この間に遺物台帳、遺構台帳、写真台帳など台帳類の作成・入力作業も行った。

報告書の作成は、まずおおまかな構成および章立てを決めて、執筆を分担し、整理作業と並行して進めた。

註

1) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、平成25年 (2013)10月1日付で、公益財団法人に移行した。発掘調査時および整理・報告書作成作業の前半は財団法人、後半および報告書刊行は公益財団法人移行後となった。

2. 遺跡の概要

(1)位置と環境(図13)

調査地は、平安京右京二条二坊の中央やや南、西堀川小路と十一町の一部にあたる。また、安土・桃山時代の御土居にもあたっている。調査地西側の南北現行道路を「西土居通」と呼ぶのは御土居の西側の通りであることに因んでいる。なお、弥生時代から古墳時代の西ノ京遺跡の推定範囲が南西に広がるが、当地は遺跡範囲に含まれていない。

当地周辺は、宇治川以北の京都盆地北半の中央やや西、東を流れる鴨川、西を流れる桂川のほぼ中間に位置している。地質学的には、北山・沢山(標高515.8m)東麓に端を発する紙屋川(天神川)によって形成された扇状地上に立地している。この扇状地は縄文時代以前に形成されたもので、主として砂礫・粗砂・中砂・細砂・微砂・シルトなど河川堆積物からなり、全体としては北東から南西方向への緩やかな傾斜地であるが、実際には河川活動の影響による地形の凹凸が存在している。しかし現状では、平安京造営以降、現代に至る人為的な改変により本来の微地形は把握しにくい状態である。当地の南西に広がる西ノ京遺跡は、弥生時代から古墳時代の土器などが出土するものの、その実態が明らかではない。

延暦13年(794)10月の遷都によって、当地は平安京内の右京二条二坊に取り込まれる。二条二坊は平安宮南半の西隣に位置する。調査対象地のおおよそ東2/3はこの二坊の中央を南北に通る西堀川小路、西1/3は西側の十一町の東端の一部にあたる。西堀川小路は、平安京造営時に左京の堀川小路とともに、中央に人工の堀川(西堀川)、その両側に道路・側溝が施工された京内でも特殊な道路である。『延喜式』左右京職京程には、南北方向の大路・小路および町について左京の規定があり、右京については「右京准此」とあって左京とは朱雀大路の中心線を基準として左右対称となっている。南北方向の小路についての規定によると、両京とも数は12、それぞれ四丈とある。実際に両京とも南北小路の数は11であるが、注釈に「一路加堀川東西辺各二丈」と記載があり、堀川と西堀川の東西両側にそれぞれ二丈の道路が割り振られ、それを数えると小路の数が12となるようである。両堀川は、堀川と両側の路面、側溝をあわせて、小路でありながら大路並みの八丈の幅を持っていた。実際に、これまでの発掘調査において検出された西堀川小路では、中央の西堀川の東西両側に路面があり、さらに外側にそれぞれ側溝が施工されていることが確認されている。。

『拾芥抄』(鎌倉時代中期頃成立か) 西京図によれば、西堀川小路の東側の六町は兵部町(兵部省の厨町)、あるいは大学町(大学寮の厨町) が置かれたことがわかるが、西側の十一町には記載がなく不明である。

「堀川」については、『日本後記』延暦18年(799)の記事が文献史料における初見である。桓武 天皇が京内を巡幸した時、堀川を掘削する囚人達が苦しんでいるのを見て、恩赦の詔を出したとい う。この記事が、平安京遷都後に未だ堀川の掘削を行っていたことを示すものとみられている。東

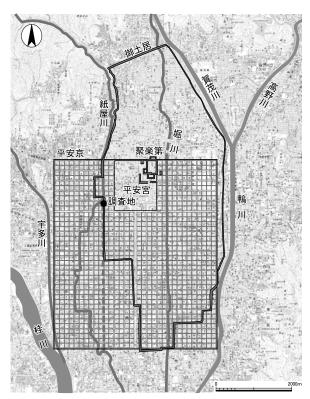


図13 平安京と御土居(1:100,000)

西の堀川は左京・右京の二坊の中心を南北に貫いており、その護岸のための杭は京内の各戸に戸の人数によって供出の本数が定められ、杭材の寸法は長さが八尺から七尺、太さは五寸から三寸と決められていた(『延喜式』)。また、天長10年(833)には護岸用の杭として「檜柱一万五千株」が徴された(『続日本後記』)。文献にみえる「堀川」は、東西まとめて記述されることが多いが、両川ともに大雨の際には氾濫して、周囲に大きな被害を出したことが知られている。このため、運河として利用する両堀川には厳重な維持・管理が必要であったと考えられるが、特に西堀川の洪水・氾濫はかなり激しかったとみられ、比較的早い段階で維持できなくなった。

平安京右京域は平安時代中期ごろには既に衰

退して、耕作地や空閑地が増加することが知られている。よく引合いに出されるのは、慶滋保胤の著した『池亭記』天安5年(982)の記述である。人々の生活は左京域に集中すると考えられているが、実際には右京にも中規模以下の邸宅が点在していたことが発掘調査の成果で確かめられている。

安土・桃山時代、天下統一を遂げた豊臣秀吉は、首都としての京都改造に取り組み、その総仕上げとして天正19年(1591)京を土塁と堀で囲繞して城塞(惣構)化を実行した。「御土居」の築造である。当地は、御土居の西辺、いわゆる「御土居の袖」と呼ばれる西側への突出部の南の南北方向の土塁と堀にあたると推定されている。当地周辺には明治期末ごろまで、土塁が残されていたことがわかっており、当地の真南延長上約500mの市五郎大明神の境内には長さ(南北)約40m、幅(東西)約20m、高さ約4mの土塁が現存する。西側の現行南北道路は土塁西側にあった堀の上にあたっており、「西土居通」と呼ばれている。

当地には、大正2年(1913)4月に京都地方気象台の前身「京都府測候所」が京都御苑内から移転してくる。当地にあった御土居の土塁と堀は、遅くともこの時までに壊されて埋められたようである。その当時の建物は今回の調査区部分に建てられた。その後、何度か建物の増改築が行われ、昭和43年(1968)に現在の庁舎が新築された。そして、今回、京都地方合同庁舎新築の計画が立案された。

(2) 周辺の調査(図14、表1)

本調査地が含まれる平安京右京二条二坊の既往調査地点を図14に示した。南西部には西ノ京遺跡、中央に御土居の西辺と西に張り出す「御土居の袖」の南半部が想定されている。また、西堀川として京内に引き込まれた紙屋川は、氾濫を繰り返す暴れ川で当地周辺以南の地域に何度も大きな被害を及ぼしたため、現在では当地北西から西へ大きく川筋を変更する工事を経て御室川へ注ぎ、天神川と呼ばれている。

この坊内での試掘・立会調査は、図14に「▲」印で示したように数多く実施してきている。道路等における埋設管や宅地における建設工事などに対する立会調査が大半である。これに対して、発掘調査の件数は本調査をあわせて11件と、平安京内でも比較的少ない地域である。北部にはJR山陰線(嵯峨野線)が東西に通っており、複線高架化工事に伴う一連の調査(調査1・2・8・9・11・19)が行われている。それ以外は市立朱雀第四小学校校内の校舎建て替え工事など公共事業のほか、それぞれ個別に行われた調査である。

概して平安時代前期から後期を中心に、鎌倉時代から江戸時代までの遺構・遺物が検出されている。平安時代以前の遺構・遺物は散見されるが、まとまった成果は報告されていない。

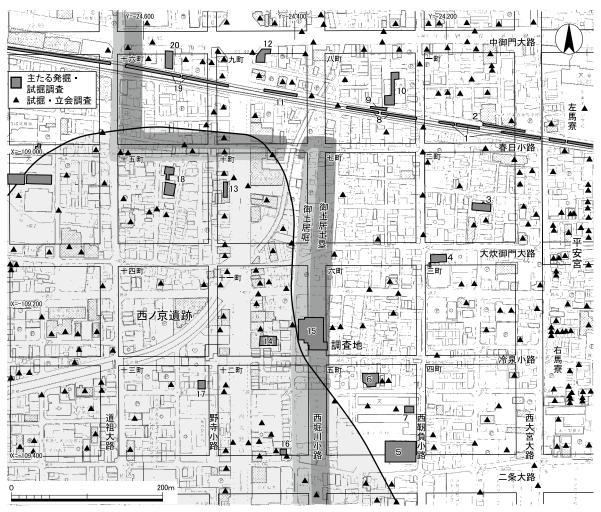


図14 周辺調査位置図(1:5,000)

表 1 周辺調査一覧表

町 調査方法 調査機関	_	緊	_	所在地	調査期間	主な成果	面積(㎡)	大軟
一町 発掘 京市研 中京区聚業系	京市研		中京区聚業§	中京区聚楽廻南町他地内	1997.7.7~1998.3.30	平安前期:南北溝・柱穴。平安中期・後期:流路(西大宮大路部分) →後期~末期:園池、築地。【11A~11C区】	364	11
一町 発掘 京市研 中京区西ノ	京市研		中京区西ノ	中京区西ノ京上平町100-9他地内	2000.12.14~2001.3.27	平安中期~後期:西大宮大路路面・西側溝・西築地。【B区】	(278)	14
二町 発掘 京市研 中京区西ノ	京市研		中京区西ノ	中京区西ノ京南両町88	1981.11.3~11.17	平安中期:柵列。平安後期:井戸。	240	2.5
三町 発掘 京市研 中京区西ノ	京市研		中京区西ノ	中京区西ノ京冷泉町1	1981.4.28~5.28	平安中期:湿地状堆積、井戸、溝、土坑、柱穴群。地山砂礫層下層に姶良丁n火山灰層。	210	3.6
五町 発掘 京市研 中京区西、	京市研		中京区西, 小学校校P	中京区西ノ京笠殿町164 朱雀第四 小学校校内	1995.8.28~1996.3.1	平安前期~中期:二条大路路面・北側溝・内溝、区画溝、堀立柱建物、柵列、井戸。 平安後期:耕作土面・用水路。中世:耕作に伴う溝群。	006	10
五町 発掘 京府教 中京区西	京府教		中京区西、	中京区西ノ京笠殿町162	1979.5.25~7.21	平安中期:土坑。平安後期:掘立柱建物、杭列。平安末期~鎌倉期:溝。 中世以降:耕作溝。	540	1
五町 試掘 京市保 中京区西 小学校校	京市保		中京区西 小学校校	中京区西ノ京笠殿町164 朱雀第四 小学校校内	2012.2.18	平安期:整地層。平安期~中世:土坑。	13	19
八町 発掘 京市研 中京区聚	京市研		中京区聚	中京区聚楽廻南町他地内	1997.7.7~1998.3.30	平安前期:土坑。平安中期~後期:園池、溝、石敷、石組。平安後期:西靫負小路西側溝、流路。【10A・10B区】	308	11
八町 発掘 京市研 中京区西	京市研		中京区西	中京区西ノ京上平町100-9他地内	2000.12.14~2001.3.27	平安中期~後期:池(園池)。近世:耕作土面。【A区】	278	14
八町 発掘 日開コ 中京区西	口麗日		中京区西	中京区西ノ京上平町2、53、54	2010.2.8~3.12	平安前期~後期:池(園池)、溝。平安中期:土壇(建物基壇)。	360	18
九町 発掘 京市研 雷地内	京市研		中京区西 園地內	i/京円町地内・右京区花	1997.9.8~1998.2.13	平安前期:溝6、井戸3、石敷遺構、杭群。平安中期:整地層、溝2、井戸1。 鎌倉期:流路。【9区】	375	11
九町 発掘 京市研 中京区西	京市研		中京区西	中京区西ノ京円町31	2009.1.5~1.30	平安前期~中期:土坑。中世以降:土取土坑。	200	17
十町 発掘 京市研 中京区西	京市研		中京区西	中京区西ノ京中御門東町93	1981.5.14~5.26	平安前期~中世:柱穴群、井戸、溝、掘立柱建物、土坑。	100	4.7
十一町 発掘 京市研 中京区西	京市研		中京区西	中京区西ノ京南上合町74-1他	1984.2.15~3.31	平安前期~中期:掘立柱建物、柵列。中世:湿地状堆積、柵列、溝。	280	8.9
十一町 発掘 京市研 中京区西	京市研		中京区西 気象台構	中京区西ノ京笠殿町38 京都地方 気象台構内	2012.5.8~9.7	平安前期:西堀川小路(西側溝、路面、西堀川)。平安中期~室町期:氾濫堆積層、井戸、 土坑、路面。室町期~安土・桃山期:耕作溝。安土・桃山期以降:御土居(土塁、堀)。	1224	本報告
十二町 試掘 京市セ 中京区西	京市セ		中京区西	中京区西ノ京南上合町98-1	2003.4.3	平安後期:湿地状堆積(園池)、掘立柱建物。	42	16
十三町 試掘 京市セ 中京区西	京市セ		中京区西	中京区西ノ京南上合町42	2001.12.5	平安中期:柱穴、井戸。	26	13
十五町 発掘 京市研 中京区西	京市研		中京医西	中京区西ノ京中御門東町49	2000.5.2~9.4	平安前期:井戸、土坑。平安中期:掘立柱建物、柵列。鎌倉期:整地層。江戸期:耕作土。標高39.5mで姶良Tn火山灰層。	458	15
十六町 発掘 京市研 開地内区	京市研		中京区西 園地內	中京区西/京円町地内,右京区花 園地内	1997.9.8~1998.2.13	平安前期:井戸。平安中期:柱穴、井戸、溝2(野寺小路西側溝?)。桃山期:泥土堆積層。江戸期:南北溝。【8A・8B区】	822	11
十六町 発掘 京文博 中京区西	京文博		中京区西	中京区西/京西円町3	1998.12.14~1999.2.10	平安期:柱穴、土坑、溝、井戸。	300	12
-	-							

京府教:京都府教育委員会、京市セ:京都市埋蔵文化財調査センター、京市保:京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、京市研:財団法人京都市埋蔵文化財研究所、 京文博:京都府京都文化博物館、日開コ:株式会社日開調査設計コンサルタント

平安時代の二坊は、平安宮南半の西側にあたり、『拾芥抄』西京図によれば、一・二町は左馬寮の厨町である左馬町、三・六町は当初兵部省の厨町・兵部町、四町は参議・小野篁の邸宅、七町は 采女町、八町は左衛門府の厨町・左衛門町、九・十六町は民部省の厨町であった。九・十・十五・ 十六町は後に大将軍社の社領となる。

いずれの町も町の全体の内容が明らかになるほどの調査成果の蓄積がなく、部分的な検出となっているものの、全域にわたって前期以降後期にわたる各種遺構が検出されている。園池と考えられる遺構が一町(調査1、平安時代後期から末期)、八町(調査8~10、平安時代前期から後期)、十二町(調査16、平安時代後期)で検出されている。また、掘立柱建物や井戸などは、五町で平安時代前期から中期および後期(調査5・6)、十・十一・十五・十六町で平安時代前期から中期(調査13・14・18・19)、十三町で平安時代中期(調査17)のものが検出されている。条坊関係の遺構は、西大宮大路西側溝・西築地(調査2)、野寺小路西側溝(調査19)、西靫負小路西側溝(調査8)、二条大路路面・北側溝と内溝(調査5)などが確認されており、西大宮大路(調査1)や西靫負小路(調査8)は平安時代後期に流路化することが明らかになった。本調査(調査15)では、平安時代前期の西堀川小路を検出した。西堀川小路の中央に造られた西堀川(紙屋川)による氾濫は、以降の当地の地形や生活環境に大きな影響を与えたと考えられるが、この点については後で触れたい。右京は平安時代中期以降衰退、耕作地化すると考えられているが、当二坊については一概にそのようには言えず、中期以降も人々の活動が続けられていたと言えよう。

ところが、中世から近世にかけては、遺構の検出状況が低調で、実際に耕作土層やそれに伴う溝などが確認されていて(調査 $6\cdot 9\cdot 18\cdot 19$)、大半が耕作地化していたとみられる。そのような中で安土・桃山時代に御土居が施工され、洛中と洛外が明瞭に区画されるようになる。

参考文献

『京都市の地名』(日本歴史地名大系27) 平凡社 1979年9月 『平安時代史辞典』角川書店 1994年4月 小澤嘉三『西院の歴史』西院の歴史編集委員会 1983年5月 『平安京提要』角川書店 1994年6月

註

1) 文献などにみえる荒見川 (河)、高陽川もこの川の別名と考えられるが、江戸時代までは紙屋川の名称が一般的であったらしい。北野の南、この川の畔にあった紙屋院配下の宿紙村で紙を漉いていたことに因むという。現在では北区鷹峯千束町以北を紙屋川、以南を天神川と呼んでいる。図13に示した紙屋川の流路は、明治20年の参謀本部陸軍部測量局による仮製弐万分一地形図のものである。紙屋川の平安京遷都以前の流路については不明であるが、平安京遷都時に西堀川として平安京内西堀川小路の中心に直線的に引き込まれたことが知られている。現在の紙屋川は、調査地の西、西大路太子道交差点付近から西へ流路を変え、太秦安井で御室川と合流する。昭和10年の京都大水害の後に、この間に新たに洛西運河(天神川運河)を掘削して紙屋川を西の御室川へ合流させる改修工事が行われ、昭和19年に完成した。

- 2) 平尾政幸·辻 純一「右京三条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年3月
- 3) 堀川は堀河とも記載されることもあり、「堀川」は左京・右京の両堀川をまとめて指す場合と、左京の堀川を指す場合があった。時として、右京の西堀川(紙屋川)に対して左京のそれを「東堀川」と表記されることもあったようである。

『日本文徳天皇實録』巻十 天安二年(858)五月壬午(廿二日)

大雨。洪水氾溢。河流盛溢。水勢滔々。平地浩々。橋梁斷絶。道路成川。東堀川水入冷然院。庭中如 池。(後略)

4) 『日本後記』巻八 桓武天皇 延暦十八年(799)六月丙申(廿三日)

丙申。從五位下紀朝臣嗣梶。從五位下藤原朝臣綱主授從五位上。正六位上桑田眞人甘南備從五位下。』 是日。詔曰。朕祗纂丕業。撫臨黎元。尅己勤躬。不遑寧處。思欲輯熙四海。期之刑措。弘濟百姓。致 之壽域。而近巡京中。過堀川處。鉗鎖囚徒。暴體苦作。興言於茲。愀然于懷。雖生民之愚。自招罪惡。 而爲彼父母。寧不哀愍。其在役見徒。及天下見禁囚等。罪無輕重。並宜赦除令得自新。但私鑄錢。謀 殺故殺。及被問民苦使推訪諸國郡官吏百姓等。不在赦限。其謀殺故殺配役者。停役配流。普告遐邇。 令知朕意。

5) 『延喜式』巻四二 左右京職

凡堀川杭者。不論課不課戸。皆令戸頭輸之。其戸十九人已下一株。廿人已上二株。卅人已上三株。(長 八尺以下七尺以上。本径五寸。末径三寸。)

- 6) 『続日本後記』巻一 仁明天皇 天長十年(833) 五月甲寅(廿八日) 太政官処分。課左右京戸。令輸檜柱一万五千株。以充東西堀河杭料。
- 7) 『池亭記』(『本朝文粋』 第巻十二)

予二十餘年以來。歷見東西二京。西京人家漸稀。殆幾幽墟矣。人者有去無来。屋者有壞無造。其無処 移徙。無憚賤貧者是居。(後略)

- 8) 山田邦和「左京と右京」『平安京提要』 角川書店 1994年6月
- 9) 中村武生「豊臣期京都惣構の復元的考察 『御土居』・虎口・都市民—」『日本史研究』420 日本 史研究会 1997年8月

中村武生「豊臣政権の京都都市改造」『豊臣秀吉と京都 —聚楽第・御土居と伏見城—』日本史研究 会編 文理閣 2001年12月

仁木 宏「都市京都と秀吉 一首都の平和と公儀―」『日本史研究』420 日本史研究会 1997年8月 福島克彦「『惣構』の展開と御土居」『都市 ―【もの】から見る日本史』青木書店 2002年11月

- 10) 西田直二郎·梅原末治「御土居」『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊 京都府 1920年6月
- 11) 「史跡 御土居」としては遺存している土塁9箇所が指定されており、その内の一つである。史跡に指定されたもの以外にも、北区大宮交通公園内や北野中学校校庭などに土塁が遺存している。
- 12) 京都地方気象台『京都気象100年 京都地方気象台創立100周年記念誌』 1981年3月
- 13) 前掲註1参照。
- 14) 表には二坊内の発掘調査の番号を20まで付しているが、JR山陰線(嵯峨野線)に関連する調査1・8・11・19と調査2・9はそれぞれ1件としている。

調査文献一覧(表1 周辺調査一覧表)

- 1 松井忠春·水谷寿克「平安京右京二条二坊五町跡発掘調査概要」『埋蔵文化財調査概報(1980-3)』京 都府教育委員会 1980年3月
- 2 平方幸雄「右京二条二坊(1)」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年3 月
- 4 辻 純一「右京二条二坊(3)」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年3月
- 5 平方幸雄「右京二条二坊(1)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1983年3月
- 6 辻 裕司「右京二条二坊 (2)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要 (発掘調査編)』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1983年3月
- 8 辻 純一「右京二条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年3月
- 9 木下保明·辻 純一「右京二条二坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年3月
- 10 東 洋一·網 伸也·真喜志悦子「平安京右京二条二坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年3月
- 11 小檜山一良·小松武彦·平田 泰·長戸満男「平安宮左馬寮-朝堂院跡·平安京右京一·二条二~四 坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年3月
- 12 南 博史ほか『平安京右京二条二坊十六町』京都文化博物館調査研究報告 第14集 2000年3月
- 13 堀 大輔「平安京右京二条二坊十三町跡・西ノ京遺跡 №41」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13 年度』京都市文化市民局 2002年3月
- 14 吉村正親·尾藤徳行「平安京右京二条二坊(1)」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法 人京都市埋蔵文化財研究所 2003年7月
- 15 平田 泰「平安京右京二条二坊(2)」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年7月
- 16 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年3月
- 17 伊藤 潔『平安京右京二条二坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008 18、財団法 人京都市埋蔵文化財研究所 2009年3月
- 18 北中恭裕ほか『平安京右京二条二坊八町跡 —平安時代庭園跡の調査—』株式会社日開調査設計コン サルタント文化財調査報告書第4集 2011年1月
- 19 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成22年度』京都市文化市民局 2012年3月

3. 遺 構

(1) 基本層序(図版5~7、図15)

調査地の地表面の標高は北端で約41.3m、南端で約40.8mである。調査区の基本層序は西半分と 東半分で大きく異なる。

調査区の西半分は御土居の堀17にあたり、深い掘り込みがなされる。堀17は最大で現地表面から深さ3.5 m、幅は14 m以上あり、下層(平安京右京二条二坊十一町)の遺構を完全に破壊している。御土居の底の標高は南で37.3 mあり、1983年度に行われた調査地西側での発掘調査(図14・表1)では、標高38 m前後で同じ十一町の平安時代遺構を検出していることからも理解できよう。調査区北壁西側(図版1・図15 A地点)を示した。ここでは地表面から0.5 mが現代盛土、その下層には堀の埋土が2 m堆積し、その下は黒褐色砂礫の地山である。堀の埋土は、最下層および肩部では自然堆積、上層は近代になって埋めた土となる。

東半分では御土居土塁下部にあたり、遺構の残存状況は良好であった。調査区北壁中央部(図版 1・図15 B 地点)を示し、基本層序を以下のように分けた。まず地表面から約0.5 mまでが現代盛土、これを除去すると安土・桃山時代の遺構面(第1-1面)となる(標高40.8 m前後)。この面は安土・桃山時代とするが、結果としては、近代に御土居の土塁を除去した面である。第1面と同一面あるいはやや下層で先行する中世の遺構を検出しており、これを第1-2面とした。安土・桃山時代に御土居が築造される以前の生活面と考える。以下、平安時代中期から中世までに西堀川

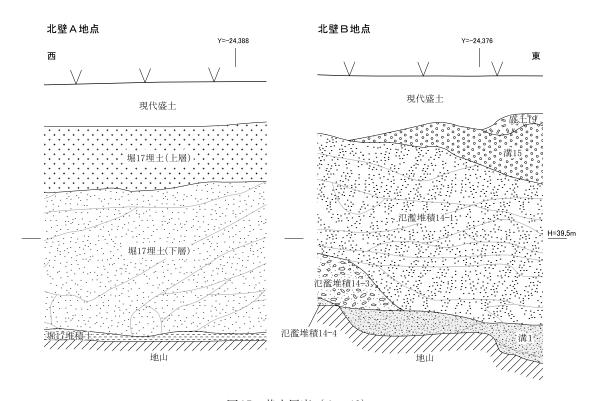


図15 基本層序(1:40)

(紙屋川)の洪水による砂礫を主体とする氾濫堆積層が厚さ2m前後ある。なお、この砂礫層中にも路面などの遺構を検出した(第1-3面)。氾濫堆積層の下面が平安時代の遺構面(第2面)となる(標高38m前後)。それ以下は自然堆積層(いわゆる地山)である。

地山面の標高は、北端で現地表面下3.0 m (標高38.3 m)、2 区南端では制限区域のため地山まで達しなかったが1 区南端で現地表面下3.4 m (標高37.9 m) と、平安京右京域としては現地表面より深い深度で遺構が検出された。

(2) 遺構の概要(表2)

調査は、1区と2区の2つの調査区に分けて行った。検出した遺構は、1区119基、2区92基、総数211基である。

1区・2区とも西半で深く掘られた御土居の堀を検出、東半では御土居土塁の基底部、その下層で中世の耕作溝や落込み、厚さ2m前後に及ぶ氾濫堆積・堆積土中層に井戸・路面・柱穴列、平安時代の遺構を検出した。平安時代の西堀川・西側溝と考えられる南北方向の溝、溝の護岸のための整地・杭列、路面と考えられる石敷部分など西堀川小路に関連する遺構を検出した。さらに平安時代以前の流路の一部を検出した。以下では、遺構を各時期ごとに報告する。なお、各検出遺構および出土遺物の時期については、平安京・京都 I 期~ II 期~ II 期~ III 期 III 期~ III 和~ II

(3) 平安時代以前の遺構(図16)

調査区北東部において、平安時代の路面の下層に、やや斜行する東西方向の流路を検出した。幅約2.5 m、深さ約0.2 m、長さは約14 m分である。遺物は出土しなかったが、平安京造営以前の遺構として、図示した。

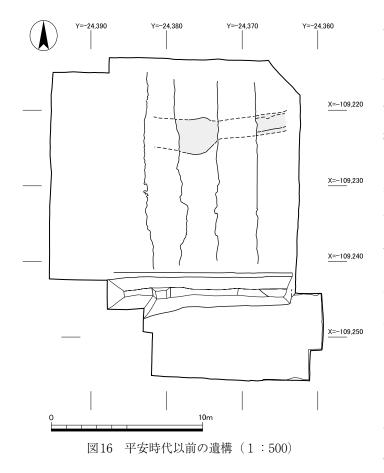
(4) 第2面の検出遺構(巻頭図版1-2、図版1・27・28)

検出した遺構には、平安時代前期の西堀川小路に関連する溝、路面、盛土、杭跡などがある。

溝1 (図版1・8・29、図17) 調査区中央東寄りで検出した南北方向の溝で、西堀川に相当する。南端では掘削制限区域にあたるため面的には検出できなかったが、調査区壁断面観察から、北

時 代	遺構	備考
平安時代前期	溝1・7・8、盛土2・9、路面3・4、杭列a~j	
平安時代中期 ~室町時代	溝群 5・11、井戸 6、土坑10、路面12、 柱穴列13(柱穴123・125・126・128~134)、氾濫堆積14	
室町時代 ~安土・桃山時代	溝15、落込み16	
安土・桃山時代以降	堀17、溝18・20、盛土19・22	

表2 遺構概要表



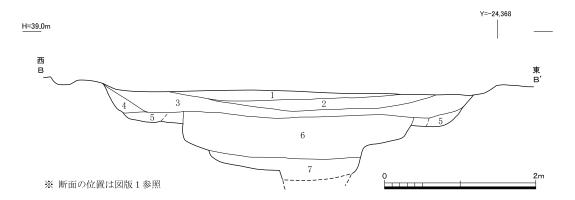
側・南側とも調査区外へ延長する ことがわかる。南北長約24mを確 認した。北端で幅5.2m、深さ1.6m、 南端で幅5.6m、深さ0.9m、底面の 標高は37.0m前後で推移するが、凹 凸が激しい。断面は全体としてはU 字状であるが、東西両側壁ともに黄 色粘土の地山が削られて階段状を 呈する。大雨などのたびに、上流よ りの水流・土石流によって幾度も 下方および側方に削り込まれた結 果とみられる。両岸には護岸のため の杭が何列にもわたって打ち込ま れている(図版8、付表1のa・ b·c·d·e列) 杭は黄褐色から 黄灰色を呈する粘質シルト層を中 心とする地山に穿たれる。埋土は上

層と下層に分けることができ、概ね上層が黒色系砂泥層、下層が砂礫層である。上層からは土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・硯などが出土、下層からは、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・土馬・ミニチュアカマド・瓦などが出土した。土器類の時期は上層が I 期新段階から II 期古段階に属する。

盛土2(図版1・8・30、図20) 溝1の東側に施された護岸積土と考えられる盛土である。幅 0.8~1.0 m、南北長約24 m、ほぼ検出した範囲の全域にわたって検出した。この盛土とともに杭列 c を検出した。先述したように、西堀川は大雨などのたびに上流からの水流・土石流によって削り 込まれ、東西両側壁も地山が削られ、階段状を呈している。深部が砂礫によって埋まり川幅が広がった際に、杭を打ち盛土を施して護岸工事をしたとみられる。盛土は上層が暗褐色粘質土、下層が黒褐色砂礫である。埋土中から土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・硯などが出土したが、全て極小片で磨滅が激しい。

盛土9(図版1・8) 調査区北半部(2区)溝1西側で検出した。溝1西側の護岸積土と考えられる盛土である。幅0.2~0.8 m、約13 mにわたって検出した。この盛土とともに杭列 b を検出した。盛土は黒褐色砂泥とにぶい黄橙色泥土と灰黄褐色粗砂礫を混ぜて整地している。出土遺物はなかった。

路面3(図版1・8) 調査区東端部溝1の東に南北に位置する路面相当部である。路面自体は 失われて地山上面である黒色シルト層が露出した状態であった。路面相当部上面では、幾筋もの不 規則な南北の溝状遺構(溝群11)を検出した。これは第1-3面で触れる洪水堆積14に伴って形



- 1 7.5YR3/3 暗褐色泥砂φ5cm以下の小礫多く含む(φ10cm、φ5cm以下主体)
- 2 10YR4/1 褐灰色泥砂 610cm以下の小礫多く含む 3 10YR3/2 黒褐色泥砂 粗砂礫多く含む 610cm以下の小礫多く含む、遺物多く含む 4 10YR3/1 黒褐色泥砂 62cm以下の粗砂礫含む
- 5 10YR2/2 黒褐色砂泥+10YR6/2 にぶい黄褐色泥土+10YR5/2 灰黄褐色粗砂礫 φ10cm以下の粗砂礫含む(護岸整地)
- 6 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂礫 ϕ 20cm以下の礫を含む (ϕ 10cm前後、 ϕ 5cm以下主体)
- 7 10YR3/3 暗褐色粗砂 φ15cm以下の礫多く含む(φ5cm以下主体) 上面に薄く鉄分沈着

図17 溝1セクション断面図(1:50)

成されたものである。路面の規模は、南北長24.0m、幅約4mである。標高は38.2m前後である。 この遺構では3列の杭列(f・g・h列)を検出した。

路面4(図版1・8・30) 調査区中央部に南北に位置する路面相当部であるが、路面3と同様、 路面自体は失われて地山上面である黒色シルト層が露出した状態で、上面では、幾筋もの不規則な 南北の溝状遺構(溝群5)を検出した。唯一、路面と考えられる石敷部分を調査区北部で検出した。 石敷部分の規模は、長さ9.8 m、幅0.3~0.5 mである。標高は北で38.75 m、南で38.60 mである。第 2面としては最も高く、この高さが本来の路面の高さと考えられる。黒褐色砂泥に径1~10cmの礫 を敷き固く締める。遺物には土師器の極小片が出土したのみである。路面北部では、杭跡と見られ る浅く小さなピットがランダムに穿たれるが、杭本体は2本(図版8、付表1の杭190・185)が残 るのみで他は残存していなかった。

溝8 (巻頭図版2、図版1・8・29・30、図18・19) 調査区中央部西寄りで検出した南北方向 の溝で、西堀川小路西側溝に相当する。南部では氾濫堆積の掘削を行わなかったこと、南端では掘 削制限区域にあたっていたことなどから、全面的には検出できなかったが、北側・南側とも調査区 外へ延長するとみられる。規模は、南北長約25m、北で幅3.6m、深さ1.0m、南で幅4.5m、深さ 1.08 m、断面は全体としては逆台形で大きく開くが、底部で浅いU字状の溝が掘り直されている。 この溝の西側、X = - 109,234.5 mライン周辺で、後述する東西溝7が取り付く。この東西溝の流れ 込む地点周辺の溝8埋土には、土器類の他、物忌木簡・ヘラ状加工品・櫛・挽物・曲物・折敷など の木製品や金属製銙帯、水晶製数珠玉70個体など特筆すべき遺物が数多く出土した。物忌木簡の 出土から、西堀川小路側に門が開かれていたと考えられる。この溝の西岸(宅地側)には、杭列i および i とした護岸のための杭が打ち込まれている (図版8、付表1)。

この溝の底面の標高は北端で37.38m、南端で37.12mである。 埋土は上層と下層に分けることが でき、概ね上層が砂礫層、下層が黒色系の泥砂から粘質土層である。洪水に伴い埋没したと考えら

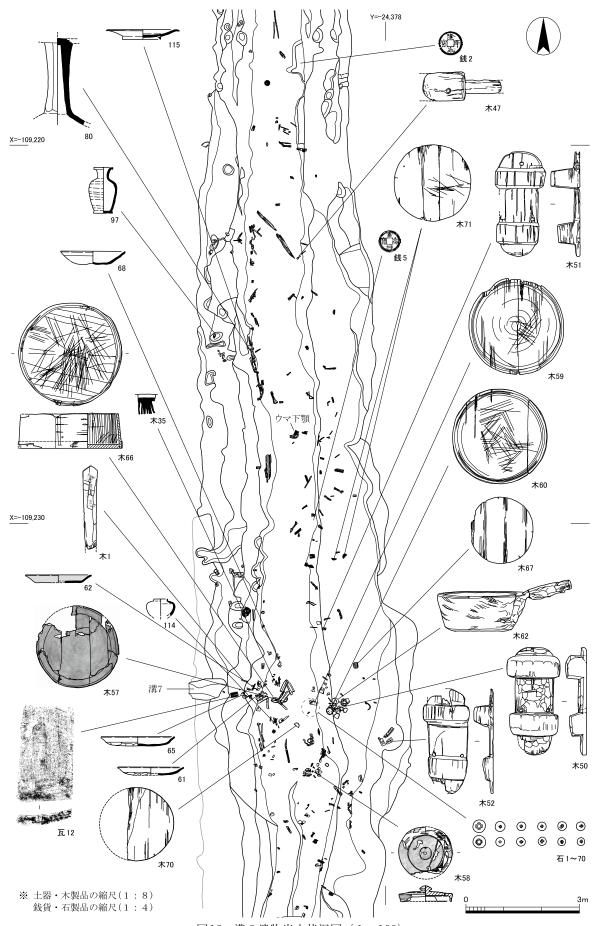
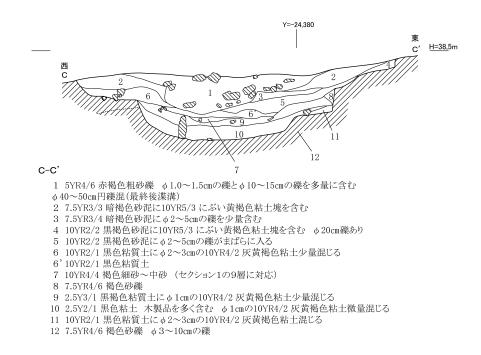


図18 溝8遺物出土状況図(1:100)



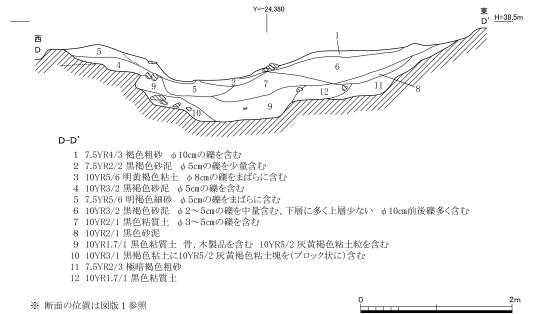


図19 溝8セクションC-C'、D-D'断面図(1:50)

れる。上層からは土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入青磁などの多様な土器類の他、土馬・木製品・獣骨などが出土、下層からは、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などの多様な土器類の他、多様な木製品・石製品・獣骨・種実などが多量に出土した。土器類の時期は上層が I 期新段階から II 期新段階の範囲に、下層が I 期中段階から II 期古段階の範囲に属する。

溝7(図版1・8、図18) 調査区中央部西寄りで検出した東西溝である。西側は後世の遺構によって失われている。東は溝8西肩に注ぎ込むように取り付く。規模は、幅0.3 m、深さ0.15 m、底部の標高は、西で37.91 m、東で37.81 mである。宅地からの排水溝と考えられる。遺物の出土はなかった。

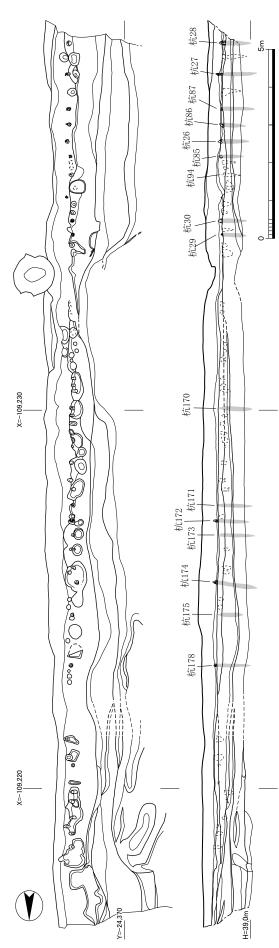


図20 溝1杭列c実測図(1:100)

杭列 $a \sim j$ (図版 $8 \cdot 30$ 、図 20、付表 1) 第 2 面 では 10 列 の 杭跡 を 検出した。 溝 1 では 西岸で 2 列 (a 列 · b 列)、東岸で 3 列 (c 列 · d 列 · e 列) の 杭 列 を 検出している。 路面 3 では 3 列 (f 列 · g 列 · h 列)、 路面 4 には 杭跡 と見られる 浅く小さな ピットが ランダムに 穿たれる。 溝 8 では 西岸で 2 列 の 杭列 (i 列 · j 列)を 検出した。

杭本体の残存するものはすべて採取し、大きさ・ 樹種・調整痕などの観察を行い、観察表1に掲示し た。ここでは、列ごとに樹種・木取り・本数をまとめ ておく。なお、観察後に杭を廃棄した。

< a列> ヒノキ丸太材10本、ヒノキであるが腐食が激しいため丸太材か割り材か不明のもの1本、コウヤマキ割り材2本、カヤであるが腐食が激しいため丸太材か割り材か不明のもの2本。

< b列> ヒノキ丸太材 9本、ヒノキであるが腐食が激しいため丸太材か割り材か不明のもの1本、カヤ丸太材 1本。

< c列> ヒノキ丸太材16本、コウヤマキ丸材1本。< d列> 杭跡のみで残存する材なし。

< e 列 > ヒノキ丸太材 1 本の他は杭跡のみで残存する材なし。

< f 列>モミ属丸太材6本、サクラ属丸太材1本。

< g列>サクラ属丸太材4本、モミ属丸太材1本。

< h列>ヒノキ割り材4本。

< i 列> モミ属割り材12本。

< i 列> モミ属割り材12本。

他に、路面4から採取した2本はヒノキ丸太材。

樹種には、ヒノキがもっとも多く、次にモミ属が多い。他には、サクラ属、カヤ、コウヤマキがある。木取りは丸太材と割り材の2種あるが、ヒノキは丸太材の割合が高く、モミ属は割り材の割合が高い。杭の上部は露出していた部分は磨滅または欠損しているが、土中に打ち込まれていた部分の残存状況は良好で、先付けの残るものが多い。先付けは非常に鋭く尖

らせており、中には長さが $30\,\mathrm{cm}$ 以上あるもの(c 列ヒノキ杭 $26\,\mathrm{c}$ ど)もある。また、表面にチョウナ痕が明瞭の残るもの(c 列ヒノキ杭 $27\cdot170\cdot171\cdot172\cdot175$)もある。丁寧に面取りを施しているものも多い。特に a 列コウヤマキ杭 $181\,\mathrm{t}$ は八角形に面取り、 a 列コウヤマキ杭 $184\,\mathrm{t}$ は六角形に面取りを施す。丸太材で最も太いものは、 c 列ヒノキ杭 $26\cdot28\cdot170\,\mathrm{c}$ 直径 $12\,\mathrm{cm}$ ある。割り材で最も太いのものは a 列コウヤマキ杭 $181\,\mathrm{c}$ 一辺が $11\,\mathrm{cm}$ ある。モミ属の割り材では一辺が $8\,\mathrm{cm}$ 前後のものが多い。丸太材で最も長いものは、 c 列ヒノキ杭 $174\,\mathrm{c}$ 120 cmあった。割り材で最も長いものは i 列モミ属杭 $197\,\mathrm{c}$ 133 cmあった。また $1\,\mathrm{c}$ 本の杭の中でも一部痩せた箇所を持つものが多くあり、露出した部分は乾湿の繰り返しと水流などで削られていると思われる。

つぎに遺構をみていくと、溝1両岸($a \sim e \, \rm M$)では、丸太材の直径は $8 \sim 12\, \rm cm$ あり、長さは長いもので $120\, \rm cm$ ある。延喜式には「長八尺以下七尺以上。本径五寸。末径三寸。」と規定があり、太さについてはほぼ一致する。樹種では、溝1両岸にはコウヤマキが3本使用されるが、ほかの遺構では使用されない。溝1の杭44本のうち38本がヒノキ材が使用されていて、86%を占める。また、路面3にある杭列 h はすべてヒノキの割り材であった。これら杭列のどれかは、続日本後記にある「檜柱一万五千株。」の記事に照合するものと考えられる。路面3では、サクラ属やモミ属丸太材が使用されている。これら材質の違いは時期差があるものと考えられる。

溝8の西岸(宅地側)には、杭列iおよびjとした杭が打ち込まれている。宅地側の護岸のための杭と考えられる。これらの杭は全てモミ属の割り材を用いている。杭にひっかかるように重なって出土した自然木も採取し、樹種鑑定を行ったところ、二葉マツ・広葉樹・スギ樹皮・ヤナギ属・シダ類・サクラ属・ヒサカキ・モミ属・クワ属があった。

(5) 第1-3面の検出遺構 (図版2・26・27)

検出した遺構には、平安時代中期から室町時代の溝群、土坑、井戸、路面、柱穴列、氾濫堆積などがある。この他にも、土層断面の観察によって、人為的とみられる層が何箇所か認められるが、何度も繰り返された洪水による削り込みと堆積によって、面や遺構としては捉えることはできなかった。

溝群11(図版2) 調査区東端部第2面の路面3上面で検出した。幾筋もの不規則な南北の溝状 遺構が地山の黒色シルト層を削り込む。溝群11の各溝は幅0.2~1.5 m、深さ0.2 m前後ある。粗砂 礫で埋まっており、洪水に伴う水流と土石流によって形成されたものと考えられる。溝の中には部分的にポットホール状に深く掘れている箇所もあった。遺物には、溝群11のひとつからⅢ期中段 階に属する土師器皿が出土した。

溝群5(図版2) 調査区中央部第2面の路面4上面で検出した。溝群11と同様、幾筋もの不規則な南北溝状遺構が地山の黒色シルト層を削り込む。溝群5の各溝は幅0.5~2.0 m、深さ0.2 m前後ある。やはり洪水に伴う粗砂礫で埋まっている。ポットホール状に深く掘れている部分では、検出面からの深さは約0.25 m、径0.15~0.2 mあった。幅約4 m、深さ約0.2 mの落ち込みもあった。

井戸6 (図版2・27、図21) 調査区中央北寄りで検出した井戸の底部である。掘形は隅丸方形

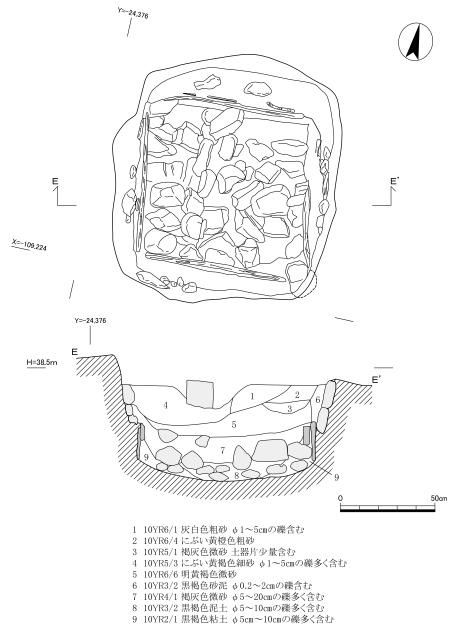


図21 井戸6実測図(1:20)

で、規模は、東西1.15 m、南北1.4 m、深さ0.7 m、底面の標高は37.9 mである。底部に長径20 cm前後の亜角礫を充満させ、四隅に上面の平坦な礫を据えて、それを基準として0.9 m方形の縦板横桟の枠を設ける。縦板はモミ属、横桟はスギ材である。縦板の上部は傷んで失われているが、下部は残存状況が良く、幅0.2 m前後、厚さは2 cmで、建築部材などの転用材とみられる。裏込めには、薄く平らな礫を入れている。

埋土は上層にはにぶい黄褐色から明黄褐色の粗砂から細砂、下層には褐灰色微砂が堆積する。

出土遺物には、塼がある。大きさは一辺が $55 \, \mathrm{cm}$ 、厚さ $12 \, \mathrm{cm}$ ある巨大なものである。ほかに土器類の極小片が伴出した。遺物の時期は $\mathbb{II} \sim V$ 期に属する。

土坑10 (図版2) 調査区のほぼ中央で検出した楕円形の土坑である。規模は、長径0.65 m、短径0.4 m、深さ0.2 m、東西2.1 m以上、深さ0.96 m、底面の標高は38.23 mである。埋土は明黄褐色

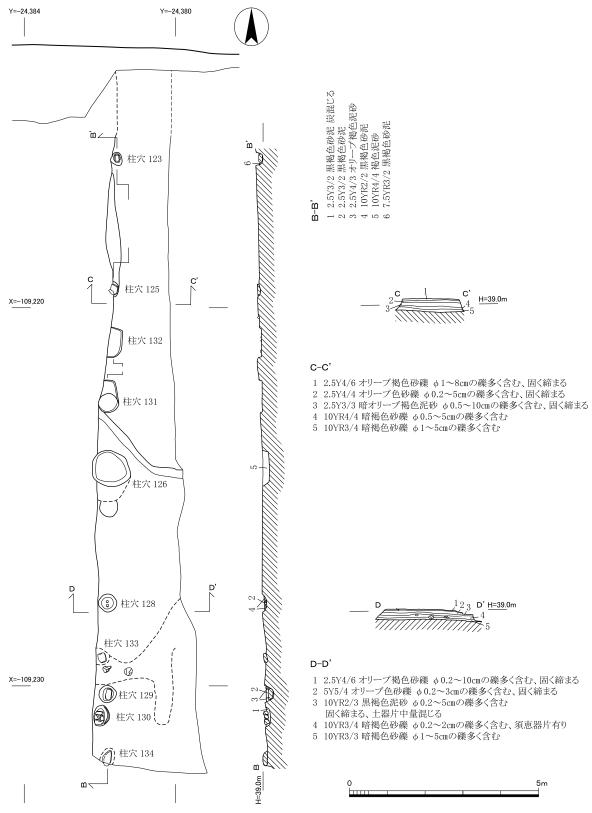


図22 路面12・柱穴列13実測図(1:100)

粘土で、この土坑には杭が打ち込まれる。杭はモミ属の丸杭で直径は $6.4\,\mathrm{cm}$ 、長さは約 $41\,\mathrm{cm}$ で、 $4\,\mathrm{m}$ 面からカットされた長さ約 $10\,\mathrm{cm}$ 先付けが付く。杭の周囲を粘土で巻き、非常にしっかりと打ち込まれた杭である。

路面12 (図版2・27、図22) 調査区中央部で検出した南北方向の路面整地の一部である。第2面の溝8西堀川小路西側溝を覆う位置にあたる。溝8および西堀川小路全体が西堀川の洪水によって完全に埋まった後に施工された路面である。先行して行った南側(1区)の調査では、壁面での土層観察によって確認するに止まった。この結果を踏まえて、2区では氾濫堆積を重機で除去する途中で、路面の検出を行った。規模は、2区では南端で幅約3m、北端で幅約1.4mであったが、東側は路面施工後の西堀川洪水によって削り込まれ、西側は安土・桃山時代の御土居堀によって掘り込まれているため、本来の幅は不明である。路面整地は少なくとも4面重なっていた。上面の標高は北で39.52m、南で38.90mである。各面とも厚さ5~15cmほどで、褐色系の砂泥に礫を敷き固く締める。出土した遺物にはⅧ期に属する土師器皿の他、1~Ⅲ期の灰釉陶器が混入する。

柱穴列13(図版2、図22) 路面12最上面の西端で柱穴や土坑を南北に並んで検出した。検出した柱穴は10基、土坑は1基で、検出分の長さは16mである。柱穴123・125・128・133・129・130・134は礎板(石)を伴う柱穴である。礎板(石)を伴う柱穴の規模は直径0.4~0.45mの円形、深さ0.2mで、礎石上面の標高は最も高いものが、39.14m、最も低いものが38.85mである。柱間は不規則となる。時期差があるものと考えられる。土師器・須恵器・緑釉陶器の小片が出土した。遺物は全て極小片で時期は判定し難いが、当時の西堀川小路の西端を示すものとなる。

氾濫堆積14(図版6・7・26) 東半部全域で検出した西堀川(紙屋川)の洪水堆積層である。西半部の堆積層は安土・桃山時代の御土居の堀の掘削により失われ、南端では掘削制限区域にあたるため面的には検出できなかったが、この堆積は広い範囲に影響を及ぼす。標高は北端の上面で40.80 m、下面で38.0 m、中央東西セクション(図版6・7)での上面で40.6 m、下面で37.8 mで、厚さ約3 mにおよぶ。同セクションでの埋土は、大きく6層に分けることができる。最も古い堆積は溝8を覆う位置で、図版7で氾濫堆積14第6層とした№127・128層となる。その上層には、№119~126の路面12となる層がある。その上層には№117・118(氾濫堆積14第5層)が堆積する。次にその東側に№113~116(氾濫堆積14第4層)、その東側に№102~112(氾濫堆積14第3層)、さらに東側に№66~101(氾濫堆積14第2層)、上層に№49~65(氾濫堆積14第1層)の順に堆積する。各層の礫の向きなどから、大きくは北東から南西に向かって流れたとみえる。洪水による堆積を繰り返しながら、西堀川(紙屋川)が当地において徐々に天井川化していく様子を示している。埋土中からⅡ期中段階から新段階の灰釉陶器の他、土馬の頭部やほぼ完形の中世の花崗岩製五輪塔などが出土した。

(6) 第1-2面の検出遺構(図版3・25・26)

検出した遺構には、室町時代から安土・桃山時代の溝、落込みなどがある。この他にも、土層断面の観察によって、耕作土層とみられる層が何箇所か認められた。

溝15(図版3・25) 中央部で検出した南北方向の溝である。1区南端では掘削制限区域にあたるため面的には検出できなかったが、試掘溝断面で確認、北部(2区)では第1面を2箇所、重機により東西に断ち割り、その平面で確認した。北側・南側とも調査区外へ延長するとみられる。規

模は、南北長約41m分を検出し、北で幅7.1m、深さ0.8m、南で幅7.5m、深さ0.6mである。肩部はなだらかであるが、中央は幅約3mで断面がV字状に深くなる。底面の標高は北端で39.9m、南端で39.5mである。埋土は北端で黄褐色、中ほどでは灰黄褐色、南端では褐色の砂泥層が堆積する。埋土中からW期に属する土師器小片の他、天目茶椀、卸目皿、輸入青磁・白磁・華南三彩小片が出土した。東西セクションの充填堆積物の分析(本報告書付章1)によると、イネ科が多産すること、人里植物が多く認められることから一帯が開けた場所であったことが示唆されている。この時期、一帯は耕作地となり、この溝は耕作のための水路として利用されたと考えられる。

落込み16 (図版3・25) 東端部で検出した南北方向の落ち込みである。北側・南側ともに調査区外へ延長するとみられる。規模は、南北長約40 m、底面はほぼ平坦で、西端には溝を巡らせる。溝は北で幅0.45 m、深さ0.28 m、南で幅約0.6 m、深さ0.2~0.3 mである。溝の底面の標高は北で39.9 m、南で39.8 mである。埋土は上層はにぶい黄褐色泥砂、下層は灰黄褐色泥砂が堆積する。埋土中から土師器・須恵器小片とともに輸入青磁・金属製の飾鋲などが出土した。輸入青磁は龍泉窯の椀で時期はⅥ~Ⅷ期である。

(7) 第1-1面の検出遺構 (巻頭図版1-1、図版4・24・25)

検出した遺構には、堀・溝・盛土などがある。天正19年に築造された御土居に関連する遺構群である。

堀17(図版4・6・7・24・25) 調査区西半部で検出した南北方向溝である。北側・南側は調 査区外に延長する。規模は、検出長約340m、幅14m以上、深さ3m前後、底部幅10m以上であ る。堀の西肩は調査区内では検出せず、さらに西にあったとみられるため、本来の幅は不明であ る。底面の標高は北端で38.4m、南端で37.3mである。堀の東肩はY = 24,381 ラインあたりで南北 に検出した。ほぼ垂直に近い角度で掘り込まれ、素掘りのままである。北壁・東西セクション断面 で確認した限りでは埋土は概ね5層に分けられる。最も古い堆積は図版6・7で堀17第5層とし たNo.20~25の層となり、礫を含む泥砂を中心とする層である。水流があったことを示す。その次 にNo.6~19層(堀17第4層)が堆積する。オリーブ褐色砂泥を中心とする層で、東肩の側から徐々 に堆積したとみられる。次にNo.5層(堀17第3層)が堆積する。炭化物や木質を多く含むオリーブ 黒色泥砂で、御土居堀底の堆積である。次にNo.4層(堀17第2層)、とNo.1~3層(堀17第1層) が堆積する。これらの層は礫を含む黄褐色泥砂を中心とする層が東から西へ斜めに堆積し、No.4層 の下層には御土居の土塁部に栽培されていたと考えられる竹や竹根が多く含まれている。近代に なって短期間のうちに人為的に埋めた堆積である。出土遺物には、近世から近代にかけての多様な 陶磁器の他に、対をなす狐像、銅緑釉の小瓶、泥面子、Ⅵ期の瓦器皿などが出土した。狐像や小瓶 の出土は、土塁に祠のようなものがあったことを窺わせる。また、平安時代の須恵器・緑釉陶器・ 灰釉陶器などが共伴する。御土居を築造した際に平安時代の遺構まで掘り込まれた土で土塁が造 営され、江戸時代を経て、大正2年に「京都府測候所」が当地に移転してくるまでには、御土居の 土塁を崩して、西側の堀を埋めたと考えられる。

溝18 (図版4) 堀17の底部東端、肩の落ち込む位置で検出した南北方向の溝である。規模は、 検出長約25 m、幅0.5~1.0 m、深さ0.1~0.27 mで、底面の標高は北で38.10 m、南で37.72 mである。埋土は灰黄褐色粗砂を中心とする層が堆積する。埋土中から土師器・輸入白磁・施釉陶器(瀬戸)などの小片が出土した。遺物の時期はXII期に属する。

盛土19(図版4) 東半部で検出した。平面では、堀17の東肩より約4m程度東へ引いた辺りから東半部全体に広がる。現代攪乱により多くの箇所を削平されており、凹部に部分的に土層が残るのみである。標高は、北で約40.8m、南で約40.6mであり、深さは北で約0.2m、南で0.1mである。埋土は、礫を多量に含むにぶい黄褐色から褐色砂泥が堆積する。埋土中からVI期に属する土師器皿が出土した他、平安時代の須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁小片・軒丸瓦小片などが出土した。御土居の土塁構築のために積んだと考えられる盛土で、第1-2面の遺構などによる凹み部に残ったものと考えられる。

溝20 (図版4) 中央部で検出した南北方向の溝である。南側(1区)では調査区外へ延長する。 北側(2区)では、底部を少し残すのみであるが、やはり調査区外へ延長するものと考えられる。 規模は、南北長約45 m、北で幅0.5 m、深さ0.18 m、南で幅約1.3 m、深さ0.8 mである。底面の標 高は北端で40.1 m、南端で39.8 mである。埋土はにぶい黄褐色から褐色の砂泥層が堆積する。埋土 中から土師器・須恵器・灰釉・瓦器などの小片が出土した。遺物は全て磨滅した極小片で時期は 判定し難い。この溝が土塁と並存したと考えれば、土塁の西裾の排水溝とみられ、土塁盛土本体は この溝の東に積み上げられたと考えられる。

盛土22(図版4) 中央部西寄りで検出した。堀17の東肩の肩口から東へ一定の幅で平坦面を形成している。北側・南側は調査区外に延長する。規模は、南北長約41 m、幅3.0~3.5 m、深さ1.0 m前後である。上面の標高は北端が40.3 m、南端が40.6 mである。埋土は、上層では黄褐色や褐灰色の粘質土ブロック土を含む暗オリーブ褐色砂泥、下層では明褐色や褐灰色シルトブロックを含む褐灰色泥砂が堆積する。この堆積は御土居の東肩の崩れ防止のため入れ替えた土とみられる。埋土中から土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などの小片の他、輸入青白磁合子が出土した。遺物の時期は中世に属する。この盛土の東側に溝20が掘り込まれていることから、ここを土塁盛土の西端と想定すると堀の東肩から約3 mの幅で平坦部が大走り状に土塁の裾にあったと考えられる。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 京都市 埋蔵文化財研究所 1996年11月
- 2) 吉野秋二氏(京都産業大学)からの御教示による。
- 3) 『延喜式』巻四二 左右京職 凡堀川杭者。不論課不課戸。皆令戸頭輸之。其戸十九人已下一株。廿人已上二株。卅人已上三株。(長 八尺以下七尺以上。本径五寸。末径三寸。)
- 4) 『続日本後記』巻一 仁明天皇 天長十年(833) 五月甲寅(廿八日) 太政官処分。課左右京戸。令輸檜柱一万五千株。以充東西堀河杭料。

4. 遺 物

(1)遺物の概要(表3)

調査では整理用コンテナに157箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類・瓦類・土製品・金属製品・銭貨・石製品・木製品・動植物遺存体などの種類がある。出土遺物の約7割は土器類が占め、次いで木製品が2割程度と多く、その他の種類の遺物は少ない。

遺物は、平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代、明治時代のものが出土している。出土量が最も 多いのは平安時代前期の遺物である。

調査では、第1-1 面から第2 面のそれぞれの遺構から遺物が出土したが、洪水の影響や御土居の築造により、新しい時期の遺構埋土・遺物包含層に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。また、検出した遺構が溝や堀、氾濫堆積という特質上、出土した破片数は多いが接合して復元できる遺物の割合は少なかった。個々の遺物の詳細については、巻末の遺物観察表(付表2~6)に掲載した。出土遺物の時期の判定は、平安京・京都 I 期~XV 期の編年案を準用する。なお、動物遺存体については付章 $2\cdot3$ にまとめた。

(2) 土器類

溝1 (図版9・10・31、表4、付表2)

溝1出土の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器などがあ

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
縄文時代中期			石鏃1点		
奈良時代			瓦4点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、 灰釉陶器、黒色土器、輸入 陶磁器、製塩土器、瓦、土 製品、金属製品、銭貨、石 製品、木製品、動植物遺存 体		土師器37点、須恵器35点、緑釉陶器21点、灰釉陶器29点、黒色土器2点、輸入磁器1点、瓦6点、土製品8点、金属製品1点、銭貨6点、石製品71点、木製品75点、動植物遺存体一括		
中世	土師器、須恵器、瓦器、施 釉陶器、輸入陶磁器、瓦、 金属製品、銭貨、石製品		土師器6点、瓦器2点、施釉陶器2点、輸入磁器1点、瓦3点、金属製品1点、銭貨7点、石製品1点		
江戸時代以降	土師器、焼締陶器、施釉陶器、国産磁器、輸入陶磁器、 瓦、土製品、金属製品、銭 貨		土師器1点、染付3点、施釉陶器 3点、土製品3点、金属製品4点、 銭貨5点		
合 計		177箱	339点(28箱)	0箱	149箱

表3 遺物概要表

[※] コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より20箱多くなっている。

表 4 溝 1 出土土器 破片数計測表

器種	破片数	比率(%)
土師器	4174	51.3
須恵器	2856	35.1
緑釉陶器	286	3.5
灰釉陶器	473	5.8
黒色土器	306	3.8
瓦器	0	0.0
輸入陶磁器	2	0.1
施釉陶器	0	0.0
染付	0	0.0
焼締陶器	0	0.0
磁器	0	0.0
その他	36	0.4
小計	8133	100.0

る。墨痕や墨書のある土器も出土している。出土した土器の総破片数は8,133片である。このうち、土師器が4,174片で51.3%、須恵器が2,856片で35.1%を占め、両者で86.4%を占める。緑釉陶器と灰釉陶器は合わせて9.3%ある。総破片数から土師器破片数を抜いた数値に、小型供膳器(緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿、黒色土器椀・皿)の占める割合は、26.9%となる。緑釉陶器椀・皿の産地は、93.1%が京都産で他は東海地方産であった。なお、この遺構では、上層の黒色系砂泥層出土の土器類と下層の砂礫層出土の土器類とに分けて述べる。

溝1上層

土師器 $(1 \sim 5)$ I 期中段階から Π 期古段階に属する。なお、 $1 \sim 3$ 、5 は、溝の西肩でまとまって出土した。

- 杯(2・3) 広く平らな底部から体部が内湾して開く。2は口縁端部を丸く収める。外面はヘラケズリ、内面と口縁部外面をヨコナデで調整する。3は口縁端部は内側に丸く肥厚する。外面はヘラケズリ、内面はナデで調整を施す。
- 皿(4) 広く平らな底部から体部がやや内湾して開く。口縁端部は肥厚する。内面はヨコナデ、口縁部外面はヘラケズリの後ヨコナデで調整を施す。
- 甕(5) 張りがない体部にやや外反して短い口縁部が付く。口縁部は内外面ともナデ、体部は オサエで凹凸がみられる。体部外面にはハケメを施す。外面の体部から口縁部にかけての一部分に は煤が付着する。

須恵器(6~13) I期中段階から新段階に属する。

- 皿(6) 体部は外湾気味に開き口縁端部は外反する。内外面ともナデ調整。底部には糸切り痕が残る。高台は貼り付けの輪高台。
 - 杯(7) 内外面ともナデ調整。底部はオサエ。高台は貼り付け高台である。焼成はやや不良。
- 蓋(8) つまみ部は欠損する。天井部はヘラケズリ、端部はナデ、内面はナデで調整する。内面は非常に平滑で、全面に墨痕が付着、硯に転用されている。
- 甕(9) 口縁部は外反気味に立ち上がる。内外面ともナデ調整、口縁部内面は斜め方向のハケメをところどころ施す。
- 平瓶(10) 肩部の小片である。内外面ともにナデで調整。胎土は灰白色でよく焼き締まり、天井部には自然釉が付着する。
- 鉢(11) 鉢Fに分類される捏ね鉢の底部である。体部より上は欠損する。円盤状を呈する底部と体部の立ち上がりが残存する。底部外面には、焼成前に先の尖ったもので突き刺した多数の孔がある。
 - 壷(12・13) 12は肩の張る体部に立ち上がりの短い口縁部が付く壷である。張り出した肩部に

把手を貼り付ける。把手には直径5mmの孔が開けられる。残存部では、双耳壷か四耳壷かは判断できない。対極の把手の小片も出土している。13は瓶子と通称される壷である。外面はナデ、完形品のため内面は観察できない。底部は糸切りのままで、体部との境界を強くナデて底部を際立たせる。焼成時に焼き歪んだ結果、体部は斜めにゆがんでいる。

緑釉陶器(14~18) I期新段階からⅡ期中段階に属する。

- 皿(14) 口縁端部は斜め上方につまみ上げ、やや曲折する。体部は外上方にやや内湾して開く。 内外面ともにナデ、細い輪状に高台を削り出す。京都洛西産である。
- 椀(15·16) 内外面ともにすべて薄く釉を施す。京都洛北産である。15は体部が内湾して開き、口縁端部はやや外反する。高台は削り出しの輪高台であるが、底部が厚めでくり込みが浅い。16の高台は細い輪状に削り出す。高台内に「×」印のヘラ記号がある。
- 耳皿(17) 内外面ともにすべて薄く釉を施す。高台は平高台で外面には糸切り痕を残し、特に調整をしない。焼成は良好で硬質。京都産である。
- 壷(18) 大型の壷の底部である。釉薬のほとんどが剥離している。磨滅が激しく、調整は不明。 胎土は淡黄色で粗く、焼成は不良。京都産である。

灰釉陶器(19~22) Ⅱ期古段階から中段階に属する。すべて猿投産である。

皿(19~21) 19は体部欠損のため調整など不明。細い輪高台を貼り付ける。高台内は無釉である。20の内面は厚く釉を施すが外面は無釉。細い輪高台を貼り付ける。高台内に墨痕と見えるものがある。21は内面には厚く釉薬を施す。外面には自然釉が薄く付着する。細い輪高台を貼り付ける。

把手付き瓶(22) 頸部より上部を欠く。丸い体部を持つ。内面にも自然釉。把手接合痕跡がある。胎土は密で焼成は良好である。

溝1下層

土師器(23~25) Ⅱ期古段階から中段階に属する。

甕(23~25) 23の口縁部は外反し、端部は肥厚する。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部はオサエで、強く押された部分は窪む。体部外面には粗いタテ方向平行条線のタタキがみられる。体部内面にはヨコ方向に板ナデがある。内面に薄く煤が付着する。24の口縁部は体部から強く屈曲して外反し、端部は上方に肥厚する。口縁部外面と端部内面はヨコナデ、内面下半はヨコ方向ハケメ。体部外面には凹凸の強いタテ方向の粗いハケメ、内面はナデを施す。25の口縁部は外反して立ち上がり、受け口状を呈する。ヨコナデ調整。頸部のヨコナデが強いため、口縁部と体部の間に段ができる。体部外面は下半は斜め方向のハケメ、上半は凹凸の強いタテ方向の粗いハケメを施す。体部内面はオサエの後、ヨコ方向のハケメで調整する。外面に薄く煤が付着する。

須恵器(26~34) Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に属する。

皿(26) 緑釉陶器皿の形態に近い須恵器である。高台は削り出しの平高台。内面は非常に平滑で墨痕があり、硯に転用したものとみられる。

杯(27~30) 27は高台を持たない杯Aである。底部から直線的に外方向に延びる体部を持ち、

口縁端部を丸く収める。内外面ともにナデ調整。 $28\sim30$ はいずれも貼り付け高台を持つ杯Bである。 $28\sim30$ は内外面ともにヨコナデ調整。29は高台内に焼成する前に付いた2条の線状の傷がある。

- 鉢(31) 体部に内湾して立ち上がり、口縁端部は外反する。内外面はともにヨコナデで調整するが、外面はナデによる凹凸が顕著である。
- 椀(32) 緑釉型の須恵器である。体部は内湾して立ち上がる。内外面はともにヨコナデで調整するが、外面は凹凸が顕著、内面は非常に平滑である。削り出しの蛇の目高台を持つ。高台内に墨書が1字あり「背」と読める(図版42)。
- 甕(33) 短く外反する口縁部が付く。口縁端部は平坦面を持つ。外面には格子目タタキ、内面には当て具の痕跡が残る。当て具には同心円文が刻まれる。
- 壷(34) 瓶子である。内外面ともにナデ。底部と体部との境界を強くナデて、底部を際だたせる。底部は糸切りのままである。底部内面は凹凸が特に顕著である。

緑釉陶器(35~41) Ⅰ期新段階からⅡ期中段階に属する。

皿(35) 体部は外上方に開き、口縁端部を丸く収める。細い輪状に高台を削り出す。底部厚が やや厚めで削りが粗く高台内側に環状の窪みを残す。高台中央に突起を残す。内外面ともに薄く釉 を施す。京都産。

椀(36~40) すべて内外面ともに薄く釉を施す。37・40は猿投産、他は京都産である。36の体部は内湾して開き、口縁部は外反する。底部内面見込みに沈線がある。細い輪状に高台を削り出す。37の体部は内湾気味に開き、口縁端部は外反する。高台部は欠損のため不明。焼成良好な良品である。38の体部は内湾気味に開き口縁端部は外反する。高台は削り出しの輪高台、底部厚は厚めである。39の体部は内湾気味に開き口縁端部はやや外反する。内部見込みに沈線がある。高台は削り出しの蛇の目高台、中央円形のくり込みの径が小さく高台端面の幅が広くなる。40は輪花の椀である。体部外面に縦方向の線刻が認められ、それに対応する内面に島状の高まりをつくる。底部内面に陰刻花文を施す。高台は貼り付けによる輪高台を持ち、高台内まで丁寧に施釉する。高台内にメアトを残す。

把手付き瓶(41) 丸い体部を持ち、頸部は細い。内外面ともナデ調整。頸部に粘土痕があるが、 把手接合痕跡とみられる。猿投産である。

灰釉陶器(42~59) Ⅰ期新段階からⅡ期中段階に属する。すべて猿投産である。

皿(42~48) 42の体部は外上向に開き、口縁部は外反する。釉薬はハケ塗りで高台内と内面底部は無釉である。底部内面には重ね焼きの跡が明瞭に残る。貼り付けの輪高台で、断面は高台端部をやや内方に向けて尖り気味におさめるいわゆる三日月高台である。43の釉薬はハケ塗りで高台内と内面底部は無釉である。底部内面には重ね焼きのメアトが残る。細い輪高台を貼り付ける。44の外面はヘラケズリで調整、内面は釉のため観察できない。釉薬はハケ塗り。一部で釉薬が白濁する。貼り付け輪高台で端部をやや内方に向けて尖り気味におさめる。45の外面はナデ、内面は釉のため観察できない。釉薬はハケ塗りかツケ掛けかは不明。外面は無釉である。貼り付け輪高台で細ため観察できない。釉薬はハケ塗りかツケ掛けかは不明。外面は無釉である。貼り付け輪高台で細

い角高台。高台内には「×」印状に線刻したヘラ記号がある。46~48は体部内面の中位に段が付く段皿である。46の外面はヘラケズリで調整するが、内面は釉のため観察できない。釉薬はハケ塗りである。47の外面はナデ。釉薬は口縁部の内外面にハケ塗り、最後に底部内面に釉を入れる。底部内面には重ね焼きの痕跡がある。貼り付け輪高台で断面三角形、外方向に張り出す。48は内外面ともナデ。高台内と内面底部は無釉。重ね焼きの痕が残る。内面底部は極めて平滑。貼り付け高台の中の三日月高台である。高台内に墨書が1字あり「得」もしくは「嶋」と読める(図版42)。

椀(49~53) 49の体部は内湾して開き、口縁部は外反する。釉薬はハケ塗りで高台内と内面底部は無釉である。内面底部には重ね焼きの痕が明瞭に残る。細い輪高台を貼り付ける。端部をやや内方に向けて尖り気味におさめる三日月高台。50は椀の底部である。外面はナデ、内面は釉のため観察できない。釉薬は先にハケ塗り、その後窯内で自然釉がかかる。外面は無釉。貼り付け輪高台で低い三日月高台的形状を呈する。底部内面には重ね焼きの痕跡がある。高台部にも釉が付着する。51~53は体部、口縁部は欠損している。51の釉薬は内面にかかり、外面は無釉である。細い輪高台を貼り付ける。高台の幅と高さがほぼ同じ角高台である。高台内に墨痕があるが解読不能である。52の釉薬はハケ塗りで高台内は無釉である。底部内面には重ね焼きの痕が明瞭に残る。細い輪高台を貼り付ける。端部をやや内方に向けて尖り気味におさめる三日月高台。高台内に墨痕があるが、欠損部が多く、解読不能である。53の釉薬は高台内と底部内面は無釉である。底部内面は極めて平滑で墨痕があり、硯に転用されたとみられる。細い輪高台を貼り付ける。端部を内方に向けて尖り気味におさめる三日月高台。高台内に墨書が1字あり「珍」と読める(図版42)。

耳皿(54) 内外面ともにナデ。体部は内湾して立ち上がる。残存部は無釉。底部は糸切りのままで未調整である。

脚部(55) 火舎か四脚壷の脚部と考えられる。外面にはすべて薄く釉を施す。六角形に丁寧に ケズリを施し、ふんばる脚をつくる。

壷(57) 瓶子の底部である。内外面ともにナデ。底部周辺のみヘラケズリを施す。底部は糸切りのままで調整していない。釉薬は底部裏面まで垂下する。底部内面にも釉が掛かる。

把手付き瓶(58・59) いずれも上部に把手が付くと考えられる瓶の底部である。58は外面はヘラケズリ、内面はナデ。底部周辺のみナデ。底部にはユビオサエ痕。体部外面および底面に釉を認める。高台部外周に環状の窪みが巡る。59は内外面ともにナデ。底部周辺のみヘラケズリのちナデを施す。釉薬の一部は焼成時に白濁し底部裏面まで垂下し、玉ができる。大きすぎる玉は外して底部を安定させている。底部は平滑なナデで「T」字状に線刻したヘラ記号がある。

黒色土器には椀・皿があるが、小片のため図示できない。

輸入青磁 (60)

青磁椀(60) 体部が直線的に外上方に延びる。越州窯の蛇の目高台の椀の一部である。Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に属する

溝8 (図版11・12・32~34、表5、付表2)

溝8出土の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器などがある。墨痕や墨書のある土器も出土している。出土した土器の総破片数は7,269片である。このうち、土師器が5,003片で68.8%、須恵器が1,650片で22.7%を占め、両者で91.5%を占める。緑釉陶器と灰釉陶器は合わせて4.2%ある。総破片数から土師器破片数を抜いた数値に、小型供膳器(緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿、黒色土器椀・皿)の占める割合は、7.8%となる。緑釉陶器椀・皿の産地は、92.9%が京都産で他は東海地方産であった。なお、この遺構では、下層の黒色系泥砂から粘質土層出土の土器類と上層の砂礫層出土の土器類とに分けて述べる。

溝8下層

土師器(61~87) Ⅰ期中段階からⅡ期古段階に属する。

皿(61~67) 広く平らな底部から体部が斜め上に開く。61は体部上半がわずかに外反する。口縁端部は内側に丸く肥厚する。内面ヨコナデ、口縁部外面はヘラケズリの後、ヨコナデ調整。62・63は内外面ともナデ調整。62は内外面とも赤色顔料が塗布されており、表面は明赤褐色を呈する。底部内外面に墨痕と見えるものがある。63は口縁端部が内側に肥厚する。64は内面はナデ調整、外面はヘラケズリ。65の口縁端部は内側に丸く肥厚する。内面はヨコナデ調整、口縁部外面はヘラケズリの後強くヨコナデ調整を施す。66・67は摂津産とみられる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。66は底部外面にユビオサエの痕跡がみられる。口縁部外面のヨコナデ調整に凹凸がみられる。口縁端部は面取りを施し、やや角ばる。端部内面に凹線が入る。67の口縁端部はやや外反する。

杯(68~79) 68・69の口縁端部はそのまま丸くおさめる。68は底部のユビオサエの痕が顕著に残る。口縁部外面はヘラケズリの後強くヨコナデ調整を施す。69の口縁部内外面はヨコナデ調整。70・72・77~79の口縁端部は面取りを施し、やや角ばる。70の外面はオサエのまま口縁部をヨコナデ調整。内面には墨痕、外面に油煙が付着する。71・75・76の口縁端部はわずかに肥厚する。71の外面はヘラケズリの後、強くヨコナデ調整を施す。72は口縁端部内面に凹線が入る。口縁部内面

表5 溝8出土土器 破片数計測表

器種	破片数	比率(%)
土師器	5003	68.8
須恵器	1650	22.7
緑釉陶器	214	2.9
灰釉陶器	88	1.2
黒色土器	270	3.7
瓦器	0	0.0
輸入陶磁器	2	0.1
施釉陶器	0	0.0
染付	0	0.0
焼締陶器	0	0.0
磁器	0	0.0
その他	42	0.6
小計	7269	100.0

は丁寧にヨコナデ、外面はヘラケズリ。内外面に油煙が付着する。73の体部は斜め上に開き、口縁部はやや外反し、上方にまるくおわる。内面に黒漆が付着、パレットとして使用したものと考える。74の外面はオサエのち口縁端部をヨコナデ調整。76~79は底部からわずかに内湾して体部が斜め上に開く。75・76の外面はオサエのち口縁端部をヨコナデ調整。外面に指頭圧痕がある。77・78には低短な高台が付く杯Bである。77の内面はナデ、外面はヘラケズリを施す。ヘラケズリは図の左上に進行する。口縁部外面は強いナデが凹線状に巡る。78は内外面ともナデ調整、79の内面はナデ、外面はヘラケズリである。

高杯(80・81) 高杯の脚部である。両方とも、脚部外面の成形はヘラケズリ、面取りは七面で丁寧にヘラケズリを施す。脚部内面はヨコナデ。 裾部内外面は磨かずにナデ調整。81には墨書があり、脚部に「佛共」と読 める文字、裾部裏面に「本」の文字がある(図版42)。

甕(82~87) 82は丸みを帯びた体部から短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は内側に肥厚する。外面はタテ方向にハケメ、口縁部内面はヨコナデ。外面には煤が付着する。83の口縁部は外反気味に短く立ち上がり、口縁端部はわずかに立ち上がり肥厚する。体部内面はオサエ、頸部外面にはヨコ方向、体部外面は斜め方向にハケメを施す。器壁は厚い。内外面の一部に煤が付着する。河内産と考えられる。84・85は張りがない体部に外反して短い口縁部が付く。84の口縁端部は内側に折り返し肥厚する。体部内面はオサエ、外面は斜め方向のハケメを施す。内面は褐色に変色、外面には煤が付着する。85の口縁端部は上方に立ち上がる。体部内面はオサエ、外面は斜め方向のハケメを施す。口縁部はヨコ方向のハケメ。外面には煤が付着する。86の口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに立ち上がり肥厚する。体部内面はオサエ、頸部外面にはタテ方向、体部外面にはヨコ方向にハケメ調整を施す。器壁は厚い。内外面の一部に煤が付着する。87の口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部は面取りを施し、角ばる。内面はヨコ方向のハケメ、外面はタテ方向のハケメのち、ヨコ方向にハケメを施す。

須恵器(88~103)Ⅰ期中段階からⅡ期古段階に属する。

杯蓋(88) 外面には自然釉がかかる。天上部は糸切りではなく、ヘラ切り。産地は不明である。 内面は非常に平滑で墨痕が濃く残り、硯に転用している。

皿(89) 体部は外上方に浅く開き、口縁部下でやや立ち上がってにぶい稜線が付く。灰釉陶器の形態を真似た須恵器といえる。内面および口縁部外面に自然釉がかかる。高台は貼り付けの輪高台で、低短で内傾する端面を持ち、外端接地となっている。胎土は暗褐色を呈する。東海産と考えられる。

杯(90~93) 90~92は平坦な底部から体部が斜め上に延びる。口縁端部は丸く収まる。内外面ともナデ。90は焼成がやや不良である。91は低端な高台が付く。焼成は良好である。92は輪積みの痕が残る。焼成は良好である。93は杯の底部である。内外面ともナデ、焼成はやや不良。底部外面に墨書が1字あるが、欠損のため、解読できない(図版42)。

椀 (94) 体部はやや内湾して外上方に開く。口縁端部はわずかに外反する。細い輪高台を貼り付ける。灰釉陶器の形態を真似た須恵器といえる。高台内に墨書があり、「子□所」の文字がある。□には「御」があたるか(図版42)。

童(95~102) 瓶子と通称される童(95~100)、童G(101)、童E(102)がある。95・97~100は、底部は糸切りのままで体部との境界をナデて底部を際立たせている。95は頸部を欠損。外面はヨコナデ調整。体部中位の凹凸が明瞭である。96は体部より下方は欠損。口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ。焼成はやや不良である。97は口縁の内外面ともヨコナデ調整。体部外面はナデ調整であるが、凹凸が顕著である。98は外面の凹凸は顕著ではない。焼成はやや不良で灰色を呈する。99は口縁の内外面ともヨコナデ調整、体部外面はナデで調整するが、凹凸がやや顕著である。100は高さが16.6cmあり大きめの瓶子である。外面のナデは丁寧で、凹凸はない。胎土は密で焼成は良好である。101は縦長の胴部に太くて長い口頸部をのせる。内外面ともナデ。体部と頸部の接

続部は内面で段差が生じている。底部は糸切りのままで粘土片がへばりついたまま焼成されている。歪みが激しい。102は内湾気味に上に開く体部と狭い肩部に外傾する短い口縁部を付す広口の 壷である。底部には低い高台を貼り付ける。内外面ともナデ、後にミガキで仕上げる。焼成は良好 である。

鉢(103) 内湾気味に上に開く胴部を持つ。角ばる高台を貼り付ける。内外面ともヨコナデ調整。焼成はやや不良である。体部外面に墨書があり、「□□所」の文字がある。二文字目は「計」と読める(図版43)。

緑釉陶器(104~110) Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に属する。

皿(104) 釉薬は褐色に変色している。内外面ともに薄く釉を施すが高台内の釉は剥落している。体部は外方向に開き、口縁部は外反する。高台は削り出しの平高台で底部外面はほぼ平坦となっている。京都産である。

椀(105~110) 106は猿投産、それ以外は京都産である。105・110は内外面ともに釉を施す。 体部は内湾気味に開き、口縁端部はわずかに外反する。高台は削り出しの平高台でくり込みはほと んどない。この2点は京都幡枝産である。106は内外面ともに釉を施す。体部は内湾して上に開く。 口縁端部は外反する。端部外側に凹線が巡る。高台は貼り付けの輪高台。わずかに内傾し、外端接 地となっている。焼成は良好である。107・108は内外面ともにすべて釉を施す。体部より上方は欠 損のため不明。高台は削り出しの平高台でくり込みはわずか。107には高台内に「西」と読める焼 成前に線刻された文字がある。108には高台内に「T」字状のヘラ記号がある。109は内外面とも に薄く釉を施す。体部は内湾気味に開き、口縁はそのまま終わる。高台は削り出しの蛇の目高台。 胎土は灰白色で焼成はやや不良。

灰釉陶器(111~114) Ⅱ期古段階から新段階に属する。すべて猿投産である。

皿(111~113) 111・112は幅と高さがほぼ同じの角高台を貼り付ける。111は体部欠損のため、調整などは不明。内面を釉でハケ塗り、外面は無釉。高台内に墨書が2字あり、「南□」の文字がある。下半は欠損のため不明である(図版42)。112も内面は厚く釉を施し、外面は無釉。体部上位に稜が付く稜皿である。口縁端部は外反する。高台内に墨痕と見えるものがある。113は三足皿の脚部である。内面および脚の外側部に釉を施す。脚部は貼り付け。八面に面取りされ、丁寧にケズリ調整、外側に切り込みを入れる。

壷(114) 肩の張った体部に直立する短い口縁部を付す小壷である。底部は欠損のため不明。口 縁から外面上半部まで灰オリーブ色の釉薬を施す。胎土は灰色で焼成は良好である。

黒色土器(115・116) Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に属する。

皿 (115・116) 広く平らな底部から体部が外反気味に開く。内面のみ黒色に仕上げられる。115 の口縁部は外反し、水平近くまで傾斜する。細い高台が付く。内面は丁寧なヘラミガキを施す。116 の外面は口縁端部はナデ、下半はオサエのちケズリで調整している。

溝8上層

土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などがある。Ⅱ期古段階から中段階に属する。

土師器には杯(117)がある。小さい平底から体部がやや内湾して開く。口縁端部の肥厚は小さ い。内面はナデ、外面はヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。胎土は橙色で密、焼成は良好であるⅡ期 古段階に属する。

須恵器には壷(118)がある。高さ9.5cmの小型の瓶子で、外面はナデで調整し、比較的滑らかで ある。底部は糸切りのままで、体部との境界をヘラケズリで際立たせる。体部の数箇所に墨痕があ り、一箇所は「本」と読める(図版43)。Ⅱ期古段階から中段階に属する。

緑釉陶器には椀(119)がある。内外面ともにすべて薄く釉を施す。体部より上方は欠損のため 不明。高台は削り出しの平高台でくり込みはわずか。底部外面はほぼ平坦となる。高台内に「×」 印のヘラ記号がある。胎土は灰白色で焼成はやや不良。京都洛北産。Ⅱ期古段階に属する。

灰釉陶器・黒色土器などは小片のため図示できない。

溝群11(図23、表6、付表2)

遺物は路面を最終的に破壊した溝から出土したものである。出土した遺物には土師器・須恵器・ 緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器がある。出土した土器の総破片数は57片である。このうち、土師器 が39片で68.4%、須恵器が10片で17.5%を占め、両者で86.0%を占める。これらの土器はⅢ期中段 階に属する。

土師器(120) 器壁の薄い皿である。体部は外湾気味に開き、口縁端部は外反する。内外面とも オサエのちナデ調整。Ⅲ期中段階に属する。

須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器は小片のため図示できない。

井戸6

井戸6から出土した土器には土師器、緑釉陶器、磁器の小片がある。土師器や緑釉陶器にはⅢ期 のものがあるが、磁器の小片は∨期を示す。いずれも極小片のため、図示できなかった。

路面12(図23、付表2)

路面12出土の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器などがある。最も新 しい遺物はⅧ期に属する。土師器杯と灰釉陶器杯・蓋を図示した。 表6 溝群11出土土器

土師器(121) 体部は上方に開く杯である。口縁部は内外面ヨコナデ、 口縁端部は丸くおさめる。Ⅷ期に属する。

灰釉陶器(122・123) 122は猿投産の椀である。釉は体部の内外面と 底部内面の中心部に施す。高台は貼り付けでやや高く、外側外面が外方向 へ張り出しやや尖り気味におさめる。Ⅲ期に属する。123は猿投産の蓋で ある。外面には厚く釉を施す。内面はナデ。天井部はゆるく内湾、口縁部 は天井部よりほぼ垂直に折れ曲がる。中央部を欠くためつまみの有無は 不明である。I期に属する。

氾濫堆積14(図23、表7、付表2)

氾濫堆積14出土の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、 黒色土器、輸入陶磁器などがある。出土した土器の総破片数は716片であ

破片数計測表

器種	破片数	比率(%)
土師器	39	68.4
須恵器	10	17.5
緑釉陶器	1	1.8
灰釉陶器	5	8.8
黒色土器	2	3.5
瓦器	0	0.0
輸入陶磁器	0	0.0
施釉陶器	0	0.0
染付	0	0.0
焼締陶器	0	0.0
磁器	0	0.0
その他	0	0.0
小計	57	100.0

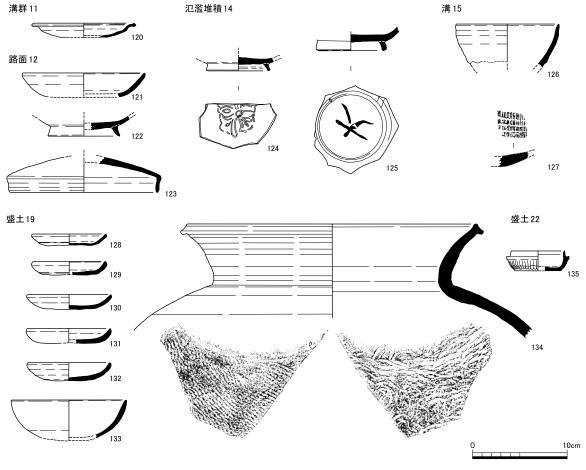


図23 出土土器実測図1 (1:4)

る。このうち、土師器が277片で38.7%、須恵器が304片で42.5%を占め、両者で81.1%を占める。 最も新しい遺物は唖期に属する。緑釉陶器皿と灰釉陶器椀を図示した。

緑釉陶器(124) 全面に釉を施す椀である。高台は貼り付けで比較的高く、断面形状は長方形を 呈する。貼り付け部の根本が太くなっている。高台内にメアトが残る。底部内面に陰刻花文があ 表7 氾濫堆積14出土 る。東濃産と考えられる。II 期新段階に属する。

土器破片数計測表

器種	破片数	比率(%)
土師器	277	38.7
須恵器	304	42.4
緑釉陶器	42	5.9
灰釉陶器	51	7.1
黒色土器	33	4.6
瓦器	0	0.0
輸入陶磁器	4	0.6
施釉陶器	0	0.0
染付	0	0.0
焼締陶器	0	0.0
磁器	0	0.0
その他	5	0.7
小計	716	100.0

灰釉陶器(125) 体部内外面に釉を施す椀である。底部内面に重ね焼き の痕が残る。高台はやや高く、外側面下部が丸みをもって外下方へ張り出

し、端部をやや内方に向けて尖り気味におさめる三日月高台。高台内に墨書が1字あり、「大」と読める(図版42)。Ⅱ期中段階に属する。

溝15(図23、付表2)

溝15出土の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色 土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。最も新しい遺物はⅧ 期に属する。施釉陶器椀・卸目皿を図示した。図示できなかったが、輸入 陶磁器には華南三彩小片がある。

施釉陶器 (126・127) 126 はいわゆる天目茶椀である。口縁下部が肥厚気味になる。胎土は灰白色で釉薬は暗褐色から黒褐色に発色する。高台

部を欠くため、時期は判定し難いが、15世紀頃と考えられる。 127は卸目皿である。平坦な底部から体部が外上方に開く。小片のため、調整の詳細は不明であるが、底部外面は糸切り痕跡あり、体部外面はナデである。底部内面に卸目を刻む。いずれも瀬戸美濃産である。

落込み16

落込み16出土の土器類には、 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉

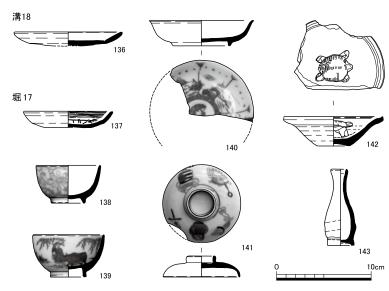


図24 出土土器実測図2(1:4)

陶器、黒色土器、輸入陶磁器などがある。いずれも極小片のため図示できないが、輸入青磁に龍泉 窯の椀があり、Ⅵ~Ⅷ期に属する。

盛土19(図23、表8、付表2)

盛土19出土の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器などがある。出土した土器の総破片数は2,934片である。このうち、土師器が1,551片で52.9%、須恵器が676片で23.0%を占め、両者で75.9%を占める。平安時代の土師器や緑釉陶器、灰釉陶器が割合多く混入する。土師器皿・瓦器椀・須恵器甕を図示した。他の土器類は小片のため図示できなかった。

土師器($128 \sim 132$) いずれも小型の皿で、平坦な底部から体部が内湾気味に開く。調整は、内面はナデ、口縁の内外面は 1 段のヨコナデ。底部外面の調整は $128 \cdot 130$ はオサエのちナデ、 $129 \cdot 132$ はオサエ、 131 は磨滅激しく不明である。いずれも VI 期に属する。

瓦器(133) 椀である。底部は欠損のため不明。体部は内湾して開く。 体部外面オサエ、口縁部外面はヨコナデ。体部内面、口縁部内面はヨコナ デ後、粗いヨコミガキを施す。時期はⅥ期に属する。

須恵器 (134) 肩の張る体部に、ゆるやかに外反する口縁部が付く甕である。口縁端部は立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデ。体部外面には平行のタタキメ、内面には当て具の痕跡が残る。当て具には同心円文が刻まれる。

盛土22 (図23、付表2)

盛土22出土の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器などがある。最も新しい遺物はWI期に属する。輸入陶磁器には合子を図示した。他の土器類は小片のため図示できない。

輸入青白磁(135) 宋時代の合子の身である。内湾して上に開く体部に

表8 盛土19出土土器 破片数計測表

器種	破片数	比率(%)
土師器	1551	52.8
須恵器	676	23.0
緑釉陶器	202	6.9
灰釉陶器	158	5.4
黒色土器	78	2.7
瓦器	94	3.2
輸入陶磁器	75	2.6
施釉陶器	12	0.4
染付	0	0.0
焼締陶器	69	2.4
磁器	1	0.0
その他	18	0.6
小計	2934	100.0

表 9 堀 17 出土土器 破片数計測表

器種	破片数	比率(%)
土師器	698	30.1
須恵器	304	13.1
緑釉陶器	95	4.1
灰釉陶器	52	2.2
黒色土器	35	1.5
瓦器	10	0.4
輸入陶磁器	23	1.0
施釉陶器	501	21.6
染付	394	17.0
焼締陶器	88	3.8
磁器	63	2.7
その他	57	2.5
小計	2320	100.0

短い口縁部が付く。外面に鎬を付ける。口縁部を除く外面の上半と内面に 淡青色の釉が施される。

溝18 (図24、付表2)

溝18出土の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色 土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。土師器皿を図示し た。他の土器類は小片のため図示できない。

土師器 (136) 底部屈曲部に圏線が巡る皿である。底部は平坦、体部は外上方に開く。体部外面オサエ、体部、口縁部内外面はヨコナデ。XII期に属する。

堀17(図24、表9、付表2)

堀17埋め土から出土の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、施釉陶器、染付、焼締陶器などがあ

る。出土した土器の総破片数は2,320片である。このうち、土師器が698片で最も多く30.1%、次に多いのが施釉陶器で501片、21.6%、次に染付で394片、17.0%を占める。遺物には平安時代から近代の陶磁器が含まれる。瓦器・染付・施釉陶器を図示する。

瓦器 (137) 皿である。体部・口縁部は内湾して開く。口縁部はやや外反気味におわる。底部裏面オサエ後ナデ、口縁部外面ヨコナデ。底部内面ナデ、口縁部内面ヨコナデ後粗いヨコミガキ。底部内面に縞状の暗文を施す。 VI 期に属する。

染付(138~140) 138・139は小ぶりの椀である。138は外面に草花文と家屋、風鈴が描かれる。139は牛と牛を引く農民らしき人物、遠景に農家と、鄙びた風景が描かれる。内面および高台内は無文である。140は小皿である。内面に「帆帰場矢」「月秋山石」「雁落田堅」の文字とその風景が描かれる。近江八景が描かれていたものと見られる。

施釉陶器($141 \sim 143$) 141 は蓋である。達磨ややじろべえ、おもちゃなどがカラフルに描かれる。子供用の食器であろう。142 は深さのある蓋で把手には写実的な亀形を付ける。内面全面に灰オリーブ色の釉を施す。143 は銅緑釉の小瓶である。狐像($\pm 9 \cdot 10$)とともに出土した。

(3) 瓦類(図版13·35、図25、付表3)

各遺構から軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼が出土した。全体の遺物破片数28,189片の中に占める瓦類の破片数は840片と3.0%で、比較的少ない。これは、当調査地では西半の宅地部分は後世の御土居の堀によって壊され遺構が検出できなかったためであろう。その中でも、軒丸瓦と軒平瓦の占める割合は1.3%で非常に少ない。しかしながら、軒瓦には旧都搬入瓦の割合が高い特徴がある。

軒丸瓦

瓦1は珠文付複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。平城宮6291 A b型式と同笵である。凸型中房で蓮子は1+6。蓮弁は盛り上がり子葉がある。外区には二重の圏線に囲まれた珠文帯がめぐる。外縁は傾斜縁で線鋸歯文を配する。瓦当部側面および丸瓦部凸面はタテ方向ケズリ。裏面は布目でのちナ

デ調整を施す。溝1下層から出土した。

瓦2は蓮華文軒丸瓦である。凸型中房で蓮子数は欠損のため不明である。複弁で蓮弁は盛り上がり、子葉がある。間弁はV字形。瓦当部裏面はナデ調整を施す。平安時代前期に属する。1区攪乱 坑から出土した。

瓦3は蓮華文軒丸瓦である。単弁で蓮弁が盛り上がり、子葉があり、互いに接する。界線は太い。 瓦当部裏面はナデ調整、側面は磨滅激しく不明である。平安時代前期に属する。盛土19から出土した。

瓦4は巴文軒丸瓦である。尾部は長く互いに接し界線となる。外区には珠文が密に巡る。瓦当部 側面はヨコナデ調整を施す。鎌倉~室町時代に属する。堀17埋土から出土した。

瓦5は巴文軒丸瓦である。頭部は離れ、尾部は長く互いに接し、界線となる。巴文の中に「大」の文字を配する。瓦当部側面および丸瓦部凸はタテケズリのちナデ、瓦当部裏面ヨコナデ、丸瓦接合部に弧状のナデ調整を施す。瓦当部裏面は不調整。焼成は良好で硬質である。鎌倉~室町時代に属する。氾濫堆積14から出土した。

軒平瓦

瓦6は偏行唐草文軒平瓦である。藤原宮6641C型式と同笵である。唐草文は左から右へ7転偏行する。主葉は連続して緩やかに反転し、先端は強く巻き込む。上外区には珠文を密に配し、下外区と脇区には線鋸歯文を配する。貼り付け成形の段顎で顎部凸面ヨコケズリ、裏面ヨコナデ、側面タテケズリ、平瓦部凹部は布目でのちナデ調整を施す。平瓦部裏面には、瓦当面より約20cm離れた箇所から平行叩きがある。溝8精査中に出土した。

瓦7は唐草文軒平瓦である。平城宮6664型式と同文である。唐草は各単位が離れ、強く巻き込む支葉もある。外区は珠文が巡る。左上の珠文は紡錘形に変形している。曲線顎を持つ。瓦当部凹面ケズリのちヨコナデ、顎部裏面はタタキのちタテナデ、側面はタテケズリのちタテナデ、平瓦部凹面はタテナデ調整を施す。瓦当部周縁は1.5cm前後の面取りを施す。溝8上層より出土した。

瓦8は唐草文軒平瓦である。平城宮6663型式と同文である。中心飾りは上向きC字形で、中に 花頭文を配する。唐草単位は離れ、主葉は巻き込む。界線は二重。曲線顎を持つ。顎部凸面ヨコナ デ、顎部裏面ナデ調整を施す。1区攪乱坑から出土した。

瓦9は唐草文軒平瓦である。唐草文の主葉は大きく強く巻き込む。支葉は各単位が離れる。外区には珠文が巡る。曲線顎を持つ。裏面は磨滅が激しいがナデ、側面はケズリ、平瓦部凹部は斜めにケズリ調整を施す。平安時代前期から中期に属する。氾濫堆積14から出土した。

瓦10は唐草文軒平瓦である。池田瓦窯出土瓦NH11と同文である。中心飾りは対向変形C字形で、中に裏文字の「修」の文字を配する。唐草文は両側に反転する。唐草は各単位が離れ、主葉・支葉は巻き込む。外区は珠文が粗く巡る。曲線顎を持つ。瓦当部凹面ケズリのちナデ、顎部凸面ヨコケズリ、裏面ケズリのちタテナデ、側面はケズリのちナデ調整を施す。色調は橙色を呈し、焼成はやや軟質である。平安時代中期に属する。氾濫堆積14から出土した。

瓦11は唐草文軒平瓦である。 唐草の各単位が離れ、巻き込みは緩やかで先端は丸くなる。 段顎を

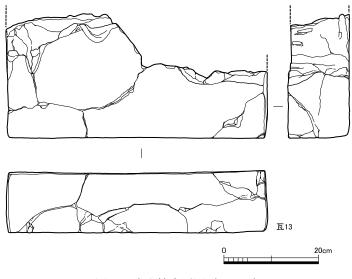


図25 出土塼実測図(1:8)

持つ。顎部凸面はケズリのちヨコナデ、裏面ヨコナデ、側面はケズリ、平瓦部は凹部タテナデ調整を施す。 瓦当部上端は面取りを施す。安土・ 桃山時代に属する。堀17埋土から 出土した。

平瓦

瓦12は粘土板一枚作りの平瓦である。凹面側には布目痕。端部から4cm位まではナデて布目を擦り消している。凸面側には縄タタキ、側面はケズリ、凹面側の縁は面取りを

施す。端面に「里」の文字の印(一辺1.2cm)が押捺される。胎土は精良で焼成は硬質である。平 安時代前期に属する。溝8に溝7が注ぎ込む地点で出土した。

塼 (図25)

瓦13は大型の塼である。厚さ13.0cm、幅55.0cm、奥行きは欠損のため不明である。片面はナデ、もう片面はミガキ、両側面もミガキを施したようで平滑。断面は2層に別れることから、2度に分けて粘土を型枠に詰め込んで成形したと見られる。色調は浅黄橙色を呈する。未報告であるが、鎮守庵瓦窯跡採集品に類似のものがある。井戸6から出土した。非常に大きいもので、転用された後、最後には井戸に放り込まれたものかもしれない。

(4) 土製品(図版14·36、図26)

土製品には硯、ミニチュアカマド、土馬、伏見人形、泥面子などがある。

現(土1~4) 土1~3は須恵器質の陶硯、土4は黒色土器である。土1・2・4は溝1上層、土3は盛土2から出土した。土1は陸部に内堤が設けられた二面硯である。おそらく中心となる位置に底辺幅1.3cm高さ0.8cmの断面半円形の仕切りがある。擦り面は非常に平滑で、墨痕が残る。下端部にも外堤が形成されている。左辺の外堤は残存部上部で高さ1cm、下側の外堤は高さ0.6cmあり、上面および側面はヘラケズリで成形している。裏面も丁寧にヘラミガキを施す。裏面の脚は根本から折れており、ヘラで多角形に面取りした際の痕跡や脚取り付け位置にヘラ先で何箇所も窪みを付けている痕跡が残る。土2は左下部と脚が残存する風字硯である。擦り面は非常に平滑である。墨痕は確認できない。側面、裏面は丁寧なヘラケズリ。脚部は丁寧に八角錐に作ってから貼り付けている。脚の高さは2.2cmある。焼成は良好で硬質である。土3は右下部と脚が残存する風字硯である。わずかに残存する擦り面は非常に平滑であるが墨痕は確認できない。右辺の外堤は高さ1cmあり、外堤の上面および側面はヘラケズリで成形している。裏面は丁寧にヘラミガキを施す。裏面の脚は粘土を貼り付けた後、断面四角形に面取りし、最後に四つの角を細く面取りする。脚の

高さは2.8cmある。焼成は良好で硬質である。土4は陸部が残存する風字硯である。右側の脚が残存、左側には脚の剥離痕跡がある。幅は約14cmで隅に丸みをつける。表面はヨコ方向にヘラミガキを施した後、縁部に沿ってヘラミガキを重ねるが硯としてよく使用されたため器壁が磨滅し、ヘラミガキも擦り消されており、特に左半が顕著である。縁部の内側には浅い沈線が巡る。裏面は脚を取り付けた後、ヨコ方向にヘラミガキを施し、最後に外堤部にヘラミ



図26 伏見人形

ガキを重ねる。脚は六角形に面取りされ、高さ2.8cmある。焼成は良好で硬質である。

ミニチュアカマド(土5) カマドを小型化したもの。焚口の左上方部分の破片である。焚口には廂を持つ。内面はナデ調整であるが他の部分は磨滅が激しく調整は不明である。溝1下層から出土した。

土馬(土6~8) 土6・7は四肢、頭部、尾部は欠損している。土6は磨滅が激しい。体部の全長は9.5cmあり、比較的大型である。溝1下層から出土した。土7は肩の輪郭が明確に残る。体部の全長は4.0cmで比較的小型である。溝8上層から出土した。土8は土馬の頭部である。粘土円盤を折り曲げて頸部を挟み、頭部とする。竹筒を押し付けて目を表現している。氾濫堆積14から出土した。この他、図示できなかったが、小型の土馬の脚あるいは尾となる小片が3片、溝8から出土している。いずれも粘土をつまみ出して形を整えるだけで簡便に作られている。

伏見人形(土9・10) 両方とも狐像の頭部である。中空で型合せ成形である。頸部内面に粘土 紐を押し込み、強度を持たせている。作りは丁寧で、目鼻の細部まで表現される。表面には雲母が 付着する。9は玉を銜える。にぶい橙色を呈する。10は下顎が欠損しているが、上顎下面の状況か ら開口していたと見られる。橙色を呈する。図版では頭部のみ示したが、尾や台座なども供伴し た。堀17埋土から銅緑釉の小瓶(143)とともに出土した。

泥面子(土11) 「三つ巴」の図柄を持つ泥面子で側面は八角形に面取りされた形状である。型による成形で厚さは0.6cm。にぶい橙色を呈し、比較的硬質である。堀17埋土から出土した。

(5) 金属製品(図版14·36)

金属製品には銙具、鋲、金具、煙管などがある。

跨具(金1) 金属製の帯飾り具である銙具の一部。垂穴および鋲足の形跡がないことから裏金具(座金)とみられる。鋲穴の残存部がかろうじて残る。上辺部に丸みを持つ。表面側は面取りを施し、ひっかからないようにしている。表面には擦り痕が認められる。材質は銅である。溝8下層

から水晶製数珠玉などとともに出土した。

鋲(金2) 円柱状箱型の頭部内側の中央から、断面四角形の棒状金具が延びる。先端は欠損するがおそらく尖る。頭部上面は錆で見えにくいが表面は滑らかであったようだ。飾鋲と考えられる。材質は銅である。落込み16から出土した。

金具(金3) 円形の鐶。断面円形の棒状金具を円形に丸める。紐金具と考えられる。材質は銅である。土塁19上層から出土した。

煙管(金4~6) 金4・5は雁首、金6は吸い口である。金4は火皿の下に一重の補強体を巡らす。脂返しを介して火皿は高い位置にある。火皿窓を有する。中に竹製の羅宇が一部残存する。 鍛造溶接、材質は銅である。堀17埋土から出土した。金5は火皿の下に補強体はない。火皿は浅く、脂返しを介して低い位置にある。竹製の羅宇が残存している。鍛造溶接、材質は銅である。中央部攪乱坑から出土した。金6は口付けから緩やかな曲線で肩に至る。中に竹製の羅宇が残存する。鍛造溶接、材質は銅である。盛土19より出土した。

(6) 銭貨(図版15·36、図27·28、付表4)

平安時代に鋳造された皇朝十二銭、室町時代から江戸時代の渡来銭、江戸時代に鋳造された寛永 通寳、不明のものと計23枚が出土している。不明のものは、錆や崩壊により残存状況が良くなく、 極小片のものなどで、これら5枚を除いて18枚を提示する。

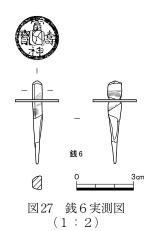
皇朝十二銭(銭 $1 \sim 6$) 皇朝十二銭は 6 枚ある。すべて遺存状態が良好で、文字は非常に鮮明である。すべて溝 8 下層から出土した。

神功開寳(銭1)は3番目の鋳造で天平神護元年(765)初鋳である。

隆平永寳(銭2)は4番目の鋳造で延暦十五年(796)初鋳である。

富寿神寳(銭3~6)は5番目の鋳造で弘仁九年(818)初鋳である。銭6は銭の穿孔(一辺6.25 mm×6.20 mm)に長さ4.4 cmの木製棒状具(ヒノキ)が差し込まれた状態で出土した。棒状具は頭頂部が一辺6.95 mm×4.90 mmの四角錐で頭部を山型につくる。先端は鋭く削って尖らせる。銭の面側から棒状具で打ち止めた状態だとみられる。頭部から下の0.5 cm~2 cmの位置に墨痕がある。

渡来銭(銭 $7 \sim 13$) 渡来銭には北宋銭が7枚ある。このうち、銭 $7 \sim 12$ は6枚が重なって出土





した。一番上が銭7の嘉祐元寳 (北宋、1056初鋳)である。その 下に5枚(銭8~12)が密着し ていた。これらは盛土22から出 土した。他に銭13の嘉祐通寳 (北宋、1056年初鋳)が盛土19か ら出土した。

国内銭(銭14~18) 国内銭は 寛永通寳が5枚ある。すべて裏 面は無文である。銭14・15は第1面遺構検出中、16~18は攪乱坑掘削中に出土した。

(7) 石製品(巻頭図版2、図版15·36、図29~31、付表5)

石製品には、水晶製数珠玉(石 $1 \sim 70$)、石帯(石 71)、五輪塔(石 72)、石鏃(石 73)がある。 水晶製数珠玉(石 $1 \sim 70$) 溝 7 が西から溝 8 に注ぎ込んだ地点でほぼまとまって合計 70 個体出土した。すべての数珠玉の出土状況を確認できたわけではないが、出土状況を確認したもの(巻頭図版 2)を見る限り、一連の数珠玉が投棄されたものと考えられる。

いずれの玉も中心に紐通し孔が貫通する。全70個体のうち、特に大粒で扁球体を呈するもの(石 $1\cdot 2$)が2個体ある。他はほぼ球形であるが、厚さと小口径が同じのものは1点で、60点は厚さが小口径をわずかに下回り、7点は厚さが小口径を上回る。重さは $0.617\sim 2.188g$ 、厚さは $6.85\sim 10.65\,\mathrm{mm}$ 、小口径は $8.25\sim 13.20\,\mathrm{mm}$ 、通し孔の孔径は $1.20\sim 4.00\,\mathrm{mm}$ の範囲にある。比重は $2.65\sim 2.68$ であることから、すべてが水晶製であるといえる。これら70個体のなかで唯一、7.500は紫水晶であるが、他はほぼ無色透明である。特に大粒の7.500、平均的な7.500、平均的、7.5

石1・2は扁球体で、石1は重さ2.188g、厚さは10.05mm、小口径は13.20mm、孔径は3.15mmである。一方の通し孔周辺は扁平であるが、もう一方には尖る割れ口があり、連続する何かが付随していたのかもしれない。石2は重さ2.184g、厚さは10.65mm、小口径は13.00mm、孔径は4.00mmである。通し孔周辺は1mmの幅で扁平に研磨される。もう一方の通し孔周辺は導き孔が目立つ。石3は、重さ1.535g、厚さは10.50mm、小口径は10.25mm、孔径は1.65mmで、球形の中でもっとも大きい。石50は紫水晶を使用しているが、わずかに無色透明な部分がある。重さ0.947g、厚さ8.05mm、小口径9.45mm、孔径2.00mmと小ぶりである。石70は重さ0.617g、厚さは6.95mm、小口径は8.25mm、孔径は1.55mmで、球形の中でもっとも小さい。やや歪んだ球形である。全70個体から特に大粒の石1・2を除去した68個で平均値を計算すると、重さ0.998g、厚さ8.64mm、小口径9.15mm、孔径1.61mmとなる。通し孔はいずれも、孔の周辺が不整形でわずかに陥没している。孔を穿つ際には球面に鋭いもので何度も突き、導き孔を拵え、そこから錐状のもの(おそらく石針)を高速回転させて球体の半分まで孔を穿ち、今度は反対側から同様にして孔を穿ち貫通させたものと考えられる。石55は導き孔が横に拡がる。石34・39は、通し孔が中央部で若干食い違っており、一直線とならず、くの字に折れている。なお、通し穴を3方向(T字状)に穿つ玉はなかった。

石帯(石71) 丸鞆の完形品である。1区第1面遺構 検出中に出土した。材質は黒色珪質頁岩製で黒色を呈 する。上面と側面は丹念に研磨され、光沢が強い。一 方で、裏面は研磨が粗く擦り痕を認める。裏面の一部 に研磨が行き届かない箇所がある。これは、原石から 素材を切り出した時、石切り鋸を使用せず、打撃で

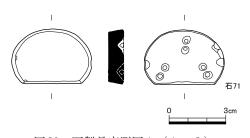


図29 石製品実測図1 (1:2)

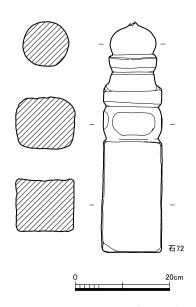


図30 石製品実測図2(1:8)

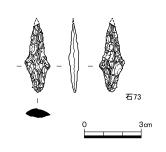


図31 石製品実測図3(1:2)

割ったタイプのものであることがわかる。裏面の潜り孔は3 箇所とも完存、下辺寄りの左右と中央上部に放射状に付ける。 孔は最初の窪みと次に開けた細い穴との境界部に角度の差が明確に認められる。

五輪塔(石72) 一石五輪塔である。 2 区において氾濫堆積14 から出土した。材質は花崗岩製で黄褐色から明褐色を呈する。一辺が11.0~12.4 cmの方形柱状で、高さ45.6 cmである。ほぼ完形で空輪部の先端のみを欠く。組み合わせではなく一体成形で地輪部は四角柱。表面は平坦に加工するが、4 面のうち1 面は比較的凹凸がある。各面には文字等、刻まれていない。墨書なども認め

られなかった。このタイプの五輪塔は中世より製作されるようになった。

石鏃(石73) サヌカイト製の有茎石鏃である。溝8下層から出土した。全面風化が著しく灰色を呈する。長さ3.65 cm、最大幅1.32 cm、最大厚0.52 cm、重さ1.495 g。両面押圧剥離で製作、先端の欠損は使用時の可能性が高い。時期は縄文時代中期頃とみられる。

(8) 木製品(巻頭図版2、図版16~23·37~41、付表6)

木製品は平安時代の西堀川小路に関連する溝1・溝8、安土・桃山時代以降の御土居堀(堀17・溝18)から出土した。大半は溝8からの出土品が占め、木簡、斎串、人形、板状製品、付け木、棒状加工品、箆状加工品、留針、横櫛、木針、柄状加工品、匙、檜扇、横槌、籠、下駄、挽物、刳物、曲物と多種多様である。製品はすべて樹種鑑定を行った。その他にも、加工痕跡がある板材、角材、棒材、部材、削り屑、木炭などが大量にあった。植物遺体としては、クリ核皮、種実、瓢箪、自然木などがある。

図示した木製品は、木31は溝1出土、それ以外はすべて溝8から出土した。文章中で樹種について表記のないものはヒノキ製である。

木簡(木1・2) 木1は物忌札である。頭部を東に向けほぼ水平で文字面を上にした状態で出土した。残存長は17.65cm、最大幅は3.1cm、厚さ0.4cmである。短冊状の板の上端を両端から斜めに切り落とし、圭頭状につくる。下端に行くに従い次第に幅を狭めるが、下端部は欠損しているため形状は不明。表面に上端1.5cmから8.8cmの間に「今日物忌」の墨書が記される(図版43)。裏面には、文字は認められない。京都市内での物忌札の出土は4件目である。木2は短冊状の板片であるが、両端および片側面を欠損するため、原形は判明しない。片面には「□銭十八貫百□」、もう片面には「百五十□」(□は「文」と読める)の墨書が記される(図版43)。材質はスギ。

斎串(木3~7) 木2~6は上端を圭頭に切り落とし、両側面の左右対称位置で三角形に切り

欠くV式である。木 $3\sim5$ は下端欠損のため形状不明。木5は切り込みが完全に左右対称ではなく、わずかにずれている。木 $6\cdot7$ は上端・下端欠損のため形状不明。木7は切り欠きが片側面だけである。

人形(木8~13) 両側面から切り込みを入れて両腕をあらわす人形である。すべて目鼻口の描写はなかった。木8~11 は上端を圭頭に切り落とし、頭部をあらわす。頸部の切り欠きは一辺が長く一辺が短い。木8・9 は下端の木口から深い切り欠きをいれて両足をあらわす。両腕の先端は欠損しているが、痕跡はある。木10~13 は下端欠損ため不明。木11 は側面の左右 2 箇所に切り込みを入れる。木12・13の頭部は両角を斜めに切り取り、台形にかたどる。

板状加工品(木 $14\sim17$) 木 $14\cdot16$ は厚さ $0.1\sim0.3$ cmの薄板の加工品で、人形か斎串の一部と考えられる。木17は割板材からつくる扁平な木片であるが、粗雑に表現された鳥形であろう。側面形で表現されており、径0.2cmの穿孔があり、ヒゴを挿入した痕跡とみられる。

付け木 (木18・19) 一辺 $1 \sim 1.5$ cmの四角柱で、片方の先端は焦げている。もう一方の先端は一方向から斜めに切り落とす。木18の材質はイヌガヤ。

棒状加工品(木20~24) 木20は、長さは19.2cmで幅0.9cm、厚さ0.3cm。上端、下端とも両端を 斜めに切り落とし、山型につくる。周縁部は面取りを施す。端部を山型に切り落とした同型の棒状 加工品は今回の調査で多く出土したが、片端が欠損するものが多く、木20のみが完形である。木 21・22は細長い四角柱。上端に行く程厚みを薄くつくり、その先端は一方向から斜めに切り落と す。下端は2方向から斜めに切り落とし、小さな山型につくる。面は丁寧に調整する。箸かもしれ ない。木22は一部が変色する。木23の先端は一方向から斜めに切り落とし、反対側の先端は3方 向から斜めに切り落とす。木24は、木片を小割りにして多角形に面取りする。先端は一方向から斜 めに切り落とし、反対側の先端は多方向から削って丸みをもたせる。材質はスギ。

箆状加工品(木25~31) 割材からつくる扁平な板材である。木25は両側縁は特に整形せず割り面を残す。先端は両角を斜めに切り落とす。面は平滑である。反対側の先端は折り取ったままである。木26は先端に行く程、幅が狭まり厚みも薄くなる。反対側の先端は2方向から鋭角に切り落とし尖らせる。面には加工痕がある。材質はイヌガヤ。木27の先端は面を一方向から斜めに切り落とす。もう一方の先端は2方向から鋭く切り落とし山型につくる。片面は平滑に仕上げるが、もう片面は板材を割り裂いたままである。側面は尖らせた先端部2.5cmほどは平滑に加工する。木28・29の先端は2方向から切り落とし、小さく山型につくる。反対側の先端は欠損のため不明。木28は面の加工を片面は一面を平滑に仕上げ、もう片面は面取りを施し滑らかな曲線となる。木29の面は平滑に仕上げるが、面取りは施されていない。木30の先端は3方向から鋭く切り落とし、尖らせる。反対側の先端は欠損のため不明。面は平滑に仕上げるが加工痕が残る。材質はスギ。溝8の充填堆積物から鞭虫卵などの寄生虫卵が検出され、溝内に糞便の流入があった可能性が指摘されている(本報告書付章1)。これらの箆状加工品および前述の木20・22~24は、籌木とも考えることができる。木31は、溝1から出土した。一辺が0.7×0.8cmの四角柱で先端は面を一方向から斜めに切り落とす。反対側の先端は欠損のため不明。各面は平坦で滑らかに仕上げる。面取りは施さな

い。材質はイヌガヤ。

留針(木32~34) 被り物を髷に留める木針と考える。木32は長さ11.0cmで頭頂部は三方向に切り落とす。身部は多角形を呈し、丁寧に調整し、先を尖らせ、わずかに反りをつける。材質はイヌガヤ。木33は長さ12.0cmで頭部を細板状に、身部を扁平につくる。頭頂部は面の一端を斜めに切り落とす。先端は鋭く尖らせ、少し反りをつける。木34は先端部を斜めに切り落とす加工があり、留針の一部と考えた。材質はイヌガヤ。

横櫛 (木35~37) すべて材質はイスノキ。両側を欠損するため角張る A I 型か丸みのある A II 型かは不明である。木35 は歯の数が13本/1 cmである。木36 は歯の数が10本/1 cmである。木37 は歯の数が10本/1 cmである。

木針(木38) 薦編みや藁仕事などに用いた木針である。長さは21cmある。頭部先端は両端を斜めに切り落とし、圭頭状につくる。体部はやや扁平に整形、面取りを施し平滑に仕上げる。針先は尖らせる。頭部先端から6cm下の位置に針穴をあける。針穴は刃物の先をねじって開けたものとみられ、針穴周辺は不定形に窪む。材質はイヌガヤ。

柄状加工品(木39) 角棒状の小木片を加工したもの。周縁部に丁寧に面取りを施す。一方の小口は稜を削って丸みをもたせる。材質はスギ。

匙形木器(木40) 細板を削って匙形をつくる。長さ18.0 cm、身幅2.3 cm、柄幅1.0 cm。先端を半円形にする。身は長楕円形を呈し、ごく浅く弧面をなし、先端を薄くつくる。頸部から次第に幅を狭めて柄をつくる。柄の先端は両端を斜めに落とし、圭頭状につくる。

檜扇(木41~46) 木41~46は東肩の黒色粘質土層からまとまって出土した。身は刀身形にかたどり、両側縁を削りこんで幅を縮める。下端は方頭形につくり、要の孔を1孔あける。上端部の綴じ目はあけていない。木41・42は長さがそれぞれ30.9 cmと31.2 cmあり、幅は本幅が3.4 cmと3.5 cm、末幅は1.6 cmである。木43は厚みがあり、親骨とみられる。要の孔がある。先端部は欠損のため不明。木44・45は欠損部が多いが、厚み・形状から、親骨の一部とみられる。木46は両端を欠損する。

横槌(木47) 柱状材を削り細めて柄にあてる。身の径は6.1 cm、柄の径は2.9 cmである。材には 節があるが全面を平滑に仕上げる。丁寧に削る。身の上端部・柄の下端部は欠損するため、全体の 大きさは復元できない。敲打部と柄部の境界が直角になる形式。材質はサカキ。

籠(木48) 六つ目編みの籠。幅0.5~0.6cm、厚さ約0.08cmに加工したヒノキ材をヒゴとして用い、小型の円筒形に編む。長岡京左京二条二坊六町SD1301出土の籠と類似しているが、長岡京出土の籠は材質が竹である。底部および底部帯部は欠損のため処理は不明である。体部は平行する2本のヒゴが1対となり、水平と左右の斜め方向から組まれ、六角形を形成する六つ目編みである。緑仕舞いは余剰のタテ材を折り曲げて口縁帯部に巻き付けるが、巻き戻しているように見えるヒゴもあり、矢筈巻縁の可能性もある。下層から土圧でひしゃげた状態で出土した。

紐状加工品(木49) 材質は不明であるが、木製品として掲示する。らせん状に強く撚りをかけたものである。草履類の紐とみられる。

下駄(木50~55) 木50~52・54 は平面形を前幅よりも後幅を狭くし、前後の端を弧形にする形式の下駄である。木50・51・53 は前鼻緒孔を台の中央に開け、後鼻緒孔を歯の内側に開ける。歯の下辺幅は台の幅よりも広くする。木50 は前鼻緒孔の両側に足指による圧痕が残る。裏面にはノミの痕が残る。前歯前方と後歯の磨耗が激しい。歯裏には粗砂粒がめり込む。長さ22.9cmで材質はスギ。木51 は前鼻緒孔の両側に足指による圧痕が残る。後歯の磨耗が激しい。長さ22.2cm。木52 は前鼻緒孔を台の左側に片寄せ、後鼻緒孔を歯の内側に開ける形式。前鼻緒孔の左側には右足指による圧痕が残る。裏面にはノミの痕が残る。後歯の磨耗が激しく非常に低くなっている。長さ22.1 cmで材質はセンダン。木53 は前鼻緒孔の両側に足指による圧痕がわずかに残る。台の上面は非常に平滑に仕上げる。後歯および下端は欠損。木54 は半分以上欠損のため、前鼻緒孔の位置は不明であるが、少なくとも左側ではなく中央か右に開け、後鼻緒孔を歯の内側に開ける形式。歯の下辺幅は台の幅よりもわずかに広くする。鼻緒孔は綺麗に開けている。表面は平滑に仕上げられており、ノミ痕などは残らない。また足指による圧痕も残っていない。木55 の台は失われ、下駄の歯の部分だけである。前側か後側かは不明。下辺幅11.4cm、上辺幅8.5cm、高さは6.4cmで、歯の下辺幅を台の幅よりも広くしており、台形を呈する。

漆器椀(木56) 底部は欠損のため不明、口縁部を外反させる。内面に朱漆、外面に黒漆を施す。 復元口径は22cmとしたが、小片から全体を復元したため正確さを欠く。材質はケヤキ。

漆器皿A(木57) かなり薄手の挽き物、土圧でひしゃげてしまっている。底面は特に薄く、厚さ0.1cm。内外面に黒漆を施すため施削痕、ロクロ固定爪痕などは不明。黒漆は内面には同心円状に塗布しているが、外面の塗布方向は不定である。漆の下地として布が用いられている。刃物痕はない。材質はケヤキ。折櫃74の下から出土した。

漆器蓋(木58) 頂部に宝珠つまみをつくる。本体は薬壷形の壷であろう。頂部と縁部との中間に稜をつくる。縁部は直立する。ロクロ仕上げの後、内外面とも直接黒漆を施す。材質はケヤキ。 **皿D**(木59~61) 白木作りの挽き物。側面に平行して施削痕、底面にはロクロ軸に固定した時

の爪痕をとどめる。木59は内面に同心円状のロクロの施削痕、底面には手斧痕が残る。内外面ともにおびただしい刃物痕が付く。木60は内面のごく一部に円状のロクロの施削痕が残る。側面のロクロ目はかなり磨滅している。内外面ともに刃物痕が付く。木61は内面には施削痕はほとんど残らない。内外面ともに刃物痕が付くが、特に内面は著しい。側面は焦げて黒く変色している箇所がある。

片口鉢(木62) 白木作りの刳り物。小口方向に一辺2~3cmの四角柱状の把手をつくり出す。底部の刳り込みには曲面をもたせる。口縁部は厚く、口縁端部の上端は平坦、外縁・内縁ともに面取りを施す。把手の対角線上には口縁上面に径0.15cm、深さ0.1cmの孔をあける。把手から時計回りに45度周辺では器壁を薄くつくり、外傾させ、口縁部をわずかに削り落とし、注ぎ口とする。内・外面とも平滑に整えるが把手周辺および把手下面には加工痕が残る。内面にはフォークの先端が当たったような使用痕が付く。材質はクスノキ。

曲物(木63~73) 木63·64はやや小型の円形曲物の底か蓋である。木63は3/4を欠くが、側

面に目釘孔が2箇所残存する。孔の深さは0.7cmと0.9cm。復元径は11.5cm。木64は圧迫されてでき たような不定形の凹凸がある。残存部に目釘孔や綴じ穴はみられない。復元径は14cm。木65は蓋 である。長径18.3cm、短径16.3cmの楕円形を呈する。側板の高さは1.7cmあるが、破損が激しく綴 じ方は不確実であるが、1列内1段綴じは確認できる。蓋板の下に一回り小さい側板をあてて蓋板 に2孔1対、側板に1孔の綴じ穴を開け、樺皮のみで結合している。蓋板内面に側板位置を決める 針書き刻線が巡る。綴じ孔は4箇所均等に配置されている。蓋板のすべての孔に樺皮が残る。木66 は底板を側板の内側にはめ込む釘結合曲物の身である。側板の綴じ合わせは2箇所。側板内面のケ ビキは縦平行線に入れるが下方には斜め平行線も入れるため、下方の一部は斜格子となる。側板の 下部にもう一重のタガをはめている。タガの綴じ合わせは欠損が多いため不明。底板との結合は孔 をタガの上から開け、ほぼ均等に5箇所に木釘を打ち込んで行う。綴じ合わせ部以外の4箇所には 木釘が残る。綴じ合わせ部の木釘は斜めに打ち込んで緩みを止めている。この孔の深さは1.4cm。底 板の外面には加工痕が残る。底板の内面には無数の刃物痕が付く。内面全体に柿渋が塗布され、黒 色を呈する。径は22.0cm。木67~71は曲物の底か蓋である。すべて側面に目釘孔がある。木67の 目釘孔は3箇所不均等に配する。径は14.0cm。木68の目釘孔は4箇所ほぼ均等に配する。うち3箇 所には木釘が残る。孔の深さは0.5cm。欠損部からの歪みが激しい。片面には浅い刃物痕が少し付 く。径は14.0cm。木69は残存部に目釘孔が2箇所ある。1箇所には木釘が残る。もう一方の孔の深 さは0.7cm。片面には径0.2cmの孔が1箇所あるが、貫通せず、深さ0.2cmで止まる。その面には刃物 痕が付く。径は14.7cm。材質はスギ。木70は残存部に目釘孔が3箇所ある。すべての孔に木釘が残 る。片面には大小の凹みがある。径は15.6cm。木71の目釘孔は4箇所均等に配されている。深さは 0.7cm。面には径0.2cmの孔が1箇所あり、栓をする。目塞ぎの埋木と考えられる。片面には刃物痕 が付く。径は16.2cm。材質はスギ。木72は円形曲物の底である。側板が共伴するがはずれており、 固定位置は復元できない。目釘孔は6箇所ほぼ均等に配する。4箇所には木釘が残る。孔の深さ1.2 cm。底板の内面には刃物痕がある。側板は破損が激しく、タガが付いたかどうかは不明。綴じ合わ せは2箇所で2列前4段後1段と1列1段綴じ。 ケビキは縦平行線に斜平行線も粗く入れ、 斜格子 となる。内面全体に柿渋が塗布され、黒色を呈する。径は長径18.6cm、短径18.0cm。木73は大型の 円形曲物の蓋か底の一部分。板の側面は斜めにつくる。目釘孔は2箇所ある。孔の深さは1.4cmと 2.0 cm。厚さ0.9 cm、円形ならば直径は推定38 cmに復元できる。

折櫃 (木74・75) 木74・75は折櫃の一部とみられる。側板の一部も残る。底板の内面に側板を立てて樺皮紐で結合する形式。木74は端面がゆるい曲線となる長方形の板に側板が立てられる。内面の端部が幅0.5cm前後の幅で変色しているのでそこに側板が付いていたとみられる。綴じ孔は底板端部の一辺に2箇所あり、樺皮紐が残るが、もう一方の端部には確認できない。両側端を欠損するため幅は不明である。板側面は斜めにつくる。残存する底板は一枚板であったが割れている。内外面に刃物痕がある。底板の厚さ0.6cm、長さ36.0cm、残存幅18.0cm。側板は破損が著しく、底板との固定位置は復元できない。タガが付いたかどうかは不明。樺皮紐が残存するが、破損が著しく詳細は不明である。内側両端に縦平行線(0.2~0.4cm幅)のケビキを行う。高さ7.4cm、厚さ0.3

~0.7 cm、残存長36.5 cm。木75 は完形の隅丸長方形の底板に側板の一部が残る。内面の端部が幅0.3 ~0.4 cm前後の幅で変色しているのでそこに側板が立てられていたとみられる。綴じ孔は底板の各辺の中央および四隅に1対ずつあったとみられる。他に転用した時の紐穴とみられる一辺0.3 cmの方形の穿孔がある。板側面は斜めにつくる。底板は一枚板であったが割れている。内外面に刃物痕が付くが特に外面が著しい。底板の厚さ0.6 cm、長さ33.7 cm、幅24.9 cm。側板は破損が著しく、底板との固定位置は復元できない。一周は回らない。夕ガが付いたかどうかは不明。樺皮綴じは2列綴じ。側板残存部にはケビキのある部分はなかった。高さ5.5 cm、厚さ0.3 cm、残存長28.5 cm。

(9) 種実(図32・33、表10~12)

溝8、盛土19から検出したものについて記述する。個々の数量については表 $10\cdot12$ にまとめた。 **溝8**

溝8の埋土については、有機質を多く含んでいたため、 $4 \, \mathrm{mm} \, \mathrm{J} \, \mathrm{mn} \, \mathrm{J} \, \mathrm{J} \, \mathrm{mn} \, \mathrm{J} \, \mathrm{mn} \, \mathrm{J} \, \mathrm{J}$

① 4 mmメッシュ篩による選別 (表10)

南半(1区) モモ核(食痕あるものを含む)、ウメ核(食痕あるものを含む)、スモモ核(食痕あるものを含む)、センダン核、クリ果皮、オニグルミ核、ヒメグルミ核、ドングリ類果皮、ヒョウタン果皮・種子、ツバキ属果皮、メロンの仲間種子があった。モモ・ウメ・クリが多い。

北半(2区) モモ核(食痕あるものを含む)、ウメ核(食痕あるものを含む)、スモモ核(食痕あるものを含む)、サクラ属核、センダン核、クリ果皮、トチノキ種皮、オニグルミ核、ヒメグルミ核、ドングリ類果皮、ヒョウタン種子、メロンの仲間(ウリ科)種子、二葉マツ球果、ナス科種子があった。モモ・ウメ・メロンの仲間が多い。センダン・ツバキ属・二葉マツ・ナス科以外は可食できるものばかりである。

メロンの仲間種子については、破片・半截したものなどを除外した211点(1区と2区の合計)の長さ・幅の計測をした(表11)。メロンの仲間は種子の大きさの違いから、長さ6.0 mm以下は雑種メロン型(a)に、 $6.1 \sim 8.0$ mmはマクワ・シロウリ型(b)に、8.1 mm以上はモモルディカメロン型(c)に分類されている。本資料は、(a)は1点(0.5%)、(b)は38点(18%)、(c)は172点(81.5%)に分別できる。長さの平均は8.81 mm・幅の平均は4.24 mmであった。採取した土層は出土した土器の年代観から平安時代前期と考えられ、上記報告では奈良・平安頃は(c)の割合が多くなる傾向が示されている。本資料は同様の内容であるが(c)の割合がより高いものとなっている。

② 4・2・1 mmメッシュ篩による選別 (表12)

可食できるものとしては、クワ属・モモ・ウメ・キイチゴ属・サンショウ・ヤマブドウ・メロンの仲間・ナスがあり、キイチゴ属とナスが4mmメッシュの篩選別では見逃されていたと思われる。その他野生草木類では、木本で水辺近くにも植生するクワ属・センダン、草本は水辺近くにも

表10 4mmメッシュ篩による選別種実一覧表

出土遺構	木本草本	科名	和名	部位	個数	生育場所
溝 8	木本	マツ科	二葉マツ	球果	2	山地・庭木
		クルミ科	オニグルミ	核(1/1)	1	山野
			オニグルミ	核(1/2)	4	山野
			オニグルミ	核(破片)	1	山野
			ヒメグルミ	核(破片)	1	山野
		ブナ科	クリ	果皮	多数	山野・栽培
			ドングリ類	果皮	5	山地
		ツバキ科	ツバキ属	果皮(破片)	1	山野・庭木
		バラ科	モモ	核(1/1)	357	栽培
			モモ	核(1/1)食痕	81	栽培
			モモ	核(1/2)	354	栽培
			モモ	核(破片)	107	栽培
			ウメ	核(1/1)	166	栽培
			ウメ	核(1/1)食痕	49	栽培
			ウメ	核(1/2)	30	栽培
			ウメ	核(破片)	29	栽培
			ウメ	核(破片)食痕	16	栽培
			スモモ	核(1/1)	25	栽培
			スモモ	核(1/1)食痕	6	栽培
			スモモ	核(1/2)	8	栽培
			スモモ	核(破片)	10	栽培
			サクラ属	核(1/1)	1	山野
			サクラ属	核(1/2)	1	山野
		センダン科	センダン	核(1/1)	17	山野
			センダン	核(1/2)	8	山野
			センダン	核(1/4)	3	山野
		トチノキ科	トチノキ	種皮	2	山地
	草本	ウリ科	メロンの仲間	種子(1/1)	211	栽培
			メロンの仲間	種子(1/2)	156	栽培
			ヒョウタン	果皮(破片)	18	栽培
			ヒョウタン	種子(1/1)	3	栽培
			ヒョウタン	種子(1/2)	1	栽培
			ヒョウタン	種子(破片)	4	栽培
		ナス科	ナス科	種子	2	山野・道端
盛土19	草本	イネ科	オオムギ	胚乳	1(炭化)	栽培
			コムギ	胚乳	1(炭化)	

表11 メロンの仲間大きさ計測表・グラフ

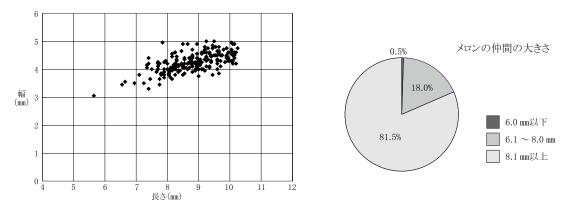


表12 4・2・1 mmメッシュ篩による選別種実一覧表

木本草本	和 名	部 位	科 名	溝8上層	溝8下層	生 育 場 所
木本	クワ属	果実	クワ	0	4	山地・庭木・栽培
	マタタビ	種子	マタタビ	0	1	山野
	モモ	核	バラ	0	2	栽培・庭木
	ウメ	核	バラ	0	0	栽培・庭木
	キイチゴ属	核	バラ	0	7	
	サンショウ	核	ミカン	0	1	山野
	カラスザンショウ	核	ミカン	0	1	山野
	センダン	核	センダン	0	1	山野
	ノブドウ	種子	ブドウ	0	2	山野
	ヤマブドウ	種子	ブドウ	0	0	山野
	トゲ			0	1	
	アサ?	果実	クワ	0	1	
	ギシギシ属	果実	タデ	0	11	田畑の畔や道端の湿地・水辺
	ギシギシ属	花被	タデ	0	1	田畑の畔や道端の湿地・水辺
	ミゾソバ	果実	タデ	0	8	水辺
	タデ科 (三稜形)	果実	タデ	0	34	水辺・湿地・道端
	タデ科 (扁平形)	果実	タデ	0	89	水辺・湿地・道端
	スベリヒユ	種子	スベリヒユ	1	1	畑・道端
	ハコベ属	種子	ナデシコ	0	15	道端・畑
	アカザ属	種子	アカザ	0	0	道端・荒地
	ヒユ属	種子	ヒユ	7	56	畑・道端
	タガラシ	果実	キンポウゲ	0	8	水田
	キンポウゲ属	果実	キンポウゲ	0	110	山野・道端
	アブラナ科	種子	アブラナ	0	3	水田・水辺・道端
	カタバミ属	種子	カタバミ	0	4	道端・畑
	エノキグサ	種子	トウダイグサ	0	0	道端・畑
	スミレ属	種子	スミレ	0	1	道端・山野
草本	メロンの仲間	種子	ウリ	1	36	栽培
	チドメグサ属	果実	セリ	0	0	道端・庭・野原
	セリ科	果実	セリ	0	0	湿地・山野
	メハジキ	果実	シソ	0	7	野原・道端
	イヌコウジュ属	果実	シソ	1	53	山野
	シソ属	果実	シソ	1	20	道端
	ナス	種子	ナス	1	162	栽培
	ナス科	種子	ナス	1	10	山野・道端
	タカサブロウ	果実	キク	1	58	湿地・水田
	メナモミ	果実	キク	0	11	山野
	イボクサ	種子	ツユクサ	1	32	水田・沼
	エノコログサ属	穎	イネ	1	4	道端・荒地・野原
	ヒ工属	穎	イネ	1	0	栽培
	カヤツリグサ科(三稜形)	果実	カヤツリグサ	0	0	湿地・山野
	カヤツリグサ科(扁平形)	果実	カヤツリグサ	0	1	湿地・山野
	ホタルイ属	果実	カヤツリグサ	1	30	水田・溝・湿地
その他	昆虫	頭・上翅・胸腹・脚		1	73	

(4mm·2mm·1mmの篩で選別、約500mlあたりの個数、○は1以下)

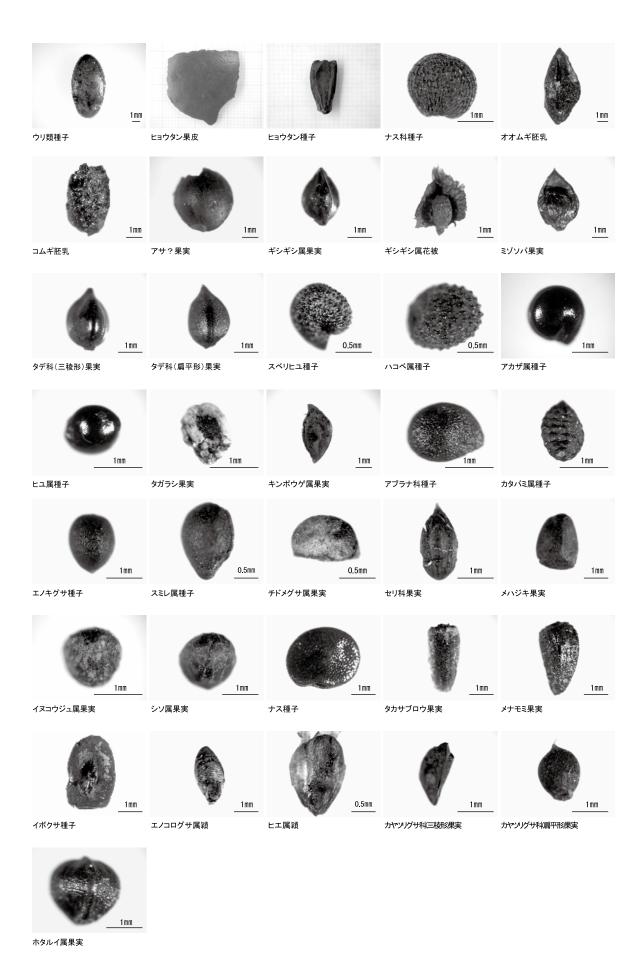


図32 出土種実(草本)

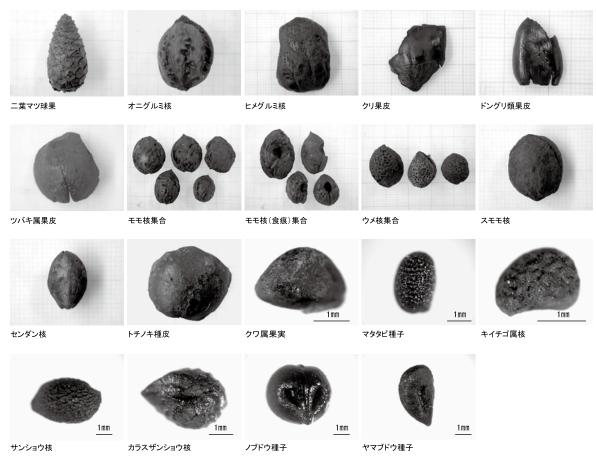


図33 出土種実(木本)

植生するギシギシ・タデ科・キンポウゲ属・カヤツリグサ科、水辺に植生するミゾソバ・タガラシ・タカサブロウ・イボクサ・ホタルイ属が目立つ。その他、改変した土地に生えるシソ科のメハジキ、山野に生えるイヌコウジュ属が多い。

溝8では、モモ・ウメ・スモモ・メロンの仲間・ナス・クリは栽培されたものが可食後人為的 に投廃棄されたものと考えられる。

盛土19

盛土19から出土した種実類には、炭化したオオムギ、コムギがあった。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 京都市 埋蔵文化財研究所 1996年11月
- 2) 木製品については以下の文献を参照とした。 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 史料第27冊 奈良国立文化財研究所 1985 年3月

3) a 「固物忌

11世紀後半代と考えられる井戸から出土している。

平尾政幸·梅川光隆·辻 純一「平安京左京六条一坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年3月 平尾政幸「京都・平安京左京六条一坊八町」『木簡研究』第8号 木簡学会 1986年11月

- b ×□〔廿ヵ〕三日物忌
 - 9世紀の流路から出土している。
 - 辻 裕司·本 弥八郎·加納敬二「平安京右京八条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年3月
 - 辻 裕司「京都·平安京右京八条二坊二町」『木簡研究』第8号 木簡学会 1986年11月
- c「物忌咄天北急々律□〔令ヵ〕」

前田義明「木製品」『鳥羽離宮跡 I 金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年3月

吉崎 伸「京都・鳥羽離宮跡」『木簡研究』第30号 木簡学会 2008年11月

- 4) 山中 章「木製品等」『長岡京跡左京第13次(7ANESH地区)発掘調査報告』向日市埋蔵文化財調査報告書第4集 向日市教育委員会 1978年3月
- 5) 藤下典之「海をわたった華花2004」国立歴史民俗博物館編 2004年7月

5. まとめ

本調査地は平安京右京二条二坊十一町の南東部と西堀川小路にあたっている。また、安土・桃山時代に豊臣秀吉によって築造された御土居の西辺、いわゆる「御土居の袖」部南の南北直線部分にもあたっている。

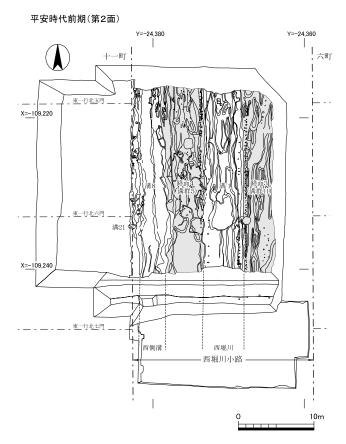
本調査では、平安時代の西堀川小路、そして安土・桃山時代の御土居を検出し、これら二時期の 遺構間に西堀川(紙屋川)による洪水の厚い堆積層がある。年代順に遺構の変遷をまとめる。

平安時代以前 平安時代以前の遺跡としては、本調査地の南西に広がる西ノ京遺跡が知られているものの、本調査地は遺跡範囲に入っていない。本調査においては、東西方向の自然地形の凹みと考えられる落込みを確認、遺物は縄文時代のサヌカイト製石鏃が1点出土したのみである。従って、平安京造営以前は遺跡に入らない空閑地であったと考えられる。

平安時代前期(第2面、図34) 西堀川小路、および右京二条二坊十一町の東端部にあたる。しかし十一町部分については、安土・桃山時代の御土居堀にあたっており、その掘削深が十一町の遺構面よりも深かったため、全く遺構が残されていなかった。一方、御土居堀より東にかけては、西堀川小路に関連する遺構が良好に遺存していた。

西堀川小路については、これまでにも触れたように、『延喜式』左右京職京程の規定の解釈をめ ぐって様々な説が唱えられてきた。しかし、1982年の右京三条二坊十町における発掘調査におい て、西堀川幅約6m(2丈)、西側路面幅約6m(2丈)、西側溝幅約1mと良好に検出され、西堀 川小路幅が大路並みの8丈であることが明らかになっている。本調査では西堀川小路の東西の西 側3/4程度を検出した。検出面での西堀川(溝1)は幅5~5.5m、西側路面(路面4)は幅4~ 5.5 m、西側溝(溝8)は幅3.3~5.5 mであり、東側溝が東調査区外で検出できず、東側路面(路面 3)の幅は4.2m以上としか確定できなかった。本調査では1982年調査の成果と比べると、西堀川 の幅はやや全体に狭く検出されたものの、西側溝が通常の側溝幅を大きく超える規模であったた めに西側路面の幅が減じていると言える。西堀川はほぼ完全に砂礫層で埋まっており、大雨などの 際に上流より運ばれた土砂の堆積によって最終的には機能しなくなったとみられる。川底、両岸と も激しい水流によって深く削られた様子が認められた。川の両岸には、檜材の太く頑丈な杭が密に 幾筋も打ち込まれ(杭列群)、維持・管理に苦心した様子が見てとれる。また、西側溝の規模は規 定に従えば3尺(約0.9m)であるが、当地では $3\sim4$ 倍の幅があり、深さも1.5m前後と深くなっ ている。おそらく、頻繁に繰り返された西堀川の氾濫から、宅地を守るために深く広くなったもの と思われる。西堀川(紙屋川)の氾濫は掘削した西堀川埋没後も頻繁に繰り返され、両側路面部分 は、西側で一部路面舗装の礫敷きかと思われる部分(石敷部分)を検出した以外は、洪水堆積に よって削り取られてしまっていた。

平安時代中期から室町時代(第1-3面、図34) 第1-3面としたのは、掘削された西堀川の 川筋が埋没した後、頻繁に繰り返された氾濫堆積層のなかで確認できた人の活動痕跡である。おお よそ、平安時代中期から室町時代に至る期間である。西堀川の掘削された川筋が埋没したのは平安



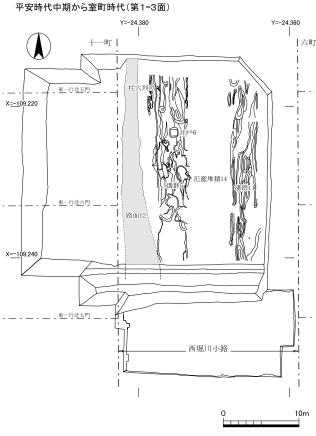


図34 遺構変遷図1 (1:500)

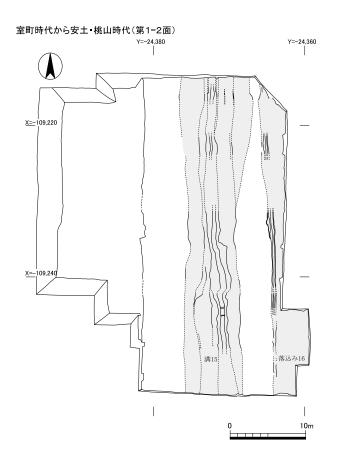
時代中期ごろとみられ、その後の氾濫堆 積は当初平安時代前期の遺構面から厚さ 1 m前後の範囲で推移する時期があり、 その後かなり大規模な土石流とも言うべ き氾濫堆積が本調査区内で確認されただ けでも4~5回あり、厚さ2.5mに及ぶ堆 積となったようである。前者の段階には、 路面4に相当する箇所に井戸6が作られ たり、西側溝が埋没した跡に路面整地が なされる。これらの遺構も後者の氾濫堆 積の段階には、完全に埋没して壊された り、浸食を受けたりしている。

室町時代から安土・桃山時代(第1-2面、図35) 西堀川は自らが溜めた氾濫 堆積層によって、川筋をいずれかへ変更して、当地においてはその影響がみられなくなり、安定した時期といえる。この時の遺構面は、平安時代前期から比べて、約2m以上高くなっている。南北方向の溝(溝15) は西堀川の末期のものとも言えるもので、周囲の耕作地化に伴う用水路として利用されたと考えられる。溝の東側の落込み16も当期の耕作に関連する遺構と考えるが、具体的な用途は不明である。前代の氾濫堆積の上に耕作地が広がっていた。それが安土・桃山時代に御土居が造営される以前の状況である。

安土・桃山時代以降(第1-1面、図35) 1591年、豊臣秀吉によって御土居が築造される。当地には西辺の南北方向の御土居が施工され、西側に堀を掘り、その土を東に盛って土塁を構築したと思われる。本調査地では、堀の幅14m以上、深さ2.5m、西肩は調査区外であった。堀の下部には帯水性の堆積層が確認され、水浸

かり状態であったことがわかる。また、堆 積層中に複数の砂礫層が見られ、何度か 土石流があったことも確認され、御土居 構築後当地には、紙屋川を堀内に引き込 み水量を確保したのではないかと考えら れる。土塁は明治期までは残されていた というが、大正期には壊され、その構築土 で堀を埋めたと考えられる。堀埋土断面 観察により、埋土上層は東側から順次埋 められたことが明らかである。堀の東肩 = 土塁部の西端約2~3mは、厚さ約1 mで粘土質の土が入れられて、肩部の崩 壊防止が図られていて、土塁本体はその 東側に構築されたとみている。つまり、土 塁の外側には、犬走り状の平坦面が設け られていたようである。土塁本体の東端 は調査区外で検出できなかったので、東 西幅は17m以上、高さは本調査では明ら かにできなかった。

なお、西堀川は平安京造営時に西堀川 小路の中央に造られた運河であり、北山 から南流する紙屋川を引き入れたものと 考えられる。紙屋川は現在も調査地以北 では、平安時代当時の位置と大きく変更 はないと考えられる。この地域の紙屋川 は平安宮の占地する台地の東縁辺部を南 流して、河床を深く下刻していて、河道を 大きく変えることがなかったとみられる。 この平安宮の占地する台地は本調査地の 北、現行西大路通と丸太町通の交差点(円 町)辺りからJR 二条駅の北辺りを結ぶ線 を南西辺として、南西方向へ大きく下が る地形となっている。つまり、紙屋川は現 行丸太町通を境として、北側は台地縁辺



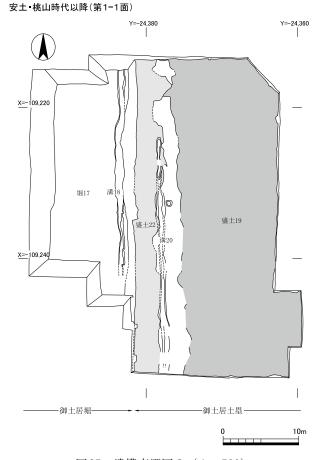


図35 遺構変遷図2 (1:500)

部の固定された河道を下刻して流れ、南側の低地部分では河道が解放される地形条件にあると考えられる。このために、大雨などの後、円町の南西地域に洪水や土石流の被害が何度も起こったのであろう。現在も見られる当地周辺にみられる地表面の隆起は、本調査で明らかになったように、平安時代以降に西堀川の氾濫堆積によって形成されたものといえよう。おそらく、室町時代頃までには、現状のように氾濫堆積が厚く堆積して、河道は南西に移動していたと考えられ、この時も大雨の際などには洪水や土石流が発生していたと見られる。しかし、安土・桃山時代に御土居が構築され、南に延びる堀に引き込まれ、御土居が維持されていた江戸時代には一旦被害は鎮静したとみる。しかし、明治期以降御土居が壊され、堀が埋められると、再び西堀川(紙屋川)は氾濫を繰り返す川となったようである。

註

1) 平尾政幸·辻 純一「右京三条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年

付章1 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

今回の分析調査では、発掘調査により検出された平安時代前期以降の西堀川(紙屋川)および道路西側溝、安土・桃山時代の御土居の堀などの各時期の充填堆積物を対象として、各時期の植生や植物利用に関する情報を得ることを目的として、花粉分析・大型植物遺体分析を実施する。

(2) 試料

調査地点の堆積層の累重状況および試料採取位置を図1に示す。調査区底面では、平安時代前期の西堀川小路の西側溝とその中央に構築された西堀川が確認されている。これらの遺構は側方への層相変化が著しい扇状地堆積物上部の土壌生成層準から掘削され構築されている。

西堀川小路西側溝(溝8)を充填する堆積物は、下部が有機質に富む泥質砂~砂質泥、上部は後述する西堀川に流入した洪水堆積物からなる。下部の溝充填堆積物は溝斜面の崩積堆積物や溝周囲の土壌の流れ込み、さらに人為的営力により投棄された堆積物の偽礫や大量の土器・木製品などの遺物が出土している。

一方、西堀川小路中央に幅5m、深さ1.2m程度で掘削されている西堀川(溝1)を充填する堆積物は、洪水ないし流路充填堆積物であるトラフ型斜交葉理の発達する砂礫~砂からなる。本堆積物は安土・桃山時代の御土居構築層準まで堆積と侵食を繰り返し、流路幅も拡大しながら累重している。堆積層(氾濫名堆積14)厚は約2~2.5mをはかる。最下部の流路充填堆積物(溝1埋土)形成後には、平安時代の遺構の基盤をなす腐植質土壌の再堆積層を挟在しており、安土・桃山時代にかけて間欠的に土砂流出が起こっていたことが示唆される。また、充填堆積物中部の流速が減衰している時期に形成された砂層中から室町時代の遺物が出土している。これらの平安時代以降から安土・桃山時代にかけて土砂流出の増大は、周辺の地形や河床上昇に伴う水文の条件などを著しく変化させてきたことが示唆される。なお、これら安土・桃山時代の御土居構築時には、充填堆積物上部において溝(溝15)などの遺構が構築されている。これらの遺構は溝周囲より流れ込んだ堆積物と人為的偽礫により充填されている。

安土・桃山時代の御土居の堀(堀17)は、西堀川を充填した河川堆積物とその氾濫堆積物を掘削 して構築されている。堀埋土最下部には滞水域で形成された泥質砂を挟在する。その上位には土塁 側からの崩落堆積物や人為的営力により形成された偽礫を主体とする堆積物が厚く累重する。

分析試料は、安土・桃山時代に構築された御土居の堀(堀17)充填堆積物下部(試料1-1)、安土・桃山時代の土塁盛土直下の溝埋土(試料2-1・2)、平安時代前期の西堀川(紙屋川)に流入した洪水堆積物のうち、中位の室町時代の遺物が出土する流路縁堆積物(氾濫堆積14、試料3-1)、平安時代前期の西堀川河岸堆積物(溝1埋土上層、試料4-1~3)、平安時代前期の西側

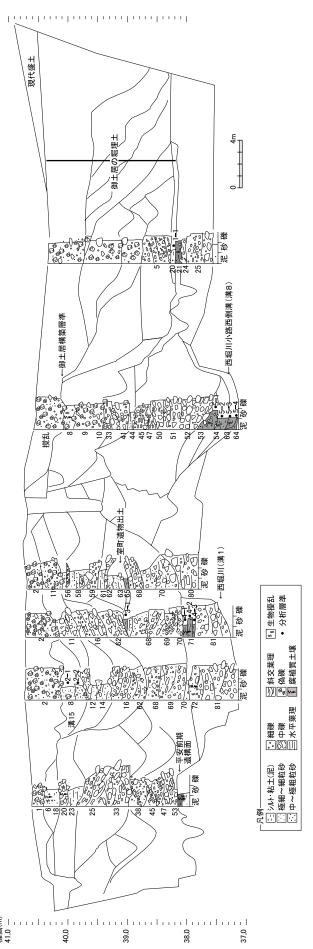


図1 調査地点の柱状断面図および試料採取位置

溝の充填堆積物(試料5-1~4)より採取した11点である。花粉分析は、採取した全試料、大型植物遺体分析は平安時代前期の西側溝下部の試料5-3層準について実施する。

(3) 分析方法

1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980a)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

2) 大型植物遺体同定

試料200ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩

を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体を拾い出す。

大型植物遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォン「-」で結んで表示する。分析後は、分類群毎に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸して保管する。

(4) 結果

1) 花粉分析

結果を表1、図2に示す。

安土・桃山時代に構築された御土居の堀(堀17)充填堆積物下部の花粉化石群集は草本花粉が高率を占め、栽培種のイネ属を含むイネ科が優占する。この他、水生植物のオモダカ属、イボクサ属、ミズオアイ属、ヒシ属、ミズワラビ属、アカウキクサ属や、中生植物のアブラナ科などが産出する。木本花粉ではマツ属複維管東亜属を含むマツ属が優占し、スギ属、ハンノキ属、コナラ亜属、エノキ属-ムクノキ属、モチノキ属などを伴う。

安土・桃山時代の下層溝(溝15)からは、草本花粉が多産するが木本花粉は著しく少ない。草本 花粉ではイネ科が多産し、栽培種のソバ属、ベニバナ属などを伴う。木本花粉ではマツ属、コナラ 亜属などが産出する。

平安時代前期以降の西堀川充填堆積物(氾濫堆積14・溝1)では、平安時代前期の再堆積土壌 (溝1埋土上層)では花粉化石の保存状態が全般に悪いものの、最上部で比較的多くの草本花粉が 産出する。産出する草本花粉の種類構成は、下記する西側溝の草本花粉組成と共通する点が多い。 特に日当たり良好な過湿から乾燥する場所に生育するアリトウグサ属の産状が目立つ。室町時代 の遺物出土層準(氾濫堆積14内)も化石の保存が悪く、化石数も少ない。僅かに産出する種類には 栽培種のイネ属などが認められる。

平安時代前期の西堀川小路西側溝(溝8)の充填堆積物下部の花粉化石群集は草本花粉が高率を占め、その中ではイネ科が多産する。このほか、アカザ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属の産状も目立つ。また、栽培種のソバ属、アズキ属、ベニバナ属、路上植物群落の構成要素であるオオバコ属などが産出する。草本花粉は層位的に大きく変化しないが、木本花粉は層位的に変化する。最下部の試料5-4層準では、スギ属が多産するが、その上位の試料5-3~1ではマツ属が増加する。温帯性針葉樹のモミ属・ツガ属、常緑広葉樹のアカガシ亜属・シイ属、落葉広葉樹のコナラ亜属・ニレ属-ケヤキ属などが普遍的に産出する。このほかセンダン属なども僅かに産出する。

2) 大型植物遺体同定

西堀川小路西側溝充填堆積物下部(試料5-3)層準の分析結果を表2に示す。裸子植物1分類群(針葉樹のアカマツ)の葉が1個と、被子植物50分類群(広葉樹のヒサカキ属、キイチゴ属、サンショウ、草本のオモダカ科、コキンバイザサ、ミズアオイ属、ツユクサ、イボクサ、コムギ、イ

表 1 花粉分析結果

			ite a m	上段:	遺構、中	段:時代、	下段:試	料番号	- 11		
重 類	堀17 近世	安土・	紫15 桃山時代	氾濫堆積14 室町時代		溝1 平安時代前				時代前期	
木本花粉	1-1	2-1	2-2	3-1	4-1	4-2	4-3	5-1	5-2	5-3	5-4
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
モミ属 ツガ属	1 1	_	_	_	4	1_	2	7 24	19 16	20 24	17 14
トウヒ属	1	_	=	=	-	=	_	- 24	- 10	-	14
マツ属複維管束亜属	92	8	4	-	-	-	_	20	25	17	12
マツ属(不明)	61	8	6	_	1	2	-	34	18	39	17
コウヤマキ属 スギ属	15	_	_	_	_	_	_	39	1 28	32	1 76
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	8
ヤマモモ属	-	1	-	-	-	-	-	1	3	1	-
サワグルミ属 クルミ属	1	1	_	_	_	_	_	2	4	2 1	2
クマシデ属ーアサダ属	3	_	1	-	1	_	_	-	3	1	4
カバノキ属	1	-	2	-	-	1	-	9	3	7	2
ハンノキ属 ブナ属	10	_	_	-	-	2	-	6	1 10	5 7	1 3
ファ属 コナラ属コナラ亜属	1 13	1	1	=	_	=	_	12	5	6	8
コナラ属アカガシ亜属	4	-	2	1	2	1	1	42	42	34	36
クリ属	1	-	-	-	_	-	-	_	2	1	1
シイ属 ニレ属-ケヤキ属	1 1	_	_	1	1	_	_	2 6	10 4	4 5	9 5
エノキ属ームクノキ属	11	_	-	_	_	_	_	1	1	-	1
ヤドリギ属	=	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イスノキ属 キハダ属	=	_	_	_	-	_	-	-	1	_	-
ミカン科	_	_	_	_	_	_	_	_	1 1	_	4
センダン属	=	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
アカメガシワ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属 カエデ属	21 1	-	_	_	_	1	-	1	_	_	_
ツツジ科	1	_	=	=	_	=	_	1	_	=	_
エゴノキ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
イボタノキ属	1	-	-	_	_	1	-	-	3	-	-
トネリコ属 ニワトコ属	_ 1	_	_	_	_	_	_	_	1	_	_
ガマズミ属	-	_	_	1	_	-	_	-	_	_	-
本花粉											
サジオモダカ属 オモダカ属	_ 1	-	_	_	_	_	_	1	-	_	1
イネ属型	128	2	14	4	_	_	1	17	16	12	13
他のイネ科	363	73	162	11	25	3	2	177	181	143	208
カヤツリグサ科	13	1	2	6	2	1	-	16	14	15	27
イボクサ属 ミズアオイ属	1 1	-	_	_	_	_	-	13	1 11	12	1 16
クワ科	2	_	_	_	_	_	1	-	4	2	-
ギシギシ属	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	1
イブキトラノオ節	-	-	-	-	_	_	-	_	-	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節 タデ属	2	1	-	7 1	2	3	_	6	1 2	9 2	7
ソバ属	-	5	2	3	_	_	-	-	1	1	1
アカザ科	4	2	2	1	3	1	1	28	62	39	55
スベリヒユ属 ナデシコ科	1 12	-	=	3	-	- 1	_	19	1 9	_ 22	20
ナンポウゲ属	12	1	_	3	1	1	_	7	5	5	4
キンポウゲ科	î	î	3	-	_	-	-	7	3	5	2
アブラナ科	69	2	=	7	2	1	-	5	13	3	11
ワレモコウ属 バラ科	_ 1	_	_	1	_	_	_	3	_	1 1	_
アズキ属	_	_	_	_	_	_	_	1	_	_	_
マメ科	1	-	-	-	1	-	_	-	2	-	8
フウロソウ属	-	_	_	_	_	1	_	_	_	_	-
ヒシ属 アカバナ属ーミズユキノシタ属	1 1	_	_	_	_	=	_	_	_	_	_
アリノトウグサ属		-	-	-	33	-	1	61	25	30	31
セリ科	=	=	-	=	-	-	-	8	3	10	20
キツネノマゴ属 オオバコ属	1_	_	_	_	_	_	_	- 5	19	- 5	10
オオハコ馬 ゴキヅル属	2	_	_	_	_	_	_	5	12	5 -	12
ヨモギ属	3	1	3	1	2	1	2	26	29	44	34
オナモミ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ベニバナ属 キク亜科	3	1	2	- 1	_	_	-	1 6	1 7	1 10	12
タンポポ亜科	6	_	3	1	4	-	_	8	7	8	5
明花粉											
不明花粉 ダ類胞子	20	1	8	3	9	2	2	17	21	14	34
グ 規胞士 ヒカゲノカズラ属	1	_	_	_	_	3	_	_	_	_	_
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	15	-
イノモトソウ属	-	-	1	1	1	4	-	-	-	=	-
ミズワラビ属	1	- 0	-	_	-	_	-	-	_	_	_
アカウキクサ属 他のシダ類胞子	3 137	8 66	3 67	103	92	65	18	155	93	156	100
) 計	101	- 00		100	72	30	-10	100	30	100	100
木本花粉	248	19	16	3	13	9	3	206	207	209	224
草本花粉 不明	624	90	193	50	75	13	8	420	413	380	490
不明花粉 シダ類胞子	20 142	1 74	8 71	3 104	9 93	2 72	2 18	17 155	21 94	14 171	34 100
合計(不明を除く)	1014	183	280	157	181	94	29	781	714	760	814
の他											
回虫卵	<u>-</u> -	-	_	=	_	_	-	2	4	4	1
鞭虫卵 肝吸虫卵	_	_	_	-	_	_	_	3	15 1	13	11
				_	_	_	_	_		_	

ネ、エノコログサ属、イネ科 (A·B)、アゼスゲ類、スゲ属 (A·B)、ホタルイ属、カヤツリ グサ属、カヤツリグサ属?、カ ヤツリグサ科、イラクサ科、ギ シギシ属、ミゾソバ、イヌタデ 近似種、タデ属(A・B)、スベリ ヒユ、ミミナグサ近似種、ナデ シコ科、アカザ属、ヒユ属、タガ ラシ、キンポウゲ属、アブラナ 科、キジムシロ類、カタバミ属、 スミレ属、モモルディカメロン 型、モモルディカメロン型-マ クワ・シロウリ型、メロン類、 アリノトウグサ、チドメグサ属、 シソ属、シソ属-イヌコウジュ 属、トウバナ属、メハジキ属、ナ ス近似種、ナス属、ホオズキ類、 タカサブロウ)の種実が757個 の、計758個が抽出・同定され た。なお、68個は同定ができず、 3型(A(65個)·B(2個)·C (1個)) の分類にとどめている。 その他に、木材、炭化材、昆虫類 が確認されたため、主に状態が 良好なものを抽出し、表2の下 部にプラスで示している。

大型植物遺体群は、木本4分 類群22個、草本47分類群736個 から成り、圧倒的な草本主体の 種類構成を示す。栽培種は、コ ムギの炭化した胚乳が1個、イ ネの穎が47個(基部は12個)、 モモルディカメロン型の種子が 1個、モモルディカメロン型-

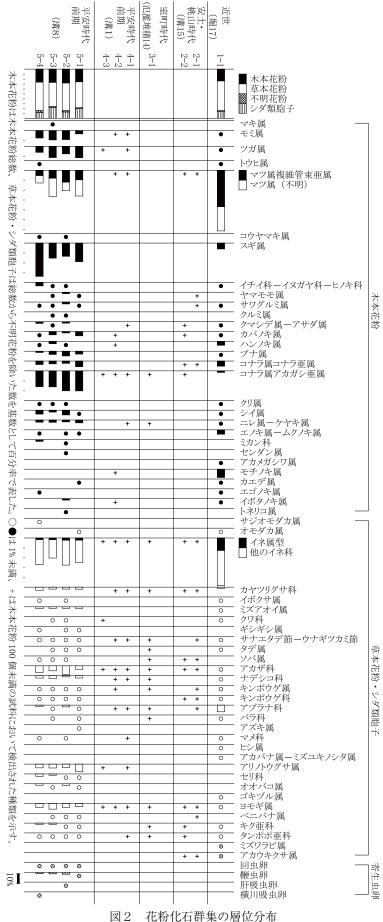


表 2 大型植物遺体(種実)同定結果

に本アカサインシー アカー アカー アカー アカー アカー アカー アカー アカー アカー アカ	葉種核 種 種種種種胚類果果 果果果果果 果果果果果果果果果 果種 種 種 種種子 子 子子子子子乳 実実 実実実実実 実実実被実実実 実子 子 子子子	破破完破破 完完完完完破破完破完是完破完成完完完完破破完破院破完破完破完破完实完完 计片形片片 形形形形形形片片形片形形形形片形形形形片片形片形片形片形片形形形形	炭 細 小 型 2面面 2面粗粗面	1 3 4 4 10 3 1 1 1 2 1 47 3 5 9 8 1 1 5 2 4 10 3 2 1 1 1 2 2 4 1 1 2 2 4 1 1 2 2 4 1 1 2 2 6 6 6 6 7 1 1 1 2 2 6 6 6 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 8 7 8 8 8 8	横断面を確認 ヒサカキの可能性 複数種 計1/2個体未満, 基部1個 長さ1.2mm 基部12個
ヒサイ ・	種核 種 種種種種胚類果果 果果果果果 果果果果花果果果 果種 種 種 種子 子 子子子子子乳 実実 実実実実実 実実実装実実 実子 子 子 子 新穎	破完破破 完完完完完破破完破完完完破完成完完完完破破完破晚完破完破完成完成完成完成完成完成	細身 小型 2面 3面 2面網目	3 4 4 100 3 1 1 1 1 2 2 1 477 3 3 5 5 9 8 8 1 1 5 2 2 4 100 3 3 2 2 1 1 1 2 2 6 6 2 2 2 6 6 4 4 188 3 3 300 2 2 74	ヒサカキの可能性 複数種 計1/2個体未満, 基部1個 長さ1. 2mm
キ サンショウ Tax オーキンショウ Tax オーキン・ファーキー サルス オーキー オーキー アン・ファーナー アン・ファー アン・フ	核 種 種種種種種胚類果果 果果果果果 果果果花果果果 果種 種 種 種子 子子子子乳 寒寒 寒寒寒寒寒 寒寒寒寒被寒寒寒 寒子 子 子子	完破破。完完完完完破破完破完完完成完破完完完完完破破完破完破完破完破完破完成完成完成完成,形形形形形形片片形片形形形片形片形形形形形形形形形形形形形形形	細身 小型 2面 3面 2面網目	4 4 4 10 3 1 1 1 2 1 47 3 5 9 8 8 1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 6 2 2 6 6 6 6 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	複数種 計1/2個体未満, 基部1個 長さ1. 2mm
サンショウ T本 T本 T本 TA TA TA TA TA TA TA	種種種種種胚類果果 果果果果果 果果果果果果果果果果果果果果果果果果果果果果果果	破破 完完完完完破破完破完完完破完破完完完完成破免破破完破完破完破完成 计片 形形形形形形片片形片形形形形片形形形形形片片形片形片形片形片形片形片形片	細身 小型 2面 3面 2面網目	4 10 3 1 1 2 1 47 3 5 9 8 1 5 2 4 10 3 3 2 1 1 2 6 6 2 2 6 6 4 1 1 2 6 6 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	計1/2個体未満, 基部1個 長さ1. 2mm
i本 オモインス オモンス カ科 コミツスイーザサ マンスカーサース インス・ストース ログ インス・ストース ログ インストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インス・ストース ログ インストース ログ インス・ストース ログ インストース	種種種種種胚類果果 果果果果果 果果果果花果果果 果種 種 種子子子子子乳 実実 実実実実実 実実実実装実実 実子 子 子 子 類	完完完完完破破完破完完完破完破完完完完成破完破破完破完破完破完破完成完成完整形形形形形片片形片形形形形片形片形形形形形片片形片形片形片形片形片形片形片形	細身 小型 2面 3面 2面網目	3 1 1 1 2 1 47 3 5 9 8 1 1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 6 4 1 8 1 1 2 6 6 6 7 8 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	長さ1.2mm
オコキアイス オコキアイス オコキアイス オコキアイス オロインス オロイ	種種種種胚類果果 果果果果果 果果果花果果果 果種 種 種 種子子子子乳 実実 実実実実実 実実実実被実実実 実子 子 子 子 類	完完完完破破完破完完完破完破完完完完完破破完破院破完破完破完破完被完成完秘形形形形片片形片形形形形片形形形形形形形片形片形片形片形片形片形片形片形片形	細身 小型 2面 3面 2面網目	1 1 1 2 1 47 3 5 9 8 1 5 2 4 10 3 3 2 1 1 2 6 6 2 2 6 4 1 8 8 3 3 3 3 2 6 6 6 7 8 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	
コミズエディー ロー・ ロー・ ロー・ ロー・ ロー・ ロー・ ロー・ ロー・ ロー・ ロー	種種種種胚類果果 果果果果果 果果果花果果果 果種 種 種 種子子子子乳 実実 実実実実実 実実実実被実実実 実子 子 子 子 類	完完完完破破完破完完完破完破完完完完完破破完破院破完破完破完破完被完成完秘形形形形片片形片形形形形片形形形形形形形片形片形片形片形片形片形片形片形片形	細身 小型 2面 3面 2面網目	1 1 1 2 1 47 3 5 9 8 1 5 2 4 10 3 3 2 1 1 2 6 6 2 2 6 4 1 8 8 3 3 3 3 2 6 6 6 7 8 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	
ミツイン・ファナー マップ アクサー マップ・ファナー アン・ファナー アン・ファイン・ファイン・ファイン・ファイン・ファイン・ファイン・ファイン・ファイ	種種種胚類果果 果果果果果 果果果果花果果果 果種 種 種 種子子子乳 実実 実実実実 実実実実被実実実 実子 子 子 子類	完完完完破破完破完完完破完破完完完完完破破完破完破完破完破完破完破完破完成完形形形形片片形片形形形形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片	細身 小型 2面 3面 2面網目	1 1 2 1 47 3 5 9 8 1 1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 6 4 1 8 1 1 2 6 6 7 6 7 8 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	
イコムギ イエイ スキーログ イエイ スキーログ イエイ スキーログ イエノネ ネ科B 類 スプダル ペープリグ イエア スプダル ステータ の カカカカイギシンタ属 スプタル フリグリック カカカイギシンタ 属の アーツリクリック アンツリック アンジョン アンデュ 展の アンデュ 展の アンデュ アンデュ アンデュ アンデュ アンデュ アンデュ アンデュ アンデュ	種胚類果果 果果果果果 果果果花果果果 果種 種 種 種子乳 実実 実実実実実 実実実被実実実 実子 子 子 資額	完完完破破完破完完完破完破完完完完完破破完破完破完破完破完破完破完成完成完形形形片片形片形形形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片	細身 小型 2面 3面 2面網目	2 1 47 3 5 9 8 1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 6 4 18 3 3 2 7 4 10 2 7 6 7	基部12個
コイネノコログサ属 イネノコログサ展 イネノコログサ展 イネノコログサー イアでスペタ をで カカヤアの サー カカヤアの サー カカヤアの アンス ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア	胚類果果 果果果果果 果果果花果果果 果種 種 種 種乳 実実 実実実実 実実実被実実実 実子 子 子子 子颖	完破破完破完完完破完破完完完完成破完破破完破完破完破完破完破完成完成完成,形片片形片形形形形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片	細身 小型 2面 3面 2面網目	1 47 3 5 9 8 1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 6 4 18 3 30 2 74	基部12個
イエノネ イス・ イネ・ イネ・ イネ・ イネ・ イネ・ イネ・ イネ・ イネ・ イネ・ イス・ イス・ イス・ イス・ イス・ イス・ イス・ イス・ イス・ イン・ イン・ イン・ イン・ イン・ イン・ イン・ イン・ イン・ イン	颖果果 果果果果果 果果果花果果果 果種 種 種 種寒寒 寒寒寒寒寒 寒寒寒寒寒寒寒寒寒寒	破破完破完完完破完破完完完完完破破完破完破完破完破完破完成完成完成完成完成,所以所以所以所以所以所以所以所以所以的,就是一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个一个	細身 小型 2面 3面 2面網目	47 3 5 9 8 1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 6 4 18 3 3 2 7 4 18 2 7 6 7 7 8 8 8 8 8 8 9 8 9 8 9 8 9 8 9 8 9 8	基部12個
エイネ A A B B T A A A A A P W A A A A P W M A A A A P W M A A A P W M A A A P W M A A A A P W M A A A A A A A A A A A A A A A A A A	果果 果果果果果 果果果果花果果果 果種 種 種 種寒寒 実実実実実 寒寒実実被実実実 実子 子 子 子	破完破完完完破完破完完完完完破破完破完破完破完破完成完成完成完成完成,所形片形形形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片	小型 2面 3面 2面網目	3 5 9 8 1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 2 6 4 18 3 3 2 7 4 18 2 7 7	店部12個
イ ネ科A イ ネ科B アズゲ類 ス ズ	果 果果果果 果果果果花果果果 果種 種 種 種寒 寒寒寒寒寒 寒寒寒寒被寒寒寒 寒子 子 子子	完破完完完破完破完完完完完破破完破破完破完破完破完破完成的形片形片形片形形形形片片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片	小型 2面 3面 2面網目	5 9 8 1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 6 4 18 3 3 2 7 4 10 2 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	
イネ科B アゼスゲ類 スゲダ属A スゲダルルイ属 カカヤアのリグサ科 カカヤアンリグサ科 カカヤアンツサ科 デミスアが カカイラシギンバ が近 の タスズ ミ ナ ア カエ ア ザ ボ ス ガラシ キンボウゲ属	果果果果果果果花果果果 果種 種 種 種寒実実実実 実実実被実実実 実子 子 子子	破完完完破完破完完完完完破破完破破完破完破完破完成完成完成完成,我们我们就是我们的人,我们就是我们的人,我们就是我们的人,我们就是我们的人,我们就是我们的人,我们就是我们的人,我们就是我们的人,我们就	小型 2面 3面 2面網目	9 8 1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 6 4 18 3 3 3 2 7 4 6 2 2 7 6 7 7 8 7 8 8 7 8 7 8 8 7 8 8 7 8 8 7 8 8 8 8 7 8 8 8 8 8 8 7 8 8 8 7 8	
アスゲ順A スゲ属A スポーク・ツリグサ属B カヤマツリグサ属? カヤマツリグサー科 イン・ション・ファック・サンス カカマン・ファック・ファック・ファック・ファック・ファック・ファック・ファック・ファック	果果果果 果果果花果果果 果種 種 種 種実実実実 実実実被実実実 実子 子 子 子	完完破完破完完完完完破破完破破完破完破完破完成完形形片形片形形形形形片片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形	2面 3面 2面網目	1 5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 2 6 4 18 3 3 3 2 7 4 7	
スゲ属A スゲ属B ホケンリグサ属 カヤツリグサ属? カヤツリグサス科 カヤツリグサス科 インシンタ スペープ ステンパデン カイギシステス ステンパデン ステンパデン ステンパデン ステンパデン ステンパデン ステンプ ステンプ ステンプ ステンプ ステンプ ステンプ ステンプ ステン	果果果 果果果花果果果 果種 種 種 種実実実 実実実実被実実実 実子 子 子子	完破完破完完完完完破破完破破完破完破完破完破完时形片形形形形形片片形片片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片	3面 2面網目	5 2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 6 4 18 3 3 3 0 2 7 4 7	
スゲ属B ホタルイ属 カヤツリグサ属? カヤマクリグサ科 イギンリグサ科 イギシンバ イギシンスタ イヌア (A 種 タ タズ ミ ナ グサ近似種 ナ デ シコ科 ア ロ エ タ ガラシ キンボウゲ属	果果 果果果花果果果 果種 種 種 種実実 実実実装被実実実 実子 子 子 子	破完破完完完完完破破完破破完破完破完破完时,并形片形形形形形片片形片片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片	3面 2面網目	2 4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 6 4 18 3 3 30 2 74	
ホタルイ属 カヤツリグサ属? カヤツリグサ属? カヤツリグサ科 イラグサ科 イラジンパ イタデ 『属B ム ナ ブ ナ ブ サ 近似種 ナ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ エ エ ア カ ボ ラ シ キンポウゲ属	果 果果果花果果果 果種 種 種 種	完破完完完完完破破完破破完破完破完破完破完	2面網目	4 10 3 2 1 1 2 6 2 2 2 6 4 18 3 3 30 2 74	
カヤツリグサ属 カヤツリグサ属? カヤツリグサ科 イラテングサ科 ギシギン属 ミノソクデ近似種 タデ属B タス ミ ナ ナ グサ近似種 ナ ア カチ属 ナ アカザ属 ヒコ 属 タ ガラシ キンポウゲ属	果果果果花果果果 果種 種 種 種寒実実実被実実実 実子 子 子 子	破完完完完完破破完破破完破完破完破完时形形形形片片形片片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形		10 3 2 1 1 2 6 2 2 2 6 4 18 3 3 30 2 74	
カヤツリグサ属? カヤラリグサ科 イギシギシ属 ギシソソがデ近似種 タデ 属A タデ 属B タズ ミナグサ近似種 ナデシコ科 アカエ カナ カチ属 タガ カチョシ オカラシ キンポウゲ属	果果果花果果果 果種 種 種 種寒実実被実実実 実子 子 子 子	完完完完破破完破破完破完破完破完形形形片片形片片形片形形片形形片形		2 1 1 2 6 2 2 2 6 4 18 3 3 30 2 74	
カヤツリグサ科 イラグサシ属 ミシソソバ イタデシリスデ近似種 タア 属B タス ミ ナ グサ近似種 ナ デ シコ科 アカ属 タガラシ キンポウゲ属	果果花果果果 果種 種 種 種	完完完破破完破破完破完破完破完形形片片形片片形片形形片形片形片形片形片形片形片形		1 1 2 6 2 2 2 6 4 18 3 3 30 2 74	
イラクサ科 ギシギシ属 ミソンバ ミイヌタデ近似種 タデ属B タアベリヒユ ミミナグサ近似種 ナデシコ科 アカリ ドロス タガラシ キンポウゲ属	果花果果果 果種 種 種 種	完完破破完破破完破完破完破完成完成完成形片片形片片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片		1 2 6 2 2 6 4 18 3 30 2 74	
ギシギシ属 ミゾソバ イタデ 近似種 クテ 属B タ スペリヒユ ミミナグサ近似種 ナデシコ科 アカ	花果果果 果種 種 種 種	完破破完破破完破完破完破完成形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片形片		2 6 2 2 6 4 18 3 30 2 74	
ミソソバ イヌタデ近似種 タデ属A タデ属B スペリヒユ ミミナグサ近似種 ナデシコ科 アカザ属 アコム属 タガラシ キンポウゲ属	果果果 果種 種 種 種 種	破破完破破完破完破完破完时,		6 2 2 6 4 18 3 30 2 74	
イヌタデ近似種 タデ属A タデ属B スペリヒユ ミミナグサ近似種 ナデシコ科 アカザ属 ヒコ属 タガラシ キンポウゲ属	果果 果種 種 種 種 種 そ 子 子	破完破破完破完破完破完成完成完成完成完成,		2 2 6 4 18 3 30 2 74	
タデ属A タデ属B スペリヒユ ミミナグサ近似種 ナデシコ科 アカザ属 ヒユ属 タガラシ キンポウゲ属	果 果種 種 種 種 種 種	完破破完破完破完破完形片片形片形片形片形片形片形片形		2 6 4 18 3 30 2 74	
スペリヒユ ミミナグサ近似種 ナデシコ科 アカザ属 ヒユ属 タガラシ キンポウゲ属	種子 種子 種子	破完破完破完破完	2面粗面	4 18 3 30 2 74	
スペリヒユ ミミナグサ近似種 ナデシコ科 アカザ属 ヒユ属 タガラシ キンポウゲ属	種子 種子 種子	完破完破完破完	2面粗面	18 3 30 2 74	
ミミナグサ近似種 ナデシコ科 アカザ属 ヒユ属 タガラシ キンポウゲ属	種子 種子 種子	破完破完破完		3 30 2 74	
ナデシコ科 アカザ属 ヒユ属 タガラシ キンポウゲ属	種子種子	完形 破片 完 破 完 形 片 形		30 2 74	
ナデシコ科 アカザ属 ヒユ属 タガラシ キンポウゲ属	種子種子	破片 完形 破片 完形		2 74	
アカザ属 ヒユ属 タガラシ キンポウゲ属	種子	破片 完形			
ヒユ属 タガラシ キンポウゲ属		完形		45	
ヒユ属 タガラシ キンポウゲ属					
タガラシ キンボウゲ属	悝丁	71:77%		2	食痕1個
キンポウゲ属		破片		100 45	
キンポウゲ属	果実	完形		43	
	.,	破片		44	
アブラナ科	果実	完形		1	
to the contract of the contrac	種子	完形		26	発芽4個
キジムシロ類	核	完形	隆条	1	
カタバミ属	種子	破片 完形		1 20	
7 7 · · · ()m	196 1	破片		33	
スミレ属	種子	完形		3	
		破片		2	
モモルディカメロン型	種子	完形		1	
モモルディカメロン型-マクワ・シロウリ型 メロン類	種子 種子	破片 破片		1 3	
アロン短 アリノトウグサ	核	完形		3 2	
, , , , , , ,	120	破片		1	
チドメグサ属	果実	完形		7	
		破片		1	
シソ属	果実	完形		4	
シソ属-イヌコウジュ属	果実	破片 完形		1 8	
マノ両 イグーンジュ店	木天	元形 破片		8 35	
トウバナ属	果実	完形		1	
メハジキ属	果実	完形		2	
ナス近似種	種子	完形		7	
La R	or →	破片		24	
ナス属 ホオブセ粒	種子	完形		1 5	ハダカホオズキ、イガホオズキ属の類
ホオズキ類	種子	完形 破片		5 2	ハタルルオムヤ、イガボオスキ属の類
タカサブロウ	果実	完形		2	
		破片		3	
明 A			-	A.F.	キンポウゲ属の甲宝9
A		完形 破片		45 20	キンポウゲ属の果実?
В		完形		20	
C		完形		1	
計					
木本				22	
草本 不明				736 68	
个明 合計(不明を除く)				68 758	
- の他				100	
木材				+	
炭化材				+	
昆虫類				+	
>析量(cc) >析量(g)				200 331. 8	

マクワ・シロウリ型の種子が1 個、メロン類の種子が3 個、シソ属の果実が5 個、ナス(近似種)の種子が31 個の、計89 個が確認された。

栽培種を除いた分類群は、木本類は、常緑広葉樹(照葉樹)林の林床などに生育する常緑低木のヒサカキ属や、常緑高木のアカマツ、落葉低木のキイチゴ属、サンショウなどの、伐採地や林緑等の明るく開けた場所に生育する陽樹が確認された。草本類は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多く、水湿地生植物のオモダカ科、ミズアオイ属、イボクサ、アゼスゲ類、ホタルイ属、ミゾソバ、タガラシ、タカサブロウなどを含む。主な分類群の計測値を表3に示し、以下に形態的特徴等を述べる。

・アカマツ (Pinus densiflora Sieb. et Zucc.) マツ科マツ属

針葉は灰褐色、完形ならば、長さ $1\sim2\,\mathrm{cm}$ 、径 $1\sim1.5\,\mathrm{mm}$ 程度の針形で、短枝から $2\,\mathrm{d}$ 葉が伸びる。破片の残存長は $0.8\,\mathrm{cm}$ 。葉横断面は半円形で、中心部に $2\,\mathrm{d}$ の維管束がある。数個の樹脂道が下表皮に接在する。

・ヒサカキ属 (Eurya) ツバキ科

種子は灰黒褐色、長さ1.0mm、幅1.3mm、厚さ0.5mmのやや偏平な多角状広倒卵体。基部の臍に向かい薄くなる。種皮表面は臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

現在の本地域に分布するヒサカキ属は、常緑広葉樹林内の林床に生育する常緑低木~小高木のヒサカキ(E. japonica Thunb.)の1種であるため、出土種子はヒサカキに由来する可能性が高い。と考えられる。の実体顕微鏡下観察による区別は困難であることから、ヒサカキ属にとどめている。

計測値(mm) 分類群 部位 長さ 厚さ 備考 コムギ 2.7 炭化 胚乳•穎 3.0 3.2 モモルディカメロン型 種子 8.1 3.9 1.3 + モモルディカメロン型ーマクワ・シロウリ型 種子 半分未満,基部欠捐 7.9 3.1 -果実 1.7 1.6 1.4 着点:不明瞭 シソ属 1.5 1.5 着点:明瞭(径0.7mm) 1.2 着点:明瞭(径0.7mm) 1.4 1.3 1.1 シソ属ーイヌコウジュ属 着点:不明瞭 果実 1.3 1.3 0.9 1.3 1.2 0.9 着点:不明瞭 1.3 1.0 0.8 着点:不明瞭 1.2 1.1 0.9 着点:不明瞭 1.2 1.1 0.9 着点:不明瞭,食痕(径0.3mm) 1.1 0.9 0.8 着点:不明瞭 着点:不明瞭 0.9 0.9 0.8 ナス近似種 種子 2.9 1.0 3.6 2.9 3.2 0.7 2.6 3.0 0.9 2.4 2.9 0.6 2.9 2.4 0.4 2.3 3.0 0.6 種子 ナス属 1.7 1.9 0.4 ホオズキ類 種子 2.0 1.8 0.4 0.5 2.0 1.8 1.9 2.0 0.4 19 1.8 0.2 1.8

表3 主な種実遺体の計測値

注)計測値はデジタルノギスによる。欠損部は残存値に「+」で示す。欠損が大きい場合は「-」で示す。

・キイチゴ属 (Rubus) バラ科

核(内果皮)は灰黄褐色、形態上差異のある複数種を一括している。長さ1.1~2.1 mm、幅0.7~1.1 mmの偏平な半倒卵体で腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・サンショウ (Zanthoxylum piperitum (L.) DC.) ミカン科サンショウ属

種子は灰黒褐色、完形ならば長さ4mm、幅3.5mm、厚さ3mm程度のやや偏平な倒卵体で、腹面正中線上基部に長径1.8mm程度の斜切形の臍がある。破片は最大2.5mm。種皮は厚く硬く、表面には浅く細かな網目模様がある。

・コムギ (Triticum aestivum L.) イネ科コムギ属

胚乳と胚乳を包む穎(果)は、炭化しており黒色。長さ3.0mm、幅3.2mm、厚さ2.7mmの楕円体。腹面は、正中線上にやや太く深い縦溝がある。背面は、基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面は粗面で、微細な粒状模様がある。表面に穎の破片が付着する。穎は薄く、表面は平滑で微細な縦筋がある。

・イネ (Oryza sativa L.) イネ科イネ属

穎(果)は淡~灰褐色、完形ならば、長さ6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ1.5mm程度のやや偏平な長楕円体。破片の残存長は4mm程度。基部に大きさ1mm程度の斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。

・メロン類 (Cucumis melo L.) ウリ科キュウリ属

種子は灰褐色、長さ8.1 mm、幅3.9 mm、残存厚1.3 mmの偏平な狭倒皮針形。藤下(1984)の基準による大粒のモモルディカメロン型(長さ8.1 mm以上)が1個確認された。また、基部をわずかに欠損する、残存長7.9 mmの1個を、モモルディカメロン型 – マクワ・シロウリ型としている。基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は平滑で、縦長の細胞が密に配列する。

・シソ属 (Perilla) シソ科

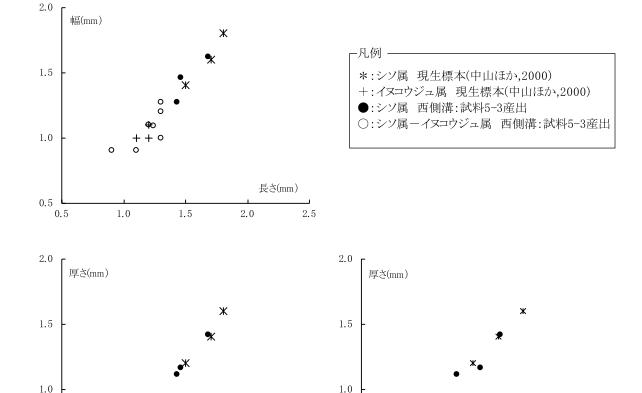
果実は暗灰褐色、長さ1.4~1.6mm、幅1.3~1.6mm、厚さ1.1~1.4mmの倒広卵体。果実基部には径0.7mmの大きな着点部があり、舌状に突出する。果皮表面には浅く大きく不規則な網目模様がある。

シソ属には、栽培種で軟実のエゴマと、硬実のシソのほかに、硬実の雑草型エゴマがあり、雑草型エゴマの果実の大きさは、エゴマとシソの中間型を示す(新田,2001)。遺跡出土果実に、硬実と軟実の区別は難しいため、本分析では、笠原(1982)の基準(長さ $1.4 \sim 1.5 \,\mathrm{mm}$ 、幅 $1.1 \sim 1.2 \,\mathrm{mm}$ をシソ、長さ $2.0 \sim 2.8 \,\mathrm{mm}$ 、幅 $1.8 \sim 2.5 \,\mathrm{mm}$ をエゴマ)や、中山ほか(2000)の計測値を参考に、シソ属としている。

・シソ属 (Perilla) - イヌコウジュ属 (Mosla) シソ科

果実は淡~灰褐色、長さ0.9~1.3mm、幅0.9~1.3mm、厚さは0.8~0.9mmの倒広卵体。果実基部は 舌状に突出し、着点部は不明瞭である。果皮表面には浅く大きく不規則な網目模様がある。

栽培種のシソ属と、野生種のイヌコウジュ属の果実は、大きさの変異が連続的である(図2)。本



分析では、大きさと着点部、網目模様を主な分類基準としている。

2.0

・ナス近似種(Solanum cf. melongena L) ナス科ナス属

図3

1.5

種子は灰褐色、長さ $2.3\sim2.9\,\mathrm{mm}$ 、幅 $2.9\sim3.6\,\mathrm{mm}$ 、厚さ $0.4\sim1.0\,\mathrm{mm}$ の偏平で歪な腎臓形。基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。なお、長さ $1.7\,\mathrm{mm}$ 、幅 $1.9\,\mathrm{mm}$ 以上、厚さ $0.4\,\mathrm{mm}$ の野生種に由来すると思われる小型種子をナス属と区別している。

0.5

シソ属、イヌコウジョ属の果実の大きさ

0.5

1.0

1.5

2.5

幅(mm)

2.5

2.0

(5) 考察

0.5

0.5

ここでは、上記の分析結果に基づいて各時代の周辺植生について検討する。

1) 平安時代前期

1.0

平安時代前期の西堀川小路西側溝(溝 8)からは、花粉化石・大型植物遺体が比較的良好に産出したが、西堀川充填堆積物下部層準では花粉化石の保存状態が悪かった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。分析を実施した西堀川(溝 1)充填堆積物上部層準は、植物遺体をほとんど含まない、擾乱された黒褐色腐植質砂質泥からなる。この層相から、本層準は流路周辺の黒褐色腐植質土壌が再堆積する、乾湿を繰り返す、土

壌生成が進行する時期を挟在する堆積場で形成されたことが推定される。したがって、花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪かった原因として、風化作用の影響が強く、取り込まれた花粉が消失している可能性が高い。なお、わずかに産出する種類は、西堀川小路西側溝(溝8)で多産ないし産出する種類であることから、同様の植生を反映していると推定される。

西堀川小路西側溝(溝8)の花粉・大型植物遺体群集は、いずれも草本類の割合が高いことが特 徴である。平安時代前期の遺構の基盤をなす堆積物は、扇状地性堆積物を母材とする黒褐色腐植質 土壌であったことを合わせ考えると、当時の調査区一帯は開けた場所であったことが推定される。 草本の種類構成をみると、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、アリノトウ グサ属、ヨモギ属等が多く認められる。種実では、エノコログサ属等のイネ科、スゲ属、カヤツリ グサ属等のカヤツリグサ科、ギシギシ属やタデ属などのタデ科、ミミナグサなどのナデシコ科、ア カザ属、ヒユ属、アブラナ科、カタバミ属、スミレ属が多い。植物は、種類や部位によって化石に なりやすさが異なるため、必ずしも同じにはならないものの、今回の結果をみると、種実遺体と花 粉化石で重複した種類も多い。これらは、いずれも開けた明るい場所に生育する「人里植物」を多 く含む分類群である。その他にも同様の生育環境を示す草本類が多く認められることから、これら は周辺の草地に生育していたと推測される。なお、種実同定で検出されたアブラナ科の中には発芽 した個体があることから、一部の種実は擾乱等により後代のものが混入した可能性がある。また、 水生植物も多くの種類が検出されている。花粉化石では、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ 属、ミズアオイ属などのほか、イネ科やカヤツリグサ科の一部にも水湿地に生育する種が含まれ る。種実遺体では、ミズアオイ属、イボクサ、ホタルイ属、タガラシ、タカサブロウなどが該当す る。これらは溝内に生育していた可能性がある。栽培植物に着目すると、花粉化石では、ソバ属、 イネ属、アズキ属、ベニバナ属、種実遺体ではコムギ、イネ、メロン類、シソ属、ナスが検出され る。これらは、当時栽培・利用されていたものと考えられる。これらの種類は、これまで平安京域 の条坊側溝などでも確認されている。また、平安時代ではモモルディカ型といわれる大型のメロン 類種子が多く検出される傾向にあるが(藤下.1984など)、今回も調和的な結果といえる。

一方、木本類をみると、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属等の針葉樹、コナラ属アカガシ亜属、シイ属等の常緑広葉樹、ブナ属、コナラ属コナラ亜属等の落葉広葉樹が認められる。このことから、当時の本遺跡周辺ではアカガシ亜属を主体とする暖温帯性常緑広葉樹林が分布していたが、谷斜面や扇状地上など土地条件が悪い場所ではモミ属、ツガ属、スギ属等の温帯針葉樹が生育していたと考えられる。また、ブナ属、コナラ亜属等の落葉広葉樹は、標高の高い場所に分布していたと推測される。サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、トネリコ属等は、河畔や低湿地等の適湿地を好むことから、谷筋や河川沿いなどに生育していた可能性がある。また、マツ属がやや多く、種実遺体では葉も検出されている。マツ属は痩せ地に育ち、成長が早いことから、伐採地などに二次林を形成する。また、生態性の特性や有用材として使われることから、山野に植林されることも多い。今回の花粉分析結果では、溝埋土下部層準で有用材であるスギ属の減少と相関するように増加している。このことは、溝

埋土は溝周囲の土壌の再堆積物からなることを踏まえると、平安時代前期には溝周辺において、マ ツ属が分布を拡げたことが推定される。

マツ属花粉の増加は、近畿地方では古墳時代頃から漸増し、中近世以降に急増するパターンが多く、今回の結果も基本的にこれに準ずる結果といえる。ただし、平安京域ではマツ属の増加パターンが土地利用状況によって異なっており、氾濫低地などでは12世紀以降にマツ属花粉が急増する場合が多いが、宅地域は庭園などの調査地では9世紀頃に急増する傾向が確認される。飛田(2002)によると、平安時代前期後半になると、平安京の庭園ではサクラの植栽および前栽が行われるようになり、マツが有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあったと指摘されている。これらのことを踏まえると、今回の結果で認められた平安時代前期のマツ属花粉の増加も、宅地域などを中心にアカマツなどのマツ類が広く植栽されるようになったことを示している可能性が高い。

なお、平安時代前期の西堀川小路西側溝(溝8)充填堆積物から、鞭虫卵をはじめとする寄生虫卵が検出された。定量解析を実施していないため、どのくらいの含量があるか不明であるが、糞便などの堆積物で多産する調査事例も報告されている(例えば金原・金原,1992,1993;金原ほか,1995など)。これらのことを考慮すると、溝内に糞便の流入があった可能性が高い。

2) 室町時代

室町時代の遺物が出土する西堀川充填堆積物 (氾濫堆積14) では、花粉化石の産状が悪く、古植生推定を行うことが困難であった。堆積層の層相が初生の堆積構造を残す、水流下で形成された泥質砂からなることを踏まえると、取り込まれる花粉量が少なかった可能性があげられる。ただし、僅かに産出する種類には栽培種のイネ属などが認められることから、この時期の集水域沿いに栽培種のイネ属が存在したことが示唆される。

3) 安土・桃山時代

安土・桃山時代の御土居土塁の基盤に構築されている溝(溝15)では、木本類の産出状況が悪く、周辺植生の検討は困難であるが、草本類は多産する。いずれの試料もイネ科が多産し、アカザ科、キンポウゲ科、ヨモギ属等の人里植物を含む分類群が多く認められ、アカウキクサ属等の水生シダ類も確認された。よって、これらの草本類が溝周辺や溝内に生育していたと考えられ、当該期の調査区一帯が開けた場所であったことを示唆する。

(4) 近世

御土居の堀(堀17)充填堆積物最下部(江戸時代と推定されている)の花粉化石群集をみると、 木本類ではマツ属が多産する。マツ属は、極端な陽樹で痩せた裸地などにも生育する二次林を代表 する種類であるほか、観賞用や用材などとして古くから植栽・植林されてきた種類である。平安時 代に多産していたアカガシ亜属の割合が少ないことも考慮すると、江戸時代頃になると、周辺の常 緑広葉樹林が伐採され、二次林や植林としてのマツ林が増加したと推測される。その他ではスギ 属、ハンノキ属、コナラ亜属、エノキ属 – ムクノキ属、モチノキ属等の生育が窺える。江戸時代で マツ属が多産する傾向は、京都市内の遺跡において普遍的にみられる傾向の一つである(上 中.2004など)。

草本植生ではイネ科やアブラナ科をはじめとする人里植物が多いことから、調査地周辺の開けた草地にこれらの草本類が生育していたと考えられる。また、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ゴキヅル属、ミズワラビ属、アカウキクサ属等の水湿地生草本・シダ類は、流路内およびその集水域に生育していたものに由来すると思われる。

なお、多産するイネ科のうち、イネ属型が約26%検出されている。中村(1980b)は、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合は30%以上の比率であるとしていることから、調査流路沿いやその集水域に水田耕作地が存在した可能性がある。また、イネの花粉は、生産される花粉の1/4がもみ殻内に残留することが知られている(中村,1980b)。もし、遺構内にもみ殻などの植物体が混入していたとすれば、イネ属型花粉はもみ殻に残存しているものに由来する可能性もある。その点については、植物珪酸体分析や微細物分析などを実施し、もみ殻などの植物体の混入を検討することが望まれる。

引用文献

藤下典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究,古文化 財編集委員会編.同朋舎.638-654.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

金原正明・金原正子,1992,花粉分析および寄生虫.藤原京跡の便所遺構 - 右京七条一坊西北坪 - , 奈良国立 文化財研究所,12-15.

金原正明・金原正子,1993,史跡松江城二ノ丸番所跡 SK-04内堆積土の分析.史跡松江城発掘調査報告書,松江 市教委区委員会,51-56.

金原正明・金原正子・中村亮仁,1995,大宮坊跡(厠跡)における自然科学的分析.史跡石動山環境整備事業報告 II.石川県鹿島町教育委員会.51-70.

笠原安夫,1982,鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実タール状塊について.鳥浜貝塚1980年度 発掘調査概報・研究の成果 - 縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2 - ,福井県教育委員会,65-87.

三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態,植生史研究,6,15-30.

中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.

中村 純,1980a,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12.13集,91p.

中村 純,1980b,花粉分析による稲作史の研究.自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 - 総括報告書 - 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班,187-204.

中山至大·井之口希秀·南谷忠志。2000.日本植物種子図鑑.東北大学出版会。642p.

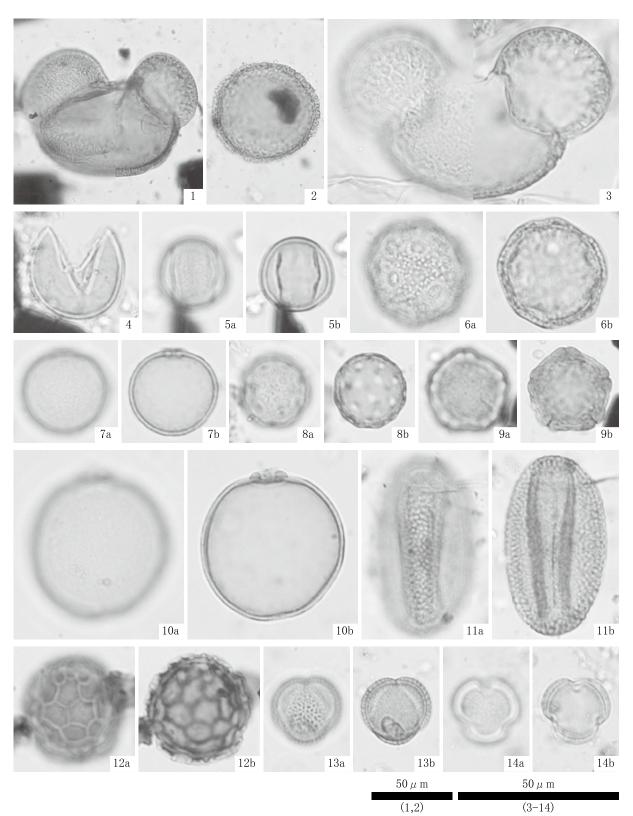
新田みゆき,2001,シソとエゴマの分化と多様性.栽培植物の自然史-野生植物と人類の共進化-,山口裕文・ 島本義也編,北海道大学図書刊行会,165-175.2-73.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態,大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.

飛田範夫,2002,日本庭園の植栽史,京都大学学術出版会,435p

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

上中央子,2004,京都大学北部構内遺跡における花粉分析.日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨集,7.



- 1. モミ属(西側溝:試料5-3)
- 3.マツ属(御土居の堀:試料1-1)
- 5.コナラ属アカガシ亜属(御土居の堀:試料1-1)
- 7. イネ科(御土居の堀: 試料1-1)
- 9. アリノトウグサ属(西側溝: 試料5-1)
- 11 .ソバ属(溝15:試料2-1)
- 13.アブラナ科(御土居の堀:試料1-1)
- 2. ツガ属(西側溝:試料5-3)
- 4.スギ属(御土居の堀:試料1-1)
- 6. ナデシコ科(御土居の堀: 試料1-1)
- 8.アカザ科(西側溝:試料5-2)
- 10 . イネ属型(御土居の堀: 試料1-1)
- 12 . アズキ属(西側溝:試料5-1)
- 14 . ヨモギ属(西側溝:試料5-3)

図4 花粉化石

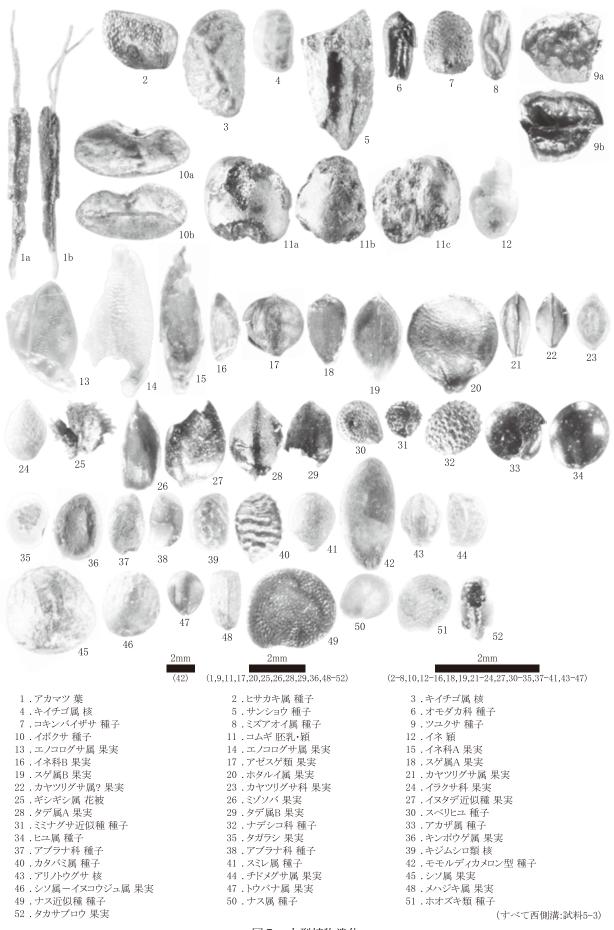


図5 大型植物遺体

西堀川小路西側溝から出土した動物遺存体 付章2

丸山真史(奈良文化財研究所)

(1) 概要

溝8は西堀川小路の西側溝にあたり、その幅3.5~5mを測り、道路側溝としては規模が大きい。 そこから出土した動物遺存体は、破片数にして97点を数える(表1・2・3)。この道路側溝では、 発掘中に大量の水が湧き出す湿地環境にあり、動物遺存体が保存されたと考えられる。しかし、大 部分の遺存体が脆弱な状態であり、アクリル系樹脂(パラロイドB-72をアセトンで5~10%に希 釈した)を塗布して補強した。最も多く出土した動物種はウマであり、41点を数える。次いでウシ 3点、それにイノシシ2点、ヒト1点が続く。

(2) 種類別の特徴

ヒト

1区から、顎骨から遊離した上顎第1第臼歯が1点出土している。また、同遺構からヒトと思わ れる頭蓋骨の破片が1点出土している。

ウマ

最多の出土量を示したウマは、大部分が顎骨から遊離した歯のエナメル質であり、37本分以上が 含まれる。歯種を同定したものは、2区から出土している下顎第3前臼歯(左)と第3後臼歯(左) 1点ずつである。また、歯種の候補が限定できるものが1区で5点、2区で4点含まれる。これら について歯冠高を計測し、推定される死亡年齢はいずれも生後10年以下である。なかには、3~4 歳以下の幼齢馬と推定される個体が含まれるが、大部分は5年以上の若齢から壮齢馬である。

歯以外に1区から上下不明の顎骨、上腕骨、中足骨が1点ずつ、2区から下顎骨(右)が1点出 土している。中足骨は近位端最大幅(Bp) 42.7 mmを測り、体 高110~115cmと推定される。また、下顎骨には第4前臼歯か ら第3後臼歯までが植立しており、第4前臼歯と第3後臼歯 の歯冠高は、それぞれ76.4mm、70.1mmを測り、いずれも生後3 ~4年の幼齢馬と推定される。後臼歯列長85.2mmを測り、日本 在来馬のなかでも中形の木曽馬に相当する大きさである。

ウシ

1区から、顎骨から遊離した上顎後臼歯2点、中足骨1点、 計3点が出土している。遊離歯のうち1点は第1、第2後臼 歯のいずれか、もう1点は第2、第3後臼歯のいずれかと考 えられる。後者は咬耗が進んでいない若齢か壮齢個体と推定 される。

表1 種名表

哺乳綱 Mammalia 霊長目 Primates ヒト科 Hominidae ヒト Hommo sapiense 奇蹄目 Perissodactyla ウマ科 Equidae ウマ Equus caballus 偶蹄目 Artiodactyla ウシ科 Bovidae ウシ Bos Taurus イノシシ科 Suidae イノシシ Sus scrofa

表 2 動物遺存体一覧表

地区	大分類	小分類	部位	部分	左右	備考
1区	哺乳綱	イノシシ	上腕骨	骨幹部-遠位端	左	Bd44. 26
1区	哺乳綱	イノシシ	肩甲骨	肩甲頸	左	
1区	哺乳綱	ウシ	中足骨	骨幹部-遠位部	左	
1区	哺乳綱	ウシ	遊離歯	上顎後M1/M2	不明	
1区	哺乳綱	ウシ	遊離歯	上顎M2/M3	右	歯冠高高い、比較的若い
1区	哺乳綱	ヒト	遊離歯	上顎M1	右	歯根なし、咬耗すすまず
1区	哺乳綱	ヒト?	頭蓋骨?			
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎P3/P4	左	歯冠高50.14以上
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎P3/P4/M1	右	
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎P3/P4/M1	右	同一個体②?, 歯冠高48. 29
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎P3/P4/M1	左	歯冠高45. 19
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎M1/M2	左	歯冠高49.36以上
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	左	P3/P4/M1/M2, 歯冠高48. 90以上
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	切歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	複数本含まれる
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	顎骨	切歯あり	不明	
1区	哺乳綱	ウマ	上腕骨	遠位部	左	
1区	哺乳綱	ウマ	中足骨	近位端-骨幹部	左	Bp42. 67
1区	哺乳綱	ウマ/ウシ	遊離歯	臼歯	不明	
1区	哺乳綱	ウマ/ウシ	上腕骨	骨幹部	右	
1区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
1区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
1区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
1区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
1区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
1区	哺乳綱	ウマ/ウシ	不明		不明	
1区	哺乳綱 哺乳綱	ウマ/ウシ	不明		不明	
2区		ウマ/ウシ	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱 	不明不明	四肢骨 不明		不明不明	
2区	哺乳類	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎M1/M2	左	歯冠高42.83
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	左	E37E3F4 124. 00
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	左	P3/P4/M1, 歯冠高55. 45程度
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎P3	右	同一個体①?, 歯冠高43.85
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎P4/M1	右	同一個体①?, 歯冠高69.42
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎M1/M2	左	南冠高68.71以上
	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		松工品作图	98m1/m2	/	四/四月00.11公工

地区	大分類	小分類	部位	部分	左右	備考
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎M1/M2	左	歯冠高69.52以上
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎M3	左	歯冠高67.47以上
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	不明	P3/P4/M1/M2, 歯冠高70. 26以上
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	下顎?臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	2本以上含まれる
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	壮齢~老齢(短い)
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	遊離歯	臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ	下顎骨	P4~M3	右	後臼歯列長85.17,歯冠高P4:76.41,M3:70.09以上
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	遊離歯	臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	遊離歯	臼歯	不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	脛骨?	骨幹部	不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	大腿骨?	骨幹部	不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨	骨幹部	不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱	不明	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱	不明	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱	不明	四肢骨		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	
2区	哺乳綱	不明	不明		不明	

^{*}歯種の略称: P3=第3前臼歯、P4=第4前臼歯、M1=第1後臼歯(ヒトは大臼歯)、M2=第2後臼歯、M3=第3後臼歯 *計測値の単位はいずれもmm

イノシシ

1 区から、肩甲骨、上腕骨が1点ずつ、計2点が出土している。上腕骨の遠位端最大幅 (Bd) 44.3 mmを測り、端部が癒合した成獣個体である。

(3) 西堀川小路西側溝から出土したウマについて

古代には、ウシやウマは役畜として乗馬や駄馬、牛車の牽引、農耕に使役され、祭祀の犠牲に用いられた。死んでなおも、それらの肉、皮革、骨、角などが資源として利用されたことが、遺跡から出土する遺存体から明らかにされている。

平安京では右京八条二坊の側溝から(辻・本・加納1993、辻・近藤1996)、ウシやウマの骨が多数出土している。都城の南方の運河や大規模な側溝は、水が最も汚濁する地点であり、ウシやウマの骨が多数出土することから、官営の斃牛馬処理工房の存在や、そこで皮革生産も行われたことが指摘されている(松井2004)。長岡京左京二条二坊跡では祭祀遺物を伴った動物犠牲が指摘されており(渡辺1989)、平安京右京六条三坊ではウシやウマとともに祭祀遺物が出土しているが、明確な動物供儀と断定するには至っていない(丸山・松井2004)。また、平安京左京六条三坊五町では、楊梅小路の路面とその整地土からウマ、ウシの骨が多数出土しているが、その用途は明らかでない(丸山・松井2005)。

当調査地は平安京右京二条二坊十一町にあたり、動物遺存体は南北に延びる西堀川小路の西側 溝から出土したものである。大部分がウマであり、ヒト、イノシシ、ウシが少数ずつ含まれる。出 土したウマの右下顎骨は、生後4年以下の幼齢個体であり、寿命を全うしたとは考えにくい。この 側溝では、水晶製の数珠玉など祭祀に関連する遺物が出土しているが、この右下顎骨と対になる左 下顎骨、組み合う頭蓋骨は見られず、散乱状態であることから、祭祀にともなう犠牲馬であるか、



図1 溝8から出土したウマの下顎骨(1:2)

即断することは難しい。ただし、出土した馬の臼歯から推定される年齢は、働き盛りの若齢から壮齢個体が多く、自然死したものではなく、病死あるいは屠殺されたことが考えられる。また、平安京では9世紀には宮中に馬・牛が侵入しているだけでなく、京域に広く放飼されていたという(西山2004)。この西堀川小路の西側溝は規模が大きく、日常雑器も出土していることから、斃牛馬を投棄したことや、イノシシが出土していることから、食料残滓が含まれている可能性もある。

(4) 小結

西堀川小路の西側溝から、ウマを主体とする動物遺存体が出土している。大部分の部位が、臼歯のエナメル質であり、歯種を特定できないものも多く含まれる。同定できたものでは、10年以下の働き盛りのウマばかりであり、生後4年以下の幼齢馬が含まれる。自然死したと考えにくく、祭祀にともなう犠牲、病死、屠殺されたものと考えられるが、明確な根拠を示すことは困難である。今後、出土状況、共伴遺物を精査し、平安京内における古代のウマ利用について再考することが必要である。

註

- 1 大型哺乳類の細片が多数含まれるが、それらは計数から除外した。
- 2 西中川駿編(1991)に倣って、体高、死亡年齢を推定した。

参考文献

西中川駿編1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年 度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告

西山良平2004『都市平安京』京都大学学術出版会

辻裕司·本弥八郎·加納敬二1988「平安京右京八条二坊」『昭和60年度年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 pp.50-52

辻裕司·近藤知子1996「平安京右京八条二坊」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所pp.49-55

松井章2004「近世初頭における斃牛馬処理システムの変容」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50 周年記念論集 考古学研究会pp.407-416

丸山真史・松井章2004「平安京右京六条三坊七・八・九・十町出土の動物遺存体」『平安京跡研究調査報告』 第20輯 平安京右京六条三坊 (財) 古代學協會pp.169-179

丸山真史・松井章2005「出土した脊椎動物遺存体」『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所 発掘調査報告2005-8(財)京都市埋蔵文化財研究所 pp.126-137

渡辺博1989「長岡京跡左京第162次(7ANEKD)~左京二条二坊十五町、二条条間大路・東二坊大路交差 点~発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書第27集』(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育 委員会pp.187-201

付章3 西堀川小路西側溝から出土した昆虫遺体

塚本珪一(日本甲虫学会)

(1) コクワガタの特徴

上翅の光沢、点刻の特徴から、クワガタムシ科コクワガタ♀ *Dorcus rectus rectus* (Motschulsky、1857) とする(日本甲虫学会 上林昭景・森 正人・河原正羽・塚本珪一合議同定)。

名義タイプ亜種 コクワガタ♀の特徴として、「体長は21.6~33.0mm、光沢がある。大あごは、細くほぼ直線的。頭部は、眼縁突起側方へ突出し、頭楯ほぼ台形、前胸背板は、やや幅広く、中央やや後方で最も幅が広い。側縁は、最後部より前方はゆるやかに湾入し、後方は斜めに切れ込む。上翅に点刻からなる縦条があるが目立たない。」

現在の京都市中では、成虫は5月~10月に、京都御苑、京都周辺部里地・里山に多く産する。クヌギ、コナラの樹液に見られ、昼間はそれらの根際に生息する。

♀は乾燥傾向の腐朽木を好み、生木の腐朽部、立ち枯れの地上部、倒木表面などをはじめ、きわめて乾いた日向に放置された細めの倒木にも産卵し、立ち枯れ根部や半埋没木など水分含有量の多いものはあまり利用しない。産卵材は白色腐朽菌によって朽ちた針葉樹、広葉樹、竹など樹種は問わない。(参考・引用文献『日本産コガネムシ上科標準図鑑』学研、2012年)

2005年頃から京都の里地・里山の自然林にカシノナガキクイムシ Platypus quercivorus によるいわゆる「楢枯れ」がはじまった。その防除・対応にためにビニール・シート等による被覆、殺菌・殺虫剤の使用などの風景が見られる。

被覆によるシート中には脱出できない数種のコガネムシ科のコウチュウ類、コクワガタがみられる。京都御苑でも 2013年10月に入ってコナラなどにコクワガタの3を数頭観察できた。自然林のコクワガタなどの生息構造として、「クヌギ、コナラなど・シワタケ科(白色腐朽菌)・コガネムシ科コウチュウ類・カシノナガキクイムシ・スズメバチ・ α 」 α はヒト種の関与といったものを考えた。

(2) 出土遺体の記載

コクワガタ♀、体長:24mm、頭部幅7mm、胸部幅10mm。

遺物は、平安時代前期の西堀川小路西側溝(溝8)の埋土内から出土した。当該埋土は木質の遺物なども良好に遺存するシルトから粘土質のものである。溝埋土内の微細遺物を検出するために、 土層観察用畦の土を層位別に取り上げて、水洗選別を行っており、当該遺体もこの埋土中から出土した。

遺体に付着した土などの汚れのクリーニングを行った。体色は黒色で光沢がある。大あごは、ほ ば直線的、頭部は眼縁突起が側前方へ突出、頭楯は台形、表面にはほぼ円形の点刻がある。中央に 2小瘤がある。アンテナは欠失。舌部の一部は残されている。前胸背は幅広く、側縁は中央後方で

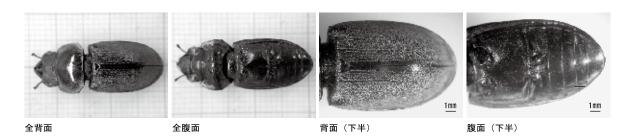


図1 溝8から出土した昆虫遺体

幅広く、後方はやや直線的、表面中央部点刻は小さく粗である。

上翅のほぼ円形の点刻からなる縦条があるが、上翅縫合線部は点刻小さく、光沢がある。条刻は 4条数えられるが外方に明瞭ではなく、点刻は緻密となる。

頭部腹面は小腮枝1対を残し、脚はすべて基部を残し欠失する。

(3) コクワガタ生息の自然環境

遺物としてのコクワガタの生息環境は、現今の京都御苑、糺の森、半木の森、河畔林、里山周辺 などと類似した環境であったと推測される。

一方で、コクワガタ遺体の出土した平安時代前期の西堀川小路西側溝(溝8)内の埋土の花粉・ 大型植物遺体の分析からは、溝の周辺地域には開けた明るい場所に生育する「人里植物」が多数を 占めていることが指摘されている(付章1)。

したがって、本コクワガタ遺体は当地周辺で生息していたのではなく、やや離れた森・林・里山 などに生息していたものが飛来したものと考えられる。

付表1 杭観察表

杭 列 No.	杭No.	樹種	木取り法	直径/ 一辺 (cm)	残存長 (cm)	残存 先付	先付長 (cm)	面取り 有無	手斧痕 有無	特 徴
a	杭184	コウヤマキ	割り材	9.5	80	有	12	有	有	六角形に面取り。先付先端少々潰れる。手斧痕 非常に明瞭。遺存状態が良い。
	杭183	ヒノキ	芯持丸太材	8.0	62	不明瞭	_	一部有	不明	一部外皮が残る。節多く曲る材を一部面取りし て直している。
	杭181	コウヤマキ	割り材 二方柾	11.0	46	有	13	有	有	面取り明瞭。手斧痕明瞭。
	杭182	ヒノキ	芯持丸太材	7.0	30	有	12	不明	不明	一部分水流により抉られている。腐食が激しい。
	杭180	ヒノキ	芯持丸太材	10.0	49	有	14	不明	不明	裏面は20cmの長さまで手斧で切り落としている。
	杭179	ヒノキ	芯持丸太材	6~8.0	27	有	未測定	不明	不明	腐食が激しい。
	杭107	ヒノキ	不明	極小片	極小片	不明	_	不明	不明	極小片のため詳細不明。
	杭102	ヒノキ	芯持丸太材 小片	2.5	11	有	11	不明	不明	先付のみ残存。
	杭106	ヒノキ	芯持丸太材 小片	4.0	12.5	有	12.5	不明	不明	先付のみ残存。
	杭103	ヒノキ	芯持丸太材	11.0	29	有	未測定	有	不明	
	杭35	カヤ	不明	1.5	9.5	不明	_	不明	不明	極小片のため詳細不明。
	杭34	ヒノキ	芯持丸太材	7.0	14	有	14	有	不明	先付明瞭、4面から切り落とす。
	杭24	カヤ	不明	2.5~3.0	22	不明	_	不明	不明	磨滅が激しく詳細不明。
	杭25	ヒノキ	芯持丸太材	5.5	21.5	有	未測定	有	不明	
	杭208	ヒノキ	芯持丸太材	8~10.0	40	欠損	_	有	不明	
b	杭189	ヒノキ	芯持丸太材	10.0	84	有	30	一部有	不明	裏面は皮をはぐのみ。
	杭188	ヒノキ	芯持丸太材	10.0	67	不明瞭	_	有	有	
	杭187	ヒノキ	芯持丸太材	8.0	72	有	20	無	無	外皮付で枝払いのみ。節が多い。
	杭186	ヒノキ	芯持丸太材	10.0	68	有	24	有	有	先付先端を鋭く尖らせる。
	杭177	ヒノキ	不明	4.5	9	不明	_	不明	不明	極小片のため詳細不明。
	杭176	ヒノキ	芯持丸太材	6.0	63	有	未測定	不明	不明	節がある。外皮が残る。
	杭31	ヒノキ	芯持丸太材	7.0	60	不明瞭	_	不明	不明	全体に磨滅が激しい。
	杭32	ヒノキ	芯持丸太材	9.0	55	不明瞭	_	有	不明	全体に磨滅。先付の先は杭打ちのため凹む。
	杭21	ヒノキ	芯持丸太材	9.5	62	有	26	有	不明	乾燥による割れ。
	杭22	ヒノキ	芯持丸太材	8.0	61	不明瞭	_	不明	不明	腐食激しい。
	杭23	カヤ	芯持丸太材	10.0	72	有	28	不明	不明	
С	杭178	ヒノキ	芯持丸太材	9.0	100	有	25	有	有	2~3cm巾で面取ラインも良く残る。先付の手斧痕非常に明瞭。
	杭175	ヒノキ	芯持丸太材	8.0	70	有	24	有	有	外皮が残る。手斧痕明瞭。
	杭174	ヒノキ	芯持丸太材	11.0	120	有	28	有	有	1.5~2cm巾で非常に丁寧な面取ラインが良く残る。先付の手斧痕明瞭。遺存状態が良い。
	杭173	コウヤマキ	芯持丸太材	8.0	92	有	20	一部有	有	一部に外皮が残る。節が多い。 先付の手斧痕非常に明瞭。
	杭172	ヒノキ	芯持丸太材	9.0	113	有	28	有	有	手斧痕非常に明瞭。遺存状態が良い。
	杭171	ヒノキ	芯持丸太材	9.0	100	有	30	一部有	有	一部に外皮が残る。先付の手斧痕非常に明瞭 で先端尖る。遺存状態が良い。
	杭170	ヒノキ	芯持丸太材	12.0	92	有	33	一部有	有	手斧痕非常に明瞭。
	杭29	ヒノキ	芯持丸太材	10.0	70	有	23~26	有	有	
	杭30	ヒノキ	芯持丸太材	11.0	76	有	26	一部有	有	裏面は枝払いのみで面取りせず。外皮のみ剥いでいる。

杭 列 No.	杭No.	樹種	木取り法	直径/ 一辺 (cm)	残存長 (cm)	残存 先付	先付長 (cm)	面取り 有無	手斧痕 有無	特徵
С	杭94	ヒノキ	芯持丸太材 小片	3.5	18	有	18	有	不明	先付のみ残存。先端やや潰れる。
	杭85	ヒノキ	芯持丸太材	8.5	68	有	未測定	有	有	丁寧な面取りを施す。
	杭26	ヒノキ	芯持丸太材	12.0	89	有	35	有	有	丁寧な面取りを施す。
	杭86	ヒノキ	芯持丸太材	11.5	72	有	未測定	有	不明	先付先端潰れる。
	杭87	ヒノキ	芯持丸太材	10.5	94	有	未測定	有	不明	
	杭27	ヒノキ	芯持丸太材	9~10.0	114	有	26	有	有	手斧痕明瞭。
	杭28	ヒノキ	芯持丸太材	12.0	86	有	34	有	有	芯は端に寄る。
	杭209	ヒノキ	芯持丸太材	7.5	31	有	未測定	有	不明	腐食激しい。
е	杭210	ヒノキ	芯持丸太材	6~11.0	43	有	10.5	有	不明	
f	杭39	サクラ属	芯持丸太材	9.5	27	有	未測定	無	不明	腐食激しい。
	杭41	モミ属	芯持丸太材	5.5	18	有	未測定	無	不明	打ち込んだ際にササクレ立つ。
	杭45	モミ属	芯持丸太材	5.0	21	有	未測定	無	無	外皮が残る。先付の先端潰れる。
	杭47	モミ属	芯持丸太材	4.5	16	有	16	不明	不明	先付のみ残存。石にあたり先端潰れる。芯は端に寄る。
	杭49	モミ属	芯持丸太材	6.0	31	有	未測定	不明	不明	先付先端潰れる。外皮部分的に残る。 芯は端に 寄る。
	杭50	モミ属	芯持丸太材	8.0	29	有	未測定	不明	不明	先付先端やや潰れる。
	杭51	モミ属	芯持丸太材	6.5	19	有	未測定	不明	不明	磨滅・腐食激しい。先付の先端潰れる。
g	杭40	サクラ属	芯持丸太材	7.0	21	有	未測定	無	不明	
	杭43	サクラ属	芯持丸太材	4.0	7	有	7	不明	不明	先付のみ残存。
	杭44	サクラ属	芯持丸太材	6.5	19	有	19	不明	不明	先付のみ残存。
	杭46	サクラ属	芯持丸太材	7.5	16	有	16	不明	不明	先付のみ残存。
	杭48	モミ属	芯持丸太材	8.5	18	有	18	不明	不明	先付のみ残存。先付先端大きく潰れる
h	杭168	ヒノキ	割材 ミカン割1/4	3~8.0	53	不明瞭	_	不明	不明	割れが激しい。
	杭167	ヒノキ	割材 ミカン割1/4	4~7.0	56	有	15	不明	不明	先付は割れているため不明瞭。 外皮が残る。
	杭166	ヒノキ	割材 ミカン割1/4	5~8.0	69	有	14	不明	不明	
	杭165	ヒノキ	割材 ミカン割1/2	5~6.0	69	有	12	不明	不明	先付の途中抉れあり。
i	杭207	モミ属	割材 ミカン割1/4	7.0	122	有	13	不明	不明	四角柱であるが中間は水流により抉られている。 断面三角形。
	杭206	モミ属	割材 二方柾	5~10.0	120	有	15	不明	不明	四角柱であるが中間は水流により抉られている。 全体に扁平。
	杭191	モミ属	割材 二方柾	10.0	96	不明瞭	_	不明	不明	断面三角形。
	杭203	モミ属	割材 ミカン割1/4	11.0	17	不明	不明	不明	不明	極小片のため詳細不明。
	杭202	モミ属	割材 ミカン割1/4	8.0	27	不明	不明	一部有	不明	磨滅が激しく詳細不明。下端は抉れ激しい。 かろうじて芯が残る。
	杭201	モミ属	割材 二方柾	8.0	43	不明	不明	一部有	不明	磨滅が激しく詳細不明。一辺は皮を一枚剥いた だけ。一部 外皮が残る。
	杭200	モミ属	割材 ミカン割1/6	6~7.0	37	欠損	_	無	無	一部外皮が残る。
	杭199	モミ属	割材 二方柾	3~6.0	35	欠損		不明	不明	磨滅および欠損のため詳細不明。
	杭198	モミ属	割材 二方柾	8.0	37	無	_	不明	不明	磨滅激しく詳細不明。抉られている部分がある。

杭 列 No.	杭No.	樹種	木取り法	直径/ 一辺 (cm)	残存長 (cm)	残存 先付	先付長 (cm)	面取り 有無	手斧痕 有無	特 徵
i	杭197	モミ属	割材 辺材	4~12.0	133	有	20	不明	不明	四角柱であるが中間40cmは水流により抉られている。
	杭196	モミ属	割材 二方柾	5.0	113	無	_	不明	不明	上半部は角が残っているが、下半部は磨滅激 しく詳細不明。
	杭205	モミ属	割材 二方柾	4~6.0	90	有	14	不明	不明	四角柱であるが中間は水流により抉られている。 先付先端潰れる。
j	杭195	モミ属	割材 二方柾	7.0	50	不明	_	不明	不明	磨滅激しく詳細不明。断面半円形。
	杭194	モミ属	割材 二方柾	7.0	89	不明瞭	_	不明	不明	磨滅激しく詳細不明。四角柱。
	杭193	モミ属	割材 四方柾	8.0	63	欠損	_	不明	不明	極小片のため詳細不明。
	杭192	モミ属	割材 二方柾	11.0	74	不明瞭	_	不明	不明	磨滅激しく詳細不明。全体に扁平。
	杭108	モミ属	割材 二方柾	5.5~7.5	90	不明瞭	_	無	不明	
	杭109	モミ属	割材 二方柾	7~8.0	92	有	15	無	不明	
	杭110	モミ属	割材 ミカン割1/4	5~7.0	86	有	24	無	不明	先付が平坦になっている。
	杭111	モミ属	割材 二方柾	8~10.0	116	有	12	無	不明	下から約40~22cmまでの間、水流により抉られている。
	杭112	モミ属	割材 二方柾	5~10.0	86	不明瞭	_	無	不明	先付先端は平坦。
	杭113	モミ属	割材 二方柾	6~11.0	73	不明瞭	_	無	不明	一部外皮が残る。
	杭114	モミ属	割材 四方柾	3~9.0	60	不明瞭	_	無	不明	一部外皮が残る。先付が水流により抉られている。上方は腐食が激しい。
	杭115	モミ属	割材 二方柾	6~9.0	84	有	30	無	不明	先付上方は水流により抉られている。
なし	杭190	ヒノキ	芯持丸太材	45.0	30	不明瞭	_	不明	不明	磨滅激しく詳細不明。
	杭185	ヒノキ	芯持丸太材	7.0	48	不明	不明	不明	不明	磨滅激しく詳細不明。節のところだけ残る

付表2 土器観察表

番号	器 種	器形	遺構	口径	器高	底径	備考
1	土師器	椀	溝1上層	12.5	3.1	_	
2	土師器	杯	溝1上層	16.0	3.4	_	
3	土師器	杯	溝1上層	18.0	3.9	_	
4	土師器	Ш	溝1上層	20.2	3.0	_	
5	土師器	甕	溝1上層	14.0	(4.7)	_	外面には煤が付着する。
6	須恵器	Ш	溝1上層	13.5	2.8	6.4	底部は調整せず、糸切り痕が残る。
7	須恵器	杯B	溝1上層	13.0	4.4	7.8	
8	須恵器	蓋	溝1上層	14.0	(2.3)	_	内面には全面に墨痕が付着。硯に転用。
9	須恵器	甕	溝1上層	16.0	(3.5)	_	
10	須恵器	平瓶	溝1上層	_	_	_	胎土は灰白色でよく焼き締まる。
11	須恵器	鉢F	溝1上層	_	(4.9)	10.4	捏鉢の底部。底部外面には、多数の孔がある。
12	須恵器	壷	溝1上層	13.0	(6.9)	_	直径5mmの孔が開けられた把手を貼り付ける。
13	須恵器	壷	溝1上層	3.5~3.9	9.8	3.7~4.0	瓶子。焼成時に焼き歪む。
14	緑釉陶器	Ш	溝1上層	14.5	2.8	7.4	細い輪状に高台を削り出す。京都洛西産。
15	緑釉陶器	椀	溝1上層	13.0	4.1	6.4	京都産。
16	緑釉陶器	椀	溝1上層	_	(2.1)	9.8	高台内に「×」印のヘラ記号がある。京都産。
17	緑釉陶器	耳皿	溝1上層	_	3.7	5.3	外面底部に糸切り痕を残す。焼成良好で硬質。京都産。
18	緑釉陶器	壷	溝1上層	_	(7.8)	11.4	壷の底部。胎土は粗く、焼成は不良。京都産。
19	灰釉陶器	Ш	溝1上層	_	(1.4)	7.0	猿投産。
20	灰釉陶器		溝1上層	15.0	2.5	7.8	高台内に墨痕と見えるものがある。猿投産。
21	灰釉陶器	Ш	溝1上層	16.0	2.6	8.6	猿投産。
22	灰釉陶器	把手付き瓶	溝1上層	_	(10.5)	6.0	猿投産。
23	土師器	甕	溝1下層	21.8	(5.5)	_	体部はオサエの上に粗いタタキ。
24	土師器	甕	溝1下層	26.2	(5.5)	_	体部外面は凹凸の強い縦方向の粗いいケメ。
25	土師器	甕	溝1下層	26.4	(18.0)	_	外面に煤が薄く付着。
26	須恵器	Ш	溝1下層	13.5	2.5	6.2	緑釉形の須恵器。硯に転用。
27	須恵器	杯	溝1下層	13.0	3.3	8.5	
28	須恵器	杯B	溝1下層	13.0	4.8	7.0	貼付け輪高台。
29	須恵器	杯B	溝1下層	_	(1.5)	7.0	貼付け輪高台。
30	須恵器	杯B	溝1下層	18.0	6.0	13.0	貼付け輪高台。
31	須恵器	鉢	溝1下層	19.0	(5.0)	-	外面は凹凸が顕著。
32	須恵器	椀	溝1下層	18.0	6.0	8.5	高台内に「□(背ヵ)」の墨書がある。
33	須恵器	甕	溝1下層	17.0	(6.2)	_	
34	須恵器	壷	溝1下層	4.4	12.1	4.7	瓶子。底部は糸切り未調整。
35	緑釉陶器	Ш	溝1下層	14.1	3.2	6.5	高台中央に突起を残す。京都産。
36	緑釉陶器	椀	溝1下層	13.6	4.3	6.9	削り出しの輪高台。京都産。
37	緑釉陶器	椀	溝1下層	16.8	(5.0)	_	焼成良好。猿投産。
38	緑釉陶器	椀	溝1下層	17.0	4.5	7.8	高台は底外面を削り込む。京都産。
39	緑釉陶器	椀	溝1下層	17.4	5.4	7.8	削り出しの蛇の目高台。京都産。
40	緑釉陶器	椀	溝1下層	_	(2.7)	9.0	底部内面に陰刻花文。高台内にメアト。猿投産。
41	緑釉陶器	把手付き瓶	溝1下層	_	_	_	把手接合痕跡あり。猿投産。
42	灰釉陶器	Ш	溝1下層	14.3	2.9	6.5	猿投産。
43	灰釉陶器	Ш	溝1下層	14.4	2.3	6.9	底部内面には重ね焼きの痕跡。猿投産。
44	灰釉陶器	Ш	溝1下層	15.7	2.9	8.2	猿投産。
45	灰釉陶器		溝1下層	_	(1.4)	7.0	底部には「×」状に線刻したヘラ記号。猿投産。
46	灰釉陶器	Ш.	溝1下層	17.2	(2.0)	_	段皿。ハケ塗り施釉。猿投産。
47	灰釉陶器	Ш	溝1下層	_	(2.9)	8.7	段皿。底部内面に重ね焼きの痕跡がある。猿投産。

番号	器種	器形	遺 構	口径	器高	底径	備考
48	灰釉陶器	Ш	溝1下層	_	(2.6)	7.5	段皿。高台内に「□(得ヵ嶋ヵ)」の墨書がある。猿投産。
49	灰釉陶器	椀	溝1下層	14.6	4.4	7.3	猿投産。
50	灰釉陶器	椀	溝1下層	_	(3.5)	7.2	底部内面には重ね焼きの痕跡。猿投産。
51	灰釉陶器	椀	溝1下層	_	(1.2)	6.2	高台内に墨痕がある。猿投産。
52	灰釉陶器	椀	溝1下層	_	(1.7)	8.1	高台内に墨痕があるが、欠損部が多く解読不能。猿投産。
53	灰釉陶器	椀	溝1下層	_	(2.2)	7.3	内面底部は平滑。高台内に「□(珍ヵ)」の墨書がある。猿投産。
54	灰釉陶器	耳皿	溝1下層	_	(1.4)	4.8	底部は糸切り未調整。猿投産。
55	灰釉陶器	脚部	溝1下層	_	(3.6)	_	火舎か四脚壷の脚部。六角形にケズリ。猿投産。
56	灰釉陶器	壷蓋	溝1下層	13.0	2.8	_	口縁部はほぼ直角に折れ曲がる。猿投産。
57	灰釉陶器	壷	溝1下層	_	(3.7)	6.8	瓶子。底部は糸切り未調整。猿投産。
58	灰釉陶器	把手付き瓶	溝1下層	-	(6.5)	12.9	底部に指頭圧痕。猿投産。
59	灰釉陶器	把手付き瓶	溝1下層	-	(8.3)	10.6	底部に「T」状に線刻したヘラ記号。猿投産。
60	輸入青磁	椀	溝1下層	13.0	(3.9)	_	越州窯青磁椀。
61	土師器	Ш	溝8下層	13.7	1.8	_	図18に出土地点あり。
62	土師器	Ш	溝8下層	13.8	1.6	_	図18に出土地点あり。内外面に赤色顔料が塗布される。
63	土師器	Ш	溝8下層	15.0	(1.2)	_	
64	土師器	Ш	溝8下層	15.0	2.0	_	
65	土師器	Ш	溝8下層	15.4	2.0	_	図18に出土地点あり。
66	土師器	Ш	溝8下層	16.0	2.3	_	指頭圧痕あり。摂津産か。
67	土師器	Ш	溝8下層	16.0	(1.7)	_	摂津産か。
68	土師器	杯	溝8下層	13.5	2.8	_	指頭圧痕あり。図18に出土地点あり。
69	土師器	杯	溝8下層	13.5	2.9	_	
70	土師器	杯	溝8下層	13.6	3.3	_	内面に墨痕、外面に油煙が付着。
71	土師器	杯	溝8下層	15.0	2.5	_	口縁部外面はヘラケズリの後強くヨコナデ調整。
72	土師器	杯	溝8下層	15.0	3.7	_	内外面に油煙が付着する。
73	土師器	杯	溝8下層	15.0	3.6	_	内面に黒漆が厚く付着する。
74	土師器	杯	溝8下層	15.1	(3.1)	_	
75	土師器	杯	溝8下層	16.1	2.7	_	外面に指頭圧痕がある。
76	土師器	杯	溝8下層	16.9	2.9	_	外面に指頭圧痕がある。
77	土師器	杯B	溝8下層	17.9	4.4	9.0	口縁部外面は強いナデが凹線状に巡る。
78	土師器	杯B	溝8下層	18.0	4.0	9.4	
79	土師器	杯	溝8下層	19.0	3.5	_	
80	土師器	高杯	溝8下層	=	(18.3)	_	脚部。図18に出土地点あり。
81	土師器	高杯	溝8下層	_	(13.0)	15.2	脚部に「□(佛ヵ)□(共ヵ)」、裾部裏面に「本」の墨書がある。
82	土師器	甕	溝8下層	18.0	(2.8)	_	
83	土師器	甕	溝8下層	24.0	(11.3)	_	内外面の一部に煤が付着する。河内産か。
84	土師器	甕	溝8下層	24.0	(9.5)	_	内面は褐色に変色、外面には煤が付着する。
85	土師器	甕	溝8下層	26.4	(5.5)	_	外面には煤が付着する。
86	土師器	甕	溝8下層	26.0	(14.8)	_	内外面の一部に煤が付着する。
87	土師器	甕	溝8下層	27.0	(6.3)	_	口縁端部は面取りを施し角ばる。
88	須恵器	杯蓋	溝8下層		(1.7)	5.0	杯蓋を硯に転用。
89	須恵器	<u> </u>	溝8下層	14.5	2.4	7.4	灰釉陶器の形態を真似た須恵器。胎土は暗灰色。東海産。
90	須恵器	杯	溝8下層	12.6	3.9	(8.4)	灰白色を呈し、焼成はやや不良。
91	須恵器	杯B	溝8下層	12.5	4.7	7.8	胎土は密で灰色を呈し、焼成は良好である。
92	須恵器	杯	溝8下層	14.5	3.6		胎土は密で焼成は良好である。
93	須恵器	杯	溝8下層	_	(2.5)	_	底部外面に墨書があるが、欠損のため解読不能。
94	須恵器	椀	溝8下層	15.4	4.7	7.7	高台内に「子□(御ヵ)所」の墨書がある。
95	須恵器	壷	溝8下層		(10.2)	4.2	瓶子。

番号	器種	器 形	遺構	口径	器高	底径	備考
96	須恵器	壷	溝8下層	4.5	(8.4)		瓶子。
97	須恵器	壷	溝8下層	3.9	9.6	4.0	瓶子。図18に出土地点あり。
98	須恵器	壷	溝8下層	_	(11.1)	5.1	瓶子。焼成はやや不良、灰色を呈する。
99	須恵器	壷	溝8下層	4.5	12.9	5.2	新子。 一瓶子。 凹凸がやや顕著。
100	須恵器	壷	溝8下層	5.9	16.6	5.7	瓶子。胎土は密で焼成は良好である。
101	須恵器	壷G	溝8下層	6.4	16.9	4.1	底部は糸切り未調整。歪む。
102	須恵器	童E	溝8下層	10.5	7.7	6.2	焼成良好。
103	須恵器	<u></u> 鉢B	溝8下層	_	(12.0)	11.2	体部外面に「□□(計力)所」の墨書がある。
104	緑釉陶器	ш.	溝8下層	14.0	2.6	7.2	京都産。
105	緑釉陶器		溝8下層	3.2	3.2	5.8	京都幡枝産。
106	緑釉陶器		溝8下層	12.0	4.8	7.0	猿投産。
107	緑釉陶器	椀	溝8下層		(1.9)	7.2	高台内に「西」と読める線刻文字がある。京都産。
108	緑釉陶器	椀	溝8下層		(1.3)	5.0	高台にへラ記号あり。京都産。
109	緑釉陶器	椀	溝8下層	16.0	4.8	8.3	京都産。
110	緑釉陶器	椀	溝8下層	16.3	6.0	7.5	京都幡枝産。
111	灰釉陶器	<u> </u>	溝8下層	-	(1.8)	8.2	高台内に「南□」の墨書がある。猿投産。
112	灰釉陶器		溝8下層	14.0	2.4	6.4	高台内に墨痕と見えるものがある。猿投産。
113	灰釉陶器	三足皿	溝8下層	11.0	(2.1)	0.1	脚部。猿投産。
113	灰釉陶器		溝8下層	3.0	(3.6)	_	図18に出土地点あり。ミニチュア灰釉壷。猿投産。
115	黒色土器A	<u></u> ШВ	溝8下層	15.5	2.1	7.6	図18に出土地点あり。口縁部は水平近くまで傾斜する。
116	黒色土器A	∭В	溝8下層	14.5	2.5	5.4	口縁部は水平近くまで傾斜する。
	土師器				2.6	0.4	
117			溝8上層	13.2		2.6	胎土は橙色、焼成は良好。
118	須恵器	並	溝8上層	4.6	9.5	3.6	瓶子。体部数箇所に墨痕あり、「(本力)」と読める。
119	緑釉陶器	椀	溝8上層	11.0	(1.7)	6.5	高台内に「×」印のヘラ記号がある。京都産。 器壁は薄く、口縁端部は外反する。Ⅲ期中。
120	土師器	#T	溝群11	11.0	1.6 2.5	(4.8)	確望は得く、口稼婦前はクト及する。Ⅲ朔中。 Ⅷ期。
	灰釉陶器	杯 	路面12上面	13.0		7 5	猿投産。Ⅲ期。
122	灰釉陶器	蓋	路面12上面 路面12下層	16.4	(2.1)	7.5	外面に厚く釉を施す。猿投産。I期。
123	緑釉陶器	 椀	氾濫堆積14	-	(1.4)	6.8	底部に陰刻花文。東濃産か。II 新。
125	灰釉陶器		氾濫堆積14		(2.4)	7.5	高台内に「□(大カ)」の墨書がある。猿投産。 Ⅱ中。
	施釉陶器	—— 椀	溝15埋土			1.0	瀬戸美濃産。天目茶椀。
126 127	施釉陶器		溝15堀下げ	11.0	(4.5)		瀬戸美濃産。
128	土師器	卸目皿皿	盛土19上層	8.0	1.3	(4.4)	概广天候性。 VI期。
	土師器		盛土19工層			(4.4)	VI JUJO
129	土師器	<u>III.</u>	盛土19下層	9.0	1.4	(4.0)	VIII,
131	土師器		盛土19下層	9.0	1.55	(5.0)	VI期。 VI期。
132	土師器	<u> </u>	盛工19工僧 盛土19掘下げ	9.0	1.0	(3.0)	VI JU
133	工門	椀	盛土19上層	12.2	(4.0)	(3.0)	V12910
134	須恵器	 	盛土19上層	32	(12.1)	_	
	輸入青白磁	合子	盛土19工僧 盛土22	5.7	2.1	5.0	合子の身。
136	土師器		益⊥22 溝18埋土	11.5	1.5	(4.0)	底部屈曲部には圏線が巡る。XII 期新。
137	工		堀17埋土	9.5	1.7	(5.0)	底部相曲部には圏標が巡る。All 別利。 暗文あり。
137	染付		堀17埋土		4.0		「「「「「「「」」」」「「「」」「「」」「「」」「「」」「「」」「「」」「「
		椀		7.0		3.7	
139	染付	- 椀	堀17埋土	7.6	4.5	3.8	小椀。
140	染付	<u> </u>	堀17埋土	11.0	2.7	6.0	近江八景が描かれる。
141	施釉陶器	蓋	堀17埋土	8.2	2.2		達磨などおもちゃの絵入り。
142	施釉陶器	蓋	堀17埋土	10.5	3.1	3.4	亀形把手付きの蓋。
143	施釉陶器	小瓶	堀17埋土	1.8	8.1	2.8	銅緑釉の小瓶。

付表3 瓦観察表

番号	種類	遺構	文様および手法の特徴	胎土	色調	焼成	備考
瓦1	軒丸瓦	溝1下層	複弁8弁蓮華文。凸形中房で蓮子は1+6。蓮弁盛り上がり子葉あり。外区には二重の圏線に囲まれた珠文帯がめぐる。 外縁は傾斜縁で線鋸歯文を配する。瓦当部側面および丸瓦部 凸面タテ方向ケズリ。裏面は布目のちナデ。	細砂を含む	2.5Y7/1 灰白色	やや 硬質	搬入瓦。 平城宮6291Ab型式
瓦2	軒丸瓦	攪乱掘形	蓮華文。凸形中房で蓮子数は不明。複弁で蓮弁は盛り上がり、 子葉あり。間弁はV字形。珠文が巡る。瓦当部裏面はナデ。 接合部にはヨコナデと叩き痕がある。	緻密	N4/1灰色	やや	角社瓦窯か。 平安前期
瓦3	軒丸瓦	盛土19	蓮華文。中房は欠損のため不明。単弁で蓮弁盛り上がり、子 葉あり、互いに接する。界線は太い。珠文が巡る。周縁は欠 損。瓦当部裏面はナデ。側面は磨滅激しく不明。その他の部 分は欠損のため不明。	砂粒を含む	N3/1 暗灰色	硬質	平安前期
瓦4	軒丸瓦	堀17	珠文付巴文。右巻き(時計回り)巴文。尾部は長く互いに接し、 界線となる。珠文が密に巡る。丸瓦部は外れている。瓦当部 側面はヨコナデ。他の部分は欠損のため不明。	精良	2.5Y 暗灰黄色	やや 硬質	鎌倉•室町(中世)
瓦5	軒丸瓦	氾濫堆積 14	巴文。左巻き(逆時計回り)三巴文。頭部は離れ、尾部は長く、 互いに接し、界線となる。巴文の中に「大」は配する。珠文 が巡る。瓦当部側面および丸瓦部凸面はタテケズリのちナデ。 瓦当部裏面ヨコナデ。接合部に弧状のナデ。瓦当部裏面は不 調整。	砂粒を含む	7.5Y5/1 灰色	硬質	鎌倉·室町(中世)
瓦6	軒平瓦	溝 8 精査中	偏行唐草文。主葉は連続して緩やかに反転し、先端は強く巻き込む。上外区には珠文、下外区と脇区には線鋸歯文を配する。段顎。顎部凸面ヨコケズリ。裏面ヨコナデ。側面タテケズリ。平瓦部凹部布目後にナデ。平瓦部裏面、瓦当部より約20cn離れたところから平行叩きがある。顎は貼付け成形。	砂粒を含む	2.5Y5/1 黄灰色	硬質	搬入瓦。 藤原宮6641C型式
瓦10	軒平瓦	氾濫堆積 14	『修』銘均整唐草文。中心飾りは対向変形C字形。中に「修」の裏文字を配し、唐草文は両側に反転する。唐草は各単位が離れ、主葉・支葉は巻き込む。外区は珠文が粗く巡る。曲線顎。瓦当部凹面ケズリのちナデ。顎部凸面ヨコケズリ。裏面ケズリのちタテナデ。側面ケズリのちナデ。	精良	7.5YR 橙色	やや硬質	池田瓦窯出土瓦 NH11と同文。 平安中期
瓦7	軒平瓦	溝8上層	唐草文。唐草は各単位が離れ、強く巻き込む支葉もある。外区は珠文が巡る。曲線顎。瓦当部凹面ケズリのちヨコナデ。 顎部凸面磨滅激しいが、ナデか?顎部裏面タタキのちタテナデ。側面タテケズリのちタテナデ。平瓦部凹面はタテナデ。幅1.5cm程度の面取りを施す。	精良	5Y6/2灰 オリーブ色	やや硬質	搬入瓦。 平城宮6664型式と 同文
瓦9	軒平瓦	氾濫堆積 14	唐草文。主葉は大きく巻き込む。支葉は各単位が離れる。珠 文が巡る。曲線顎。顎部凸面は欠損のため不明。裏面磨滅激 しいがナデ。側面ケズリ。平瓦部凹部斜めにケズリ。	精良	7.5Y5/1 灰色	やや硬質	芝本瓦窯か。 平安前期~中期
瓦8	軒平瓦	攪乱掘形	唐草文。中心飾りは上向きC字形で中に花頭形を配する。唐草単位は離れ、主葉は巻き込む。界線は2条。曲線顎。顎部凸面ヨコナデ。顎部裏面ナデ。他の部分は欠損のため不明。	精良	5Y6/1 灰色	硬質	搬入瓦。 平城宮6663型式と 同文
瓦11	軒平瓦	堀17	唐草文。唐草は各単位が離れ、巻き込みは緩やか、先端は丸くなる。段顎。瓦当部成形は巻き込み技法。顎部凸面ケズリのちヨコナデ。裏面ヨコナデ。側面はケズリ。平瓦部凹面タテナデ。瓦当部上端は面取りを施す。	精良	5Y6/2灰 オリーブ色	やや硬質	中世~近世
瓦12	平瓦	溝8下層	粘土板一枚作り。凹面側には布目痕。端部から約4cm位まではナデて、布目を擦り消す。凸面側は縄タタキ、側面はケズリ。凹面側の縁は面取り。端面(狭端面)に「里」の文字の印が押捺、一辺が1.2cmの方形の枠内に文字がある。	精良	7.5Y5/1 灰色	硬質	平安前期
瓦13	塼	井戸 6	片面ナデ、もう片面はミガキ。ミガキ面は黄橙色で平滑。残存両側面もミガいたようで平滑。端面はざらつく。断面では2層に分かれ、そこに割れが入る。2度に分けて粘土を積んだとみられる。	小礫、 砂粒を 含む	7.5YR8/3 浅黄橙色	軟質	鎮守庵瓦窯跡採集 品(未報告)に類似。 平安前期か

付表4 銭貨観察表

番号	種類	遺構	外径 (cm)	穿孔径 (cm)	重量 (g)	初鋳年・備考
銭1	神功開寶	溝8下層	2. 435	0.620	3. 292	天平神護元年(765)初鋳。
銭2	隆平永寶	溝8下層	2. 500	0. 645	2. 775	延曆15年(796)初鋳。
銭3	富寿神寳	溝8下層	2. 305	0.600	2. 716	弘仁9年(818)初鋳。
銭4	富寿神寳	溝8下層	2. 315	0.615	2. 833	弘仁9年(818)初鋳。
銭5	富寿神寳	溝8下層	2. 315	0. 560	3. 676	弘仁9年(818)初鋳。
銭6	富寿神寳	溝8下層	2, 350	0. 625	3. 004	弘仁9年(818)初鋳。孔に木棒を差し込む。
銭7	嘉祐元寳(真書)	盛士22埋土	2. 430	0. 635	2. 580	北宋、嘉祐元年(1056)初鋳。6枚癒着のうちの1番上。
銭8	聖宋元寳(真書)	盛土22埋土	2. 400	0. 630	2. 906	北宋、建中靖国元年(1101)初鋳。6枚癒着のうちの2番目。
銭9	元祐通寳(篆書)	盛土22埋土	2. 485	0. 515	5. 081	北宋、元祐元年(1086)初鋳。6枚癒着のうちの3番目。
銭10	至和元寳(真書)	盛土22埋土	2, 295	0. 580	3, 357	北宋、至和元年(1054)初鋳。6枚癒着のうちの4番目。
銭11	熈寧元寳(篆書)	盛土22埋土	2. 400	0.670	4. 185	北宋、熙寧元年(1068)初鋳。6枚癒着のうちの5番目。
銭12	元祐通寳(真書)	盛土22埋土	2. 520	0.620	3. 023	北宋、元祐元年(1086)初鋳。6枚癒着のうちの6番目。
銭13	嘉祐通寳(篆書)	盛土19埋土	2. 590	0. 685	2. 235	北宋、嘉祐元年(1056)初鋳。
銭14	寛永通寳	遺構検出中	2. 455	0. 590	2. 009	左下方を欠く。
銭15	寛永通寳	遺構検出中	2. 300	0. 685	1. 685	
銭16	寛永通寳	攪乱掘削中	2. 295	0. 695	3. 051	
銭17	寛永通寳	攪乱掘削中	2. 330	0. 620	2. 621	錆、顕著。
銭18	寛永通寳	攪乱掘削中	2. 235	0. 715	1. 082	

付表5 水晶製数珠玉観察表

番号	重さ(g)	比重	厚さ(mm)	小口径(㎜)	孔径(mm)	実測図	備考
石1	2.188	2.66	10.05	13.20	3.15	図版15-石1	大粒
石2	2.184	2.66	10.65	13.00	4.00	図版15-石2	大粒
石3	1.535	2.66	10.50	10.25	1.65	図版15-石3	通し孔ややくの字
石4	1.334	2.67	9.65	9.00	1.70		
石5	1.297	2.65	9.75	9.80	1.65		表面に傷あり
石6	1.255	2.65	9.95	9.65	1.90		
石7	1.210	2.65	9.95	9.80	1.70		導き孔大きい
石8	1.208	2.65	9.35	9.80	1.75		
石9	1.185	2.66	9.10	9.65	1.60		
石10	1.182	2.66	9.05	9.55	1.65		
石11	1.156	2.66	9.25	9.50	1.35		
石12	1.148	2.66	8.95	9.55	1.55		導き孔大きい
石13	1.146	2.66	9.45	9.35	1.80		
石14	1.114	2.66	8.80	9.60	1.65		内部に割れあり
石15	1.104	2.65	9.35	9.35	1.75		厚さと小口径が同寸
石16	1.091	2.66	8.90	9.45	1.60		
石17	1.084	2.66	8.90	9.40	1.75		導き孔大きい
石18	1.078	2.66	8.65	9.60	1.55		
石19	1.075	2.66	8.50	9.65	1.80		導き孔大きい
石20	1.067	2.66	8.55	9.65	1.70		導き孔周辺割れあり
石21	1.065	2.66	8.45	9.45	1.50		導き孔周辺割れあり
石22	1.062	2.66	8.55	9.30	1.50		
石23	1.046	2.66	8.15	9.65	1.65		一部表面が濁る
石24	1.045	2.67	9.25	9.30	1.30		
石25	1.044	2.65	8.50	9.50	1.70		
石26	1.042	2.66	8.85	9.10	1.50		
石27	1.036	2.66	9.00	9.30	1.55		導き孔横に拡がる
石28	1.034	2.66	9.00	9.20	1.55	図版15-石28	
石29	1.027	2.66	8.60	9.30	1.55		表面に傷あり
石30	1.025	2.66	9.00	9.10	1.75	図版15-石30	
石31	1.021	2.66	8.60	9.20	1.60		表面に傷あり
石32	1.018	2.65	8.40	9.35	1.55		
石33	1.014	2.65	8.45	9.25	1.45		導き孔大きい
石34	1.011	2.66	8.80	9.05	1.80	図版15-石34	通し孔くの字
石35	1.010	2.65	8.75	9.20	1.55		表面に傷あり
石36	1.008	2.67	8.65	9.10	1.60		
石37	1.005	2.65	8.50	9.10	1.85		
石38	1.001	2.65	8.05	9.25	1.65		導き孔周辺割れあり
石39	0.992	2.65	8.60	9.00	1.55	図版15-石39	通し孔くの字
石40	0.989	2.66	8.85	8.90	1.50		
石41	0.984	2.66	8.40	9.05	1.20		
石42	0.982	2.66	8.50	9.00	1.85		
石43	0.982	2.66	8.90	9.15	1.85		導き孔周辺割れあり
石44	0.981	2.66	8.60	9.20	1.60		
石45	0.975	2.65	8.35	9.15	1.85		
石46	0.966	2.66	8.65	8.85	1.50		表面に傷あり

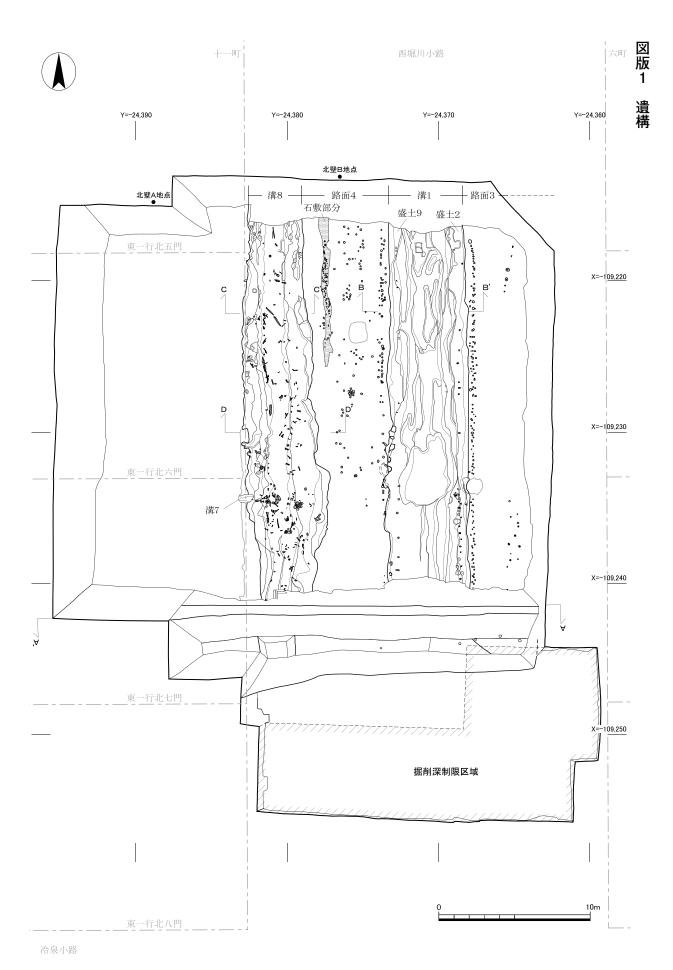
番号	重さ(g)	比重	厚さ(mm)	小口径(mm)	孔径(mm)	実測図	備考
石47	0.964	2.66	8.50	8.90	1.60		
石48	0.961	2.65	8.75	8.70	1.35		導き孔周辺割れあり
石49	0.958	2.65	8.55	9.00	1.70		
石50	0.947	2.68	8.05	9.45	2.00	図版15-石50	紫水晶
石51	0.933	2.66	8.30	9.20	1.85		通し孔ややくの字
石52	0.928	2.67	8.55	8.80	1.75		
石53	0.914	2.66	8.10	8.70	1.65		
石54	0.911	2.65	8.15	9.00	1.50		導き孔周辺に窪みあり
石55	0.897	2.65	9.05	9.00	1.55	図版15-石55	導き孔横に拡がる
石56	0.889	2.65	8.15	8.95	1.75		導き孔周辺割れあり
石57	0.887	2.65	8.40	8.65	1.35		表面に傷あり
石58	0.865	2.66	7.70	9.05	1.35		導き孔横に拡がる
石59	0.851	2.65	8.20	8.60	1.75		
石60	0.848	2.66	7.70	8.70	1.55		
石61	0.836	2.66	8.15	8.55	1.35		導き孔横に拡がる
石62	0.835	2.66	8.40	8.55	1.50		通し孔ややくの字
石63	0.834	2.66	7.70	8.80	1.50		表面に窪みあり
石64	0.821	2.66	7.85	8.75	1.35		表面に傷あり
石65	0.813	2.65	7.20	8.75	1.70		導き孔横に拡がる
石66	0.791	2.68	7.60	8.75	2.00		表面に窪みあり
石67	0.775	2.65	7.00	8.80	1.90		
石68	0.707	2.65	6.85	8.45	1.65	図版15-石68	導き孔周辺割れあり
石69	0.684	2.65	7.25	8.35	1.65	図版15-石69	
石70	0.617	2.66	6.95	8.25	1.55	図版15-石70	やや歪んだ球形

付表6 木製品観察表

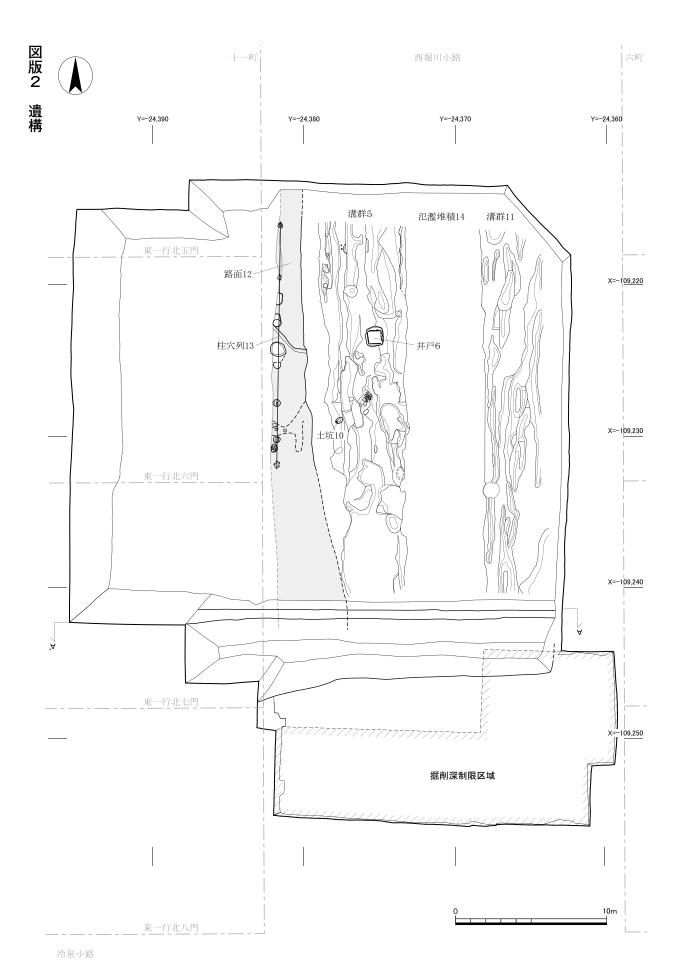
番号	種類	寸法(cm)	特徴·備考	樹種
木1	木簡	長17.65、幅2.4~3.1、厚0.4	「今日物忌」の墨書がある。	ヒノキ
木2	木簡	長11.5、幅1.9、厚0.3	「□銭十八貫百□」、「百五十□(文ヵ)」の墨書がある。	スギ
木3	斎串	長15.9、幅2.0、厚0.2	両側に切り欠きあり。	ヒノキ
木4	斎串	長12.9、幅2.3、厚0.2	両側に切り欠きあり。	ヒノキ
木5	斎串	長6.8、幅2.3、厚0.2	両側に切り欠きあり。	ヒノキ
木6	斎串	長6.9、幅2.0、厚0.1	両側に切り欠きあり。	ヒノキ
木7	斎串	長6.6、幅1.1、厚0.3	片側に切り欠きあり。	ヒノキ
木8	人形	長18.3、幅2.5、厚0.15	正面全身人形。頭部は圭頭状、両側面から切り込みを入れて両腕をあらわす。下端に深い切り欠きを入れて両足をあらわす。	ヒノキ
木9	人形	長7.0、幅1.1、厚0.15	正面全身人形。頭部は圭頭状、両側面から切り込みを入れて両腕をあらわす。下端に深い切り欠きを入れて両足をあらわす。	ヒノキ
木10	人形	長7.0、幅1.0、厚0.2	正面全身人形。頭部は圭頭状につくる。肩部、腕部、脚部は欠損のため不明。	ヒノキ
木11	人形	長14.5、幅2.05、厚0.4	正面全身人形。両側面から切り込みを入れて両腕をあらわす。下端は 欠損。	ヒノキ
木12	人形	長8.6、幅2.0、厚0.3	正面全身人形。頭部台形、両側面から切り込みを入れて両腕をあらわす。下端は欠損。	ヒノキ科
木13	人形	長6.4、幅1.6、厚0.2	正面全身人形。頭部台形、両側面から切り込みを入れて両腕をあらわす。下端は欠損。	ヒノキ
木14	板状加工品	長7.3、幅1.05、厚0.1	斎串か人形の一部とみられる。	ヒノキ
木15	板状加工品	長12.5、幅1.2、厚0.2	斎串か人形の一部とみられる。	ヒノキ
木16	板状加工品	長7.6、幅2.3、厚0.3	斎串か人形の一部とみられる。	ヒノキ科
木17	板状加工品	長8.7、幅1.4、厚0.7	鳥形か。穿孔がある。	ヒノキ
木18	付け木	長11.3、幅1.0、厚0.5	片方の先端は焦げる。	イヌガヤ
木19	付け木	長9.0、幅1.0、厚0.7	片方の先端は焦げる。	
木20	棒状加工品	長19.2、幅0.9、厚0.3	両端を斜めに切り落とし、山型につくる。完形品。籌木か。	ヒノキ
木21	棒状加工品	長16.9、幅0.5、厚0.4	面は丁寧に調整される。箸か。	ヒノキ
木22	棒状加工品	長14.8、幅0.5、厚0.5	面は丁寧に調整される。籌木か。	ヒノキ
木23	棒状加工品	長13.0、幅0.5、厚0.5	両端を斜めに切り落とし、小さな山型につくる。籌木か。	ヒノキ
木24	棒状加工品	長11.6、幅1.0、厚0.9	先端は斜めに切り落とし、反対側の先端は多方向から削り丸みをもたせる。 籌木か。	スギ
木25	篦状加工品	長17.8、幅1.45、厚0.3~0.5	先端は両角を斜めに切り落とす。面は平滑。籌木か。	ヒノキ
木26	箆状加工品	長14.0、幅1.2、厚0.1~0.5	先端は尖らせる。面は平滑。籌木か。	イヌガヤ
木27	箆状加工品	長13.4、幅1.6、厚0.4	先端は山型につくる。面は平滑。籌木か。	ヒノキ
木28	篦状加工品	長17.1、幅1.1、厚0.3	先端はなだらかな山型につくる。面取りを施し、滑らか。籌木か。	ヒノキ
木29	箆状加工品	長9.5、幅1.5、厚0.4	先端は山型に切り落とし、面は平滑に仕上げる。籌木か。	ヒノキ
木30	篦状加工品	長7.1、幅1.3、厚1.2	先端は尖らせる。面は平滑に仕上げる。籌木か。	スギ
木31	篦状加工品	長12.7、幅0.8、厚0.7	四角柱で先端を斜めに切り落とす。	イヌガヤ
木32	留針	長11.0、幅0.4、厚0.3	先を尖らせわずかに反りをつける。	イヌガヤ
木33	留針	長12.0、幅0.7、厚0.2	先を尖らせわずかに反りをつける。身部を扁平につくる。	ヒノキ
木34	留針	長7.9、幅0.5、厚0.2~0.6	先端部を斜めに切り落とす。	イヌガヤ
木35	横櫛	残長3.7、幅4.2、厚1.0	小片。13本/1cm。	イスノキ
木36	横櫛	残長2.2、幅3.6、厚0.95	小片。10本/1cm。	イスノキ
木37	横櫛	残長4.2、残幅1.4、厚0.8	小片。10本/1cm。	イスノキ
木38	木針	長21.0、幅1.8、厚0.8	針穴は刃物を開けたものとみられる。面は平滑。	イヌガヤ
木39	柄状加工品	長17.1、幅1.4、厚1.0	周縁部は丁寧に面取りを施す。	スギ

番号	種類	寸法(cm)	特徴・備考	樹種
木40	匙形木器	長18.0、身幅2.3、柄幅1.0、厚0.4	身は長楕円形、ごく浅く弧面をなし、先端を薄くつくる。	ヒノキ
木41	檜扇	長30.9、本幅3.4、末幅1.6、厚0.08~0.2	身は刀身形にかたどり、要の孔を開ける。	ヒノキ
木42	檜扇	長31.2、本幅3.5、末幅1.6、厚0.12	身は刀身形にかたどり、要の孔を開ける。	ヒノキ
木43	檜扇	残長32.8、本幅2.2、末幅1.5、厚0.3~0.4	厚みがあり、親骨とみられる。要の孔を開ける。	ヒノキ
木44	檜扇	残長8.5、幅1.6、厚0.4	両端を欠損するが、厚みがあり、親骨とみられる。	ヒノキ
木45	檜扇	残長4.9、幅2.0、厚0.3	欠損部が多いが、親骨の一部とみられる。穿孔がある。	ヒノキ
木46	檜扇	残長20.4、幅1.3~2.2、厚0.2	両端を欠損する。	スギ
木47	横槌	残長16.5、身径6.1、柄径2.9	敲打部と柄部の境界を直角にする型式。	サカキ
木48	籠	残長10.9、径8.8	六つ目編みで小型の円筒形に編む。扁平に加工したヒゴを用いる。	ヒノキ
木49	紐状加工品	残長10.5、径0.6~0.9	草鞋類の紐とみられる。	不明
木50	下駄	長22.9、幅11.2、厚4.5	完存。歯の下辺幅は台の幅よりも広くする。	スギ
木51	下駄	長22.2、幅10.7、厚6.1	完存。歯の下辺幅は台の幅よりも広くする。	ヒノキ
木52	下駄	長22.1、幅9.8、厚4.1	ほぼ完存。前鼻緒孔を台の左側に片寄せる。	センダン
木53	下駄	残長18.5、幅10.9、厚7.0	ほぼ完存。歯の下辺幅は台の幅よりも広くする。	ヒノキ
木54	下駄	残長22.0、残幅3.1、厚6.5	縦半分が残る。鼻緒孔は綺麗に開ける。	ヒノキ
木55	下駄	高6.4、上辺幅8.5、下辺幅11.4、厚4.7	歯のみ。歯の下辺幅は台の幅よりも広くする。	ヒノキ
木56	挽物	復元口径22	漆器椀。内面は朱漆、内面は黒漆を施す。	ケヤキ
木57	挽物	径17.4、高0.8	ⅢA。かなり薄手。内外面とも黒漆を施す。	ケヤキ
木58	挽物	径11.3、高3.3	蓋。宝珠つまみが付く。内外面とも黒漆を施す。	ケヤキ
木59	挽物	径20.1、高1.3	ⅢD。完存。内外面ともおびただしい刃物痕が付く。	ヒノキ
木60	挽物	径20.0、高1.5	皿D。完存。内外面とも刃物痕が付く。	ヒノキ
木61	挽物	残長19.0、残幅12.9、高1.3	皿D。内外面とも刃物痕が付くが内面が著しい。直径19.0と推定。	ヒノキ
木62	刳物	長28.2、径17.6、高8.5	把手付円形片口鉢。底部の刳り込みには曲面をもたせる。注ぎ口をつくる。	クスノキ
木63	曲物	残10.5、残幅3.75、厚0.4	やや小型の円形曲物の底か蓋。側面に目釘孔あり。径11.5と推定。	ヒノキ
木64	曲物	残12.9、残幅5.6、厚0.6	やや小型の円形曲物の底か蓋。目釘孔、綴じ孔なし。径14.0と推定。	ヒノキ
木65	曲物	長径18.3、短径16.3、高2.1、蓋板厚0.4	円形曲物蓋。側板が残存、蓋板の内側に固定される。	ヒノキ
木66	曲物	径22.0、高7.3、底板径20.5、厚0.8	釘結合円形曲物の身、タガも残存。5箇所に木釘を打ち込んで底板と 側板を固定する。内面全体に柿渋を塗布する。	ヒノキ
木67	曲物	径14.0、厚0.5	円形曲物の底か蓋。側面に目釘孔を3箇所不均等に配する。	ヒノキ
木68	曲物	径14.0、厚0.6	円形曲物の底か蓋。側面に目釘孔を4箇所に配する。	ヒノキ
木69	曲物	残長14.7、残幅8.7、厚0.8	円形曲物の底か蓋。側面に目釘孔あり。復元径14.7。	スギ
木70	曲物	残長15.6、残幅9.8、厚0.7	円形曲物の底か蓋。側面に目釘孔あり。復元径15.6。	ヒノキ
木71	曲物	径16.2、厚0.7	円形曲物の底か蓋。側面に目釘孔を4箇所均等に配する。埋め木をして目塞ぎをする。	スギ
木72	曲物	長径18.6、短径18.0、厚0.7、高5.0	側板が残る。6箇所に目釘を打ち込んで底板と側板を固定する。 内面全体に柿渋を塗布する。	ヒノキ
木73	曲物	残長25.0、残幅7.3、厚0.9	大型の曲物の底か蓋。側面に目釘孔2箇所残存。復元径38。	ヒノキ
木74	折櫃	側板残長36.5、高7.4、厚0.3~0.7 底板長36.0、残幅18.0、厚0.6	底板の内面に側板を立てる。底板の内外面に刃物痕がある。側板は破 損が著しい。	ヒノキ
木75	折櫃	側板残長28.5、高5.5、厚0.3 底板長33.7、幅24.9、厚0.6	底板の内面に側板を立てる。底板の内外面に刃物痕がある。側板は破 損が著しい。底板に穿孔がある。	ヒノキ

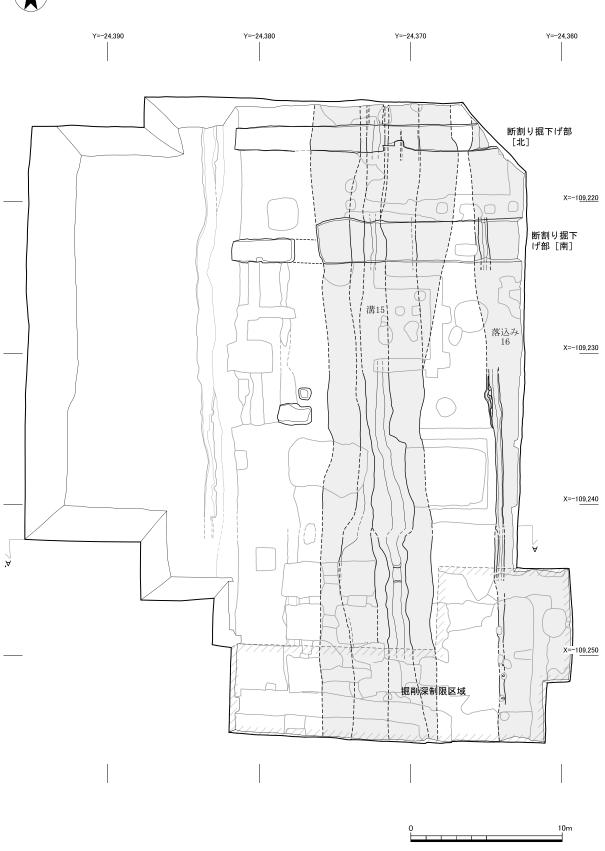
図 版



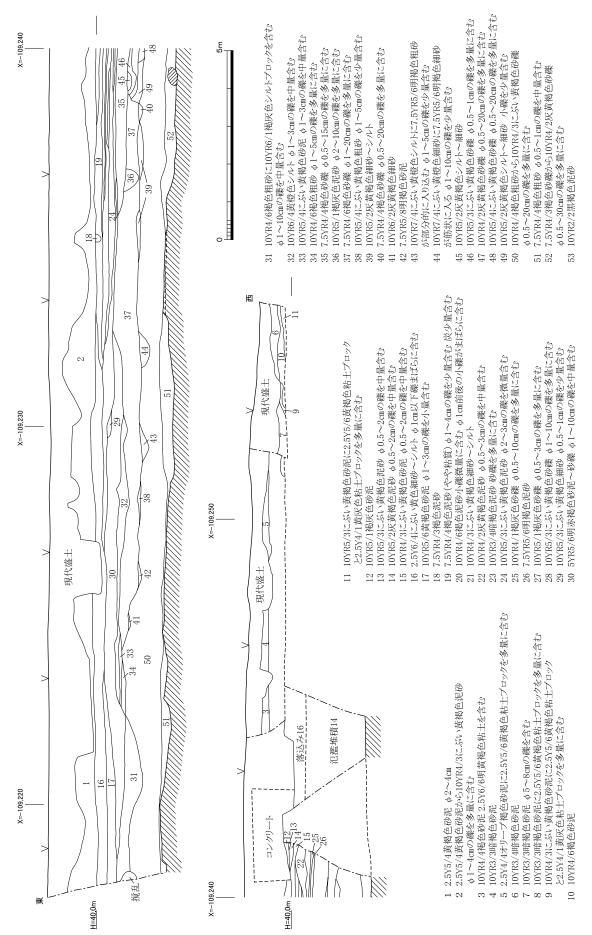
遺構平面図1 第2面 平安時代前期(1:250)



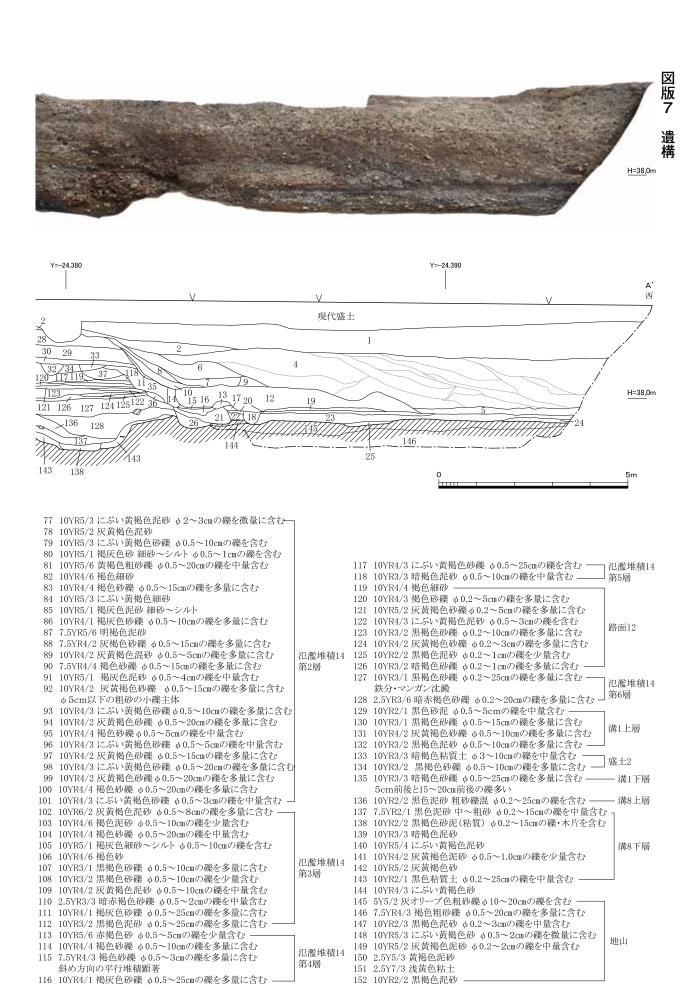
遺構平面図2 第1-3面 平安時代中期から室町時代(1:250)

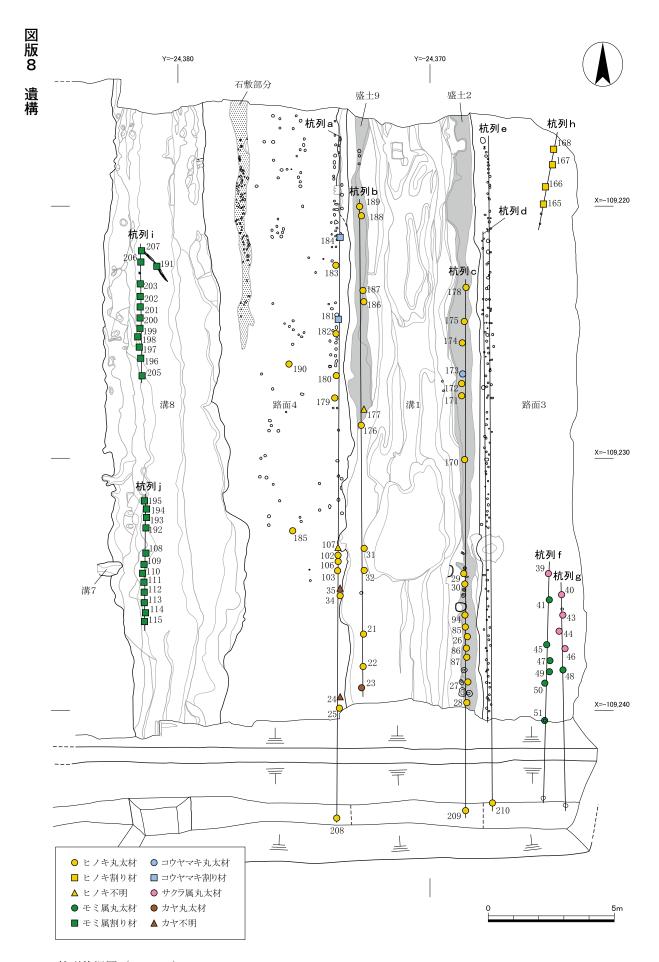


遺構平面図4 第1-1面 安土・桃山時代以降(1:250)

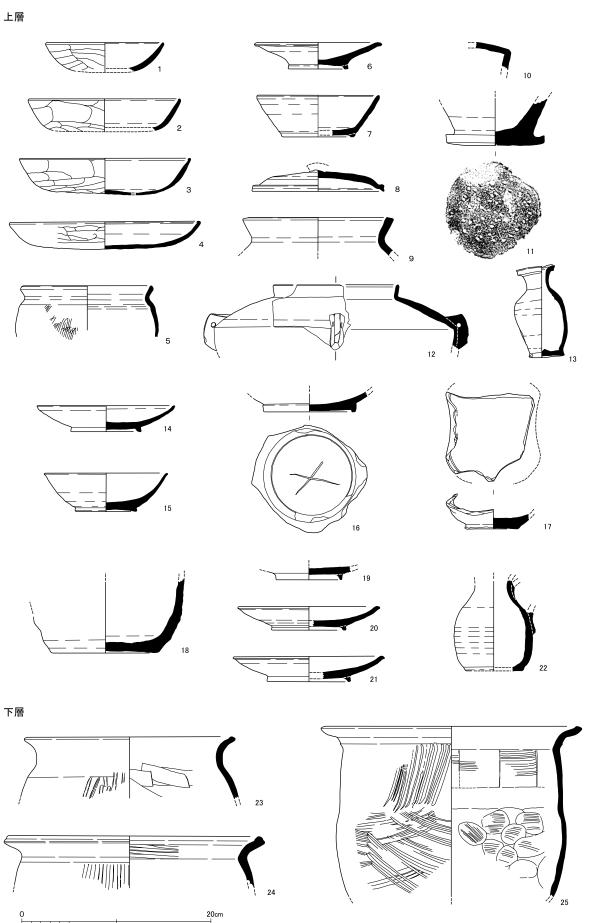


東壁断面図(1:100)

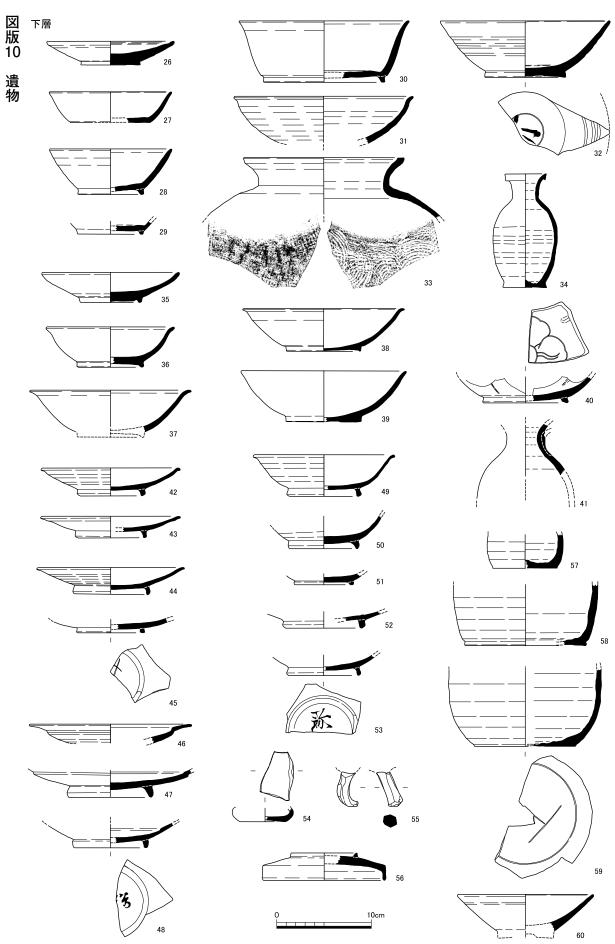




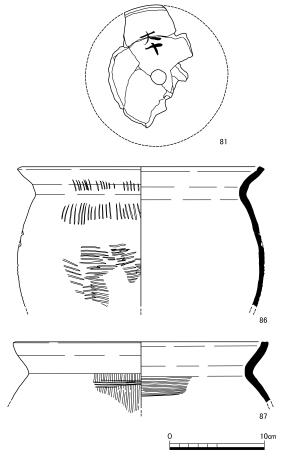
杭列状況図(1:150)

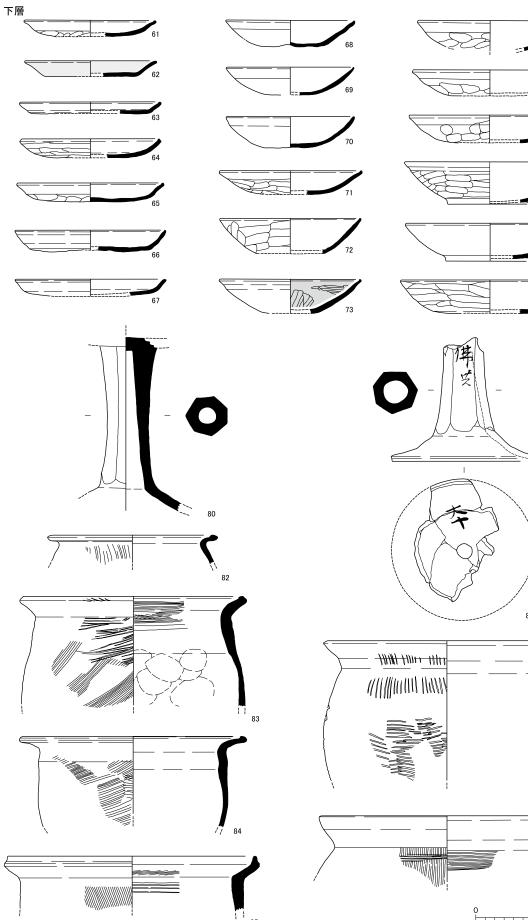


溝1出土土器実測図1 (1:4)

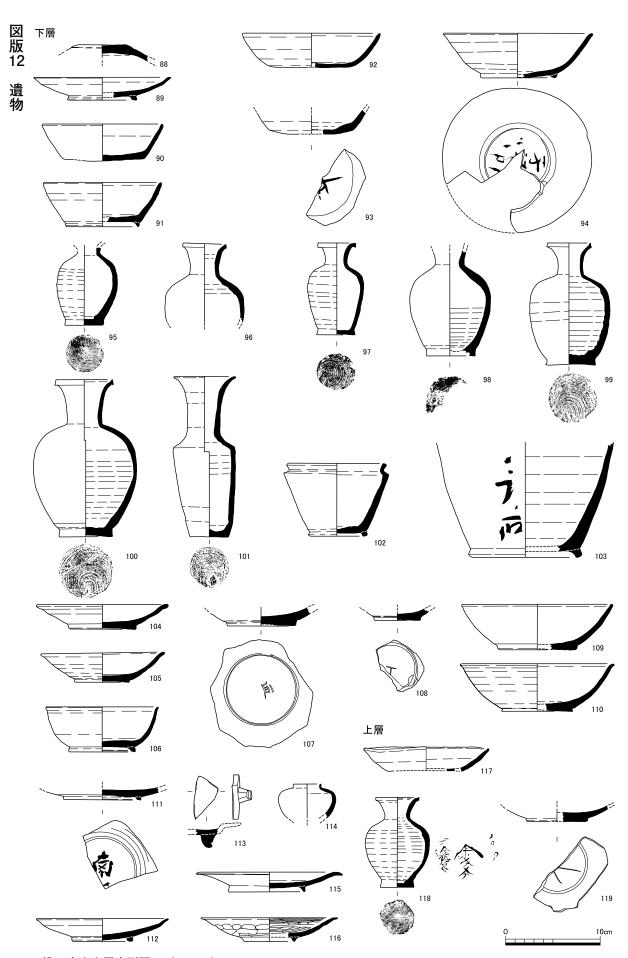


溝1出土土器実測図2(1:4)

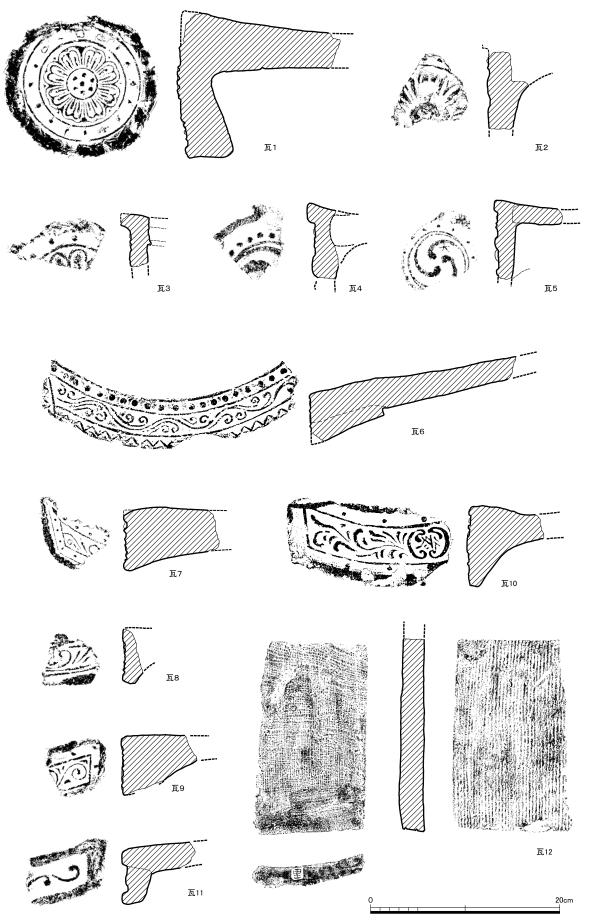




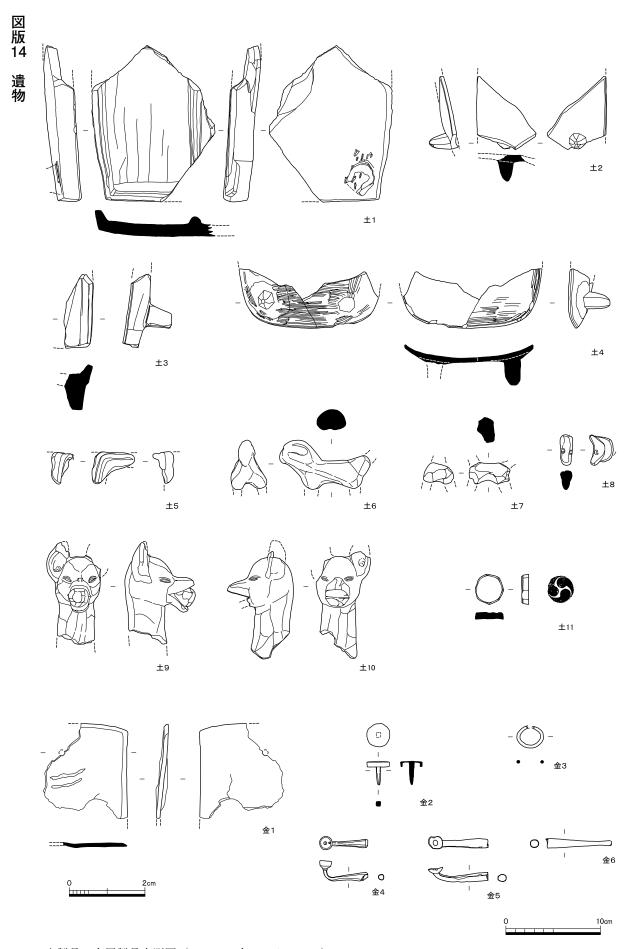
溝8出土土器実測図1(1:4)



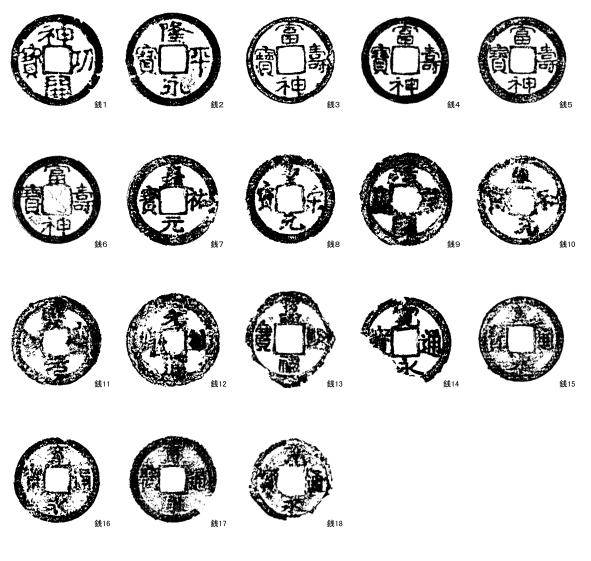
溝8出土土器実測図2(1:4)

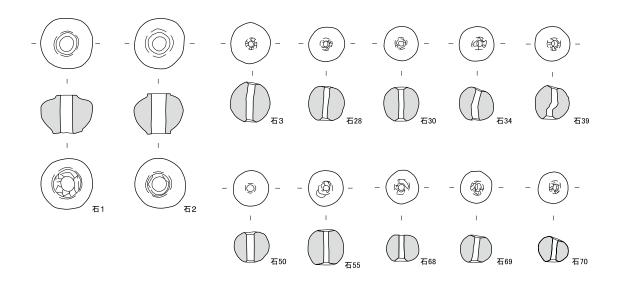


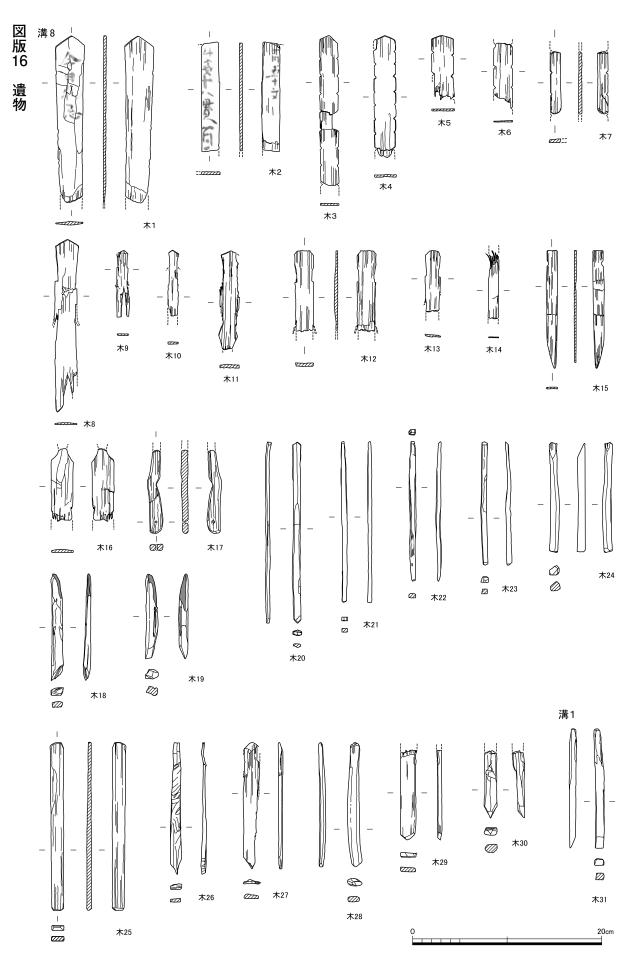
瓦拓影・実測図(1:4)



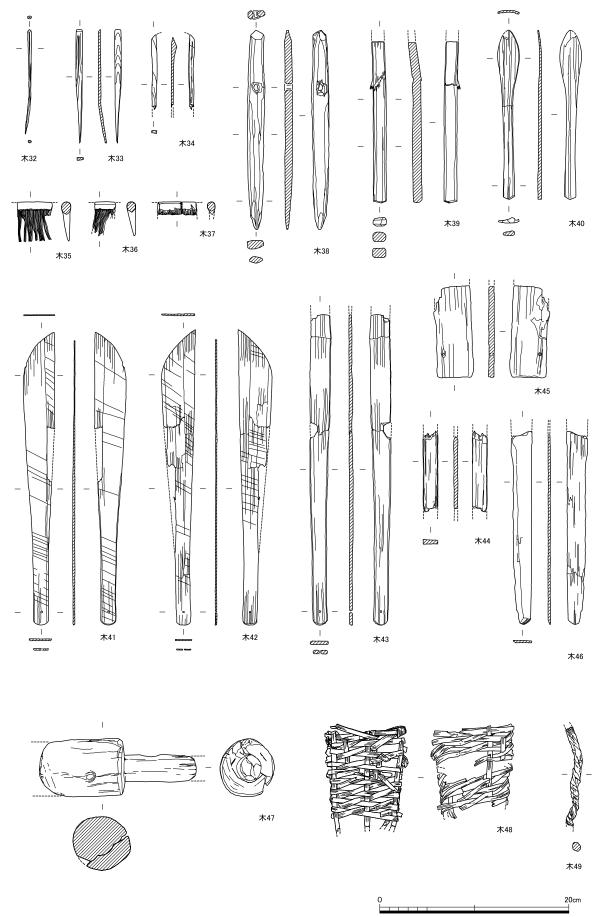
土製品・金属製品実測図(1:4、金1のみ1:1)



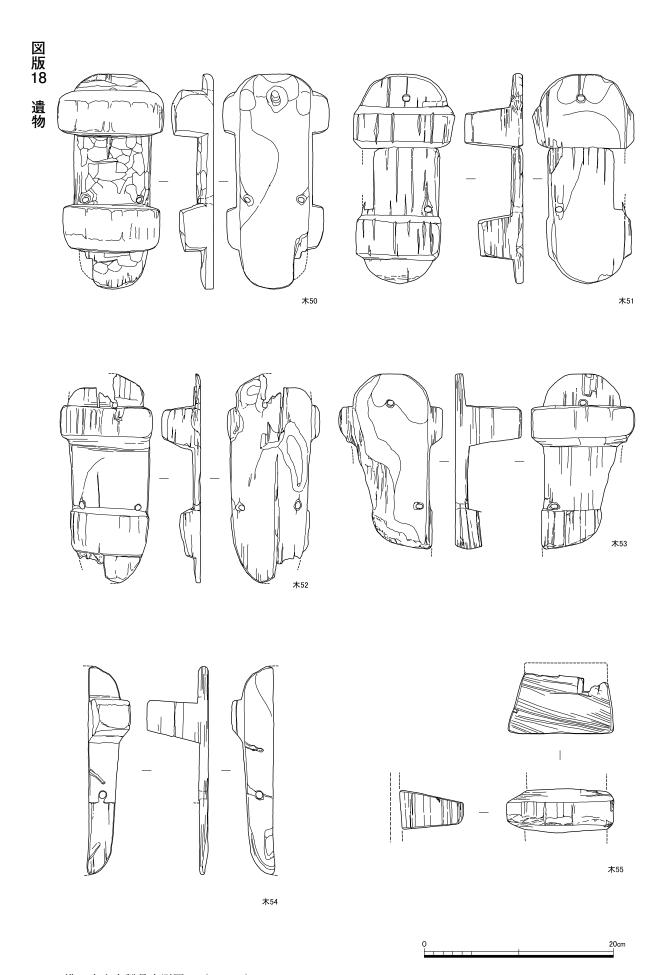




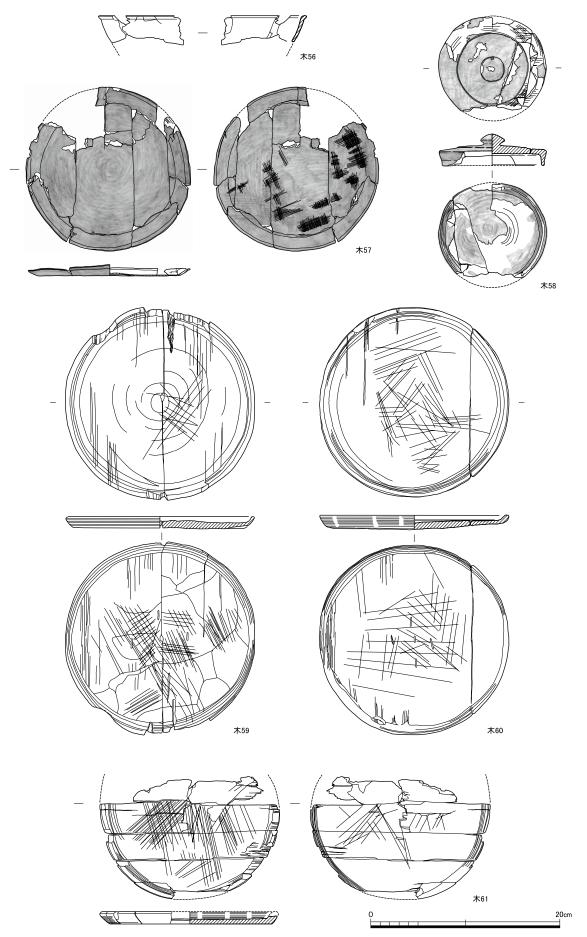
溝1出土木製品実測図、溝8出土木製品実測図1 (1:4)



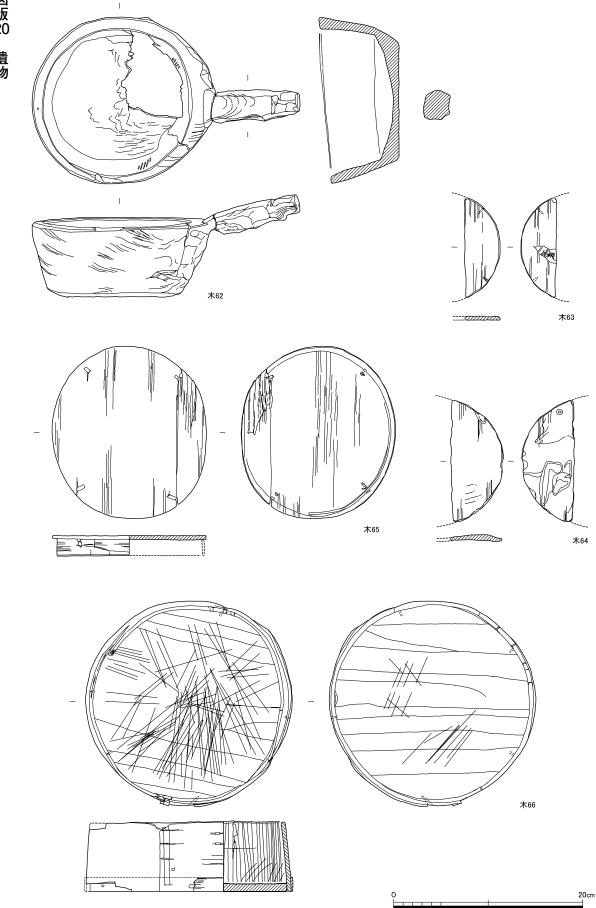
溝8出土木製品実測図2 (1:4)



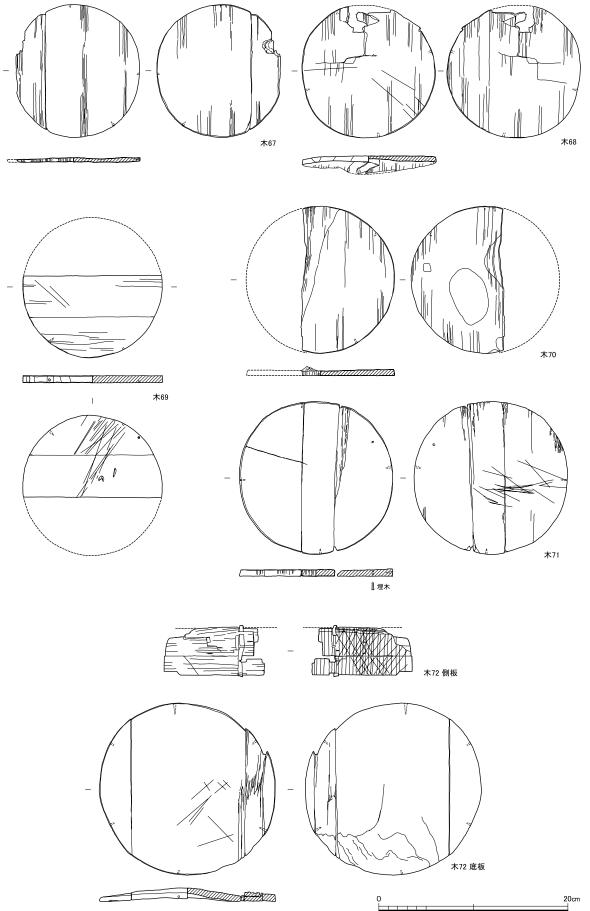
溝8出土木製品実測図3(1:4)



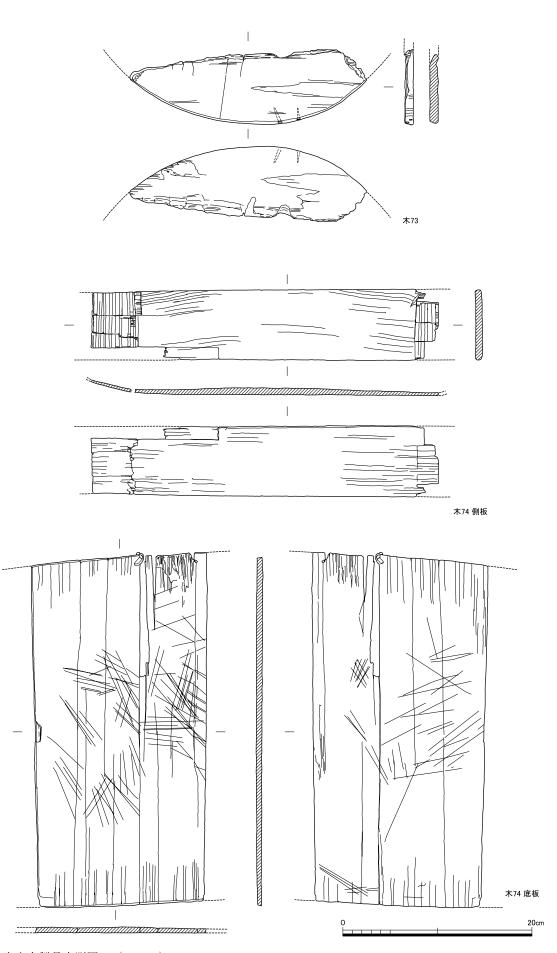
溝8出土木製品実測図4(1:4)



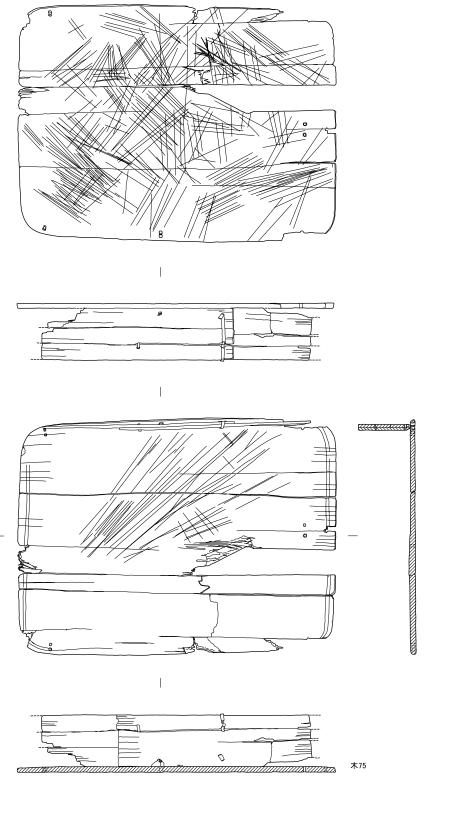
溝8出土木製品実測図5 (1:4)



溝8出土木製品実測図6 (1:4)



溝8出土木製品実測図7 (1:4)





1 1区第1-1面全景(北西から)



2 2区第1-1面全景(北西から)



1 2区第1-1面全景(北東から)



2 1区第1-2面落込み16(南から)

3 1区第1-2面溝15(北東から)





1 2区第1-2面断割り掘下げ部[北](西から)

2区第1-2面断割り掘下げ部 [南] (西から)



3 2区北壁(東半)氾濫堆積状況(南から)





1 2区第1-3面路面12(北東から)

2 2区第1-3面井戸6 (北から)



3 1区第2面全景(北から)



1 1区第2面全景(北西から)



2 2区第2面全景(北から)





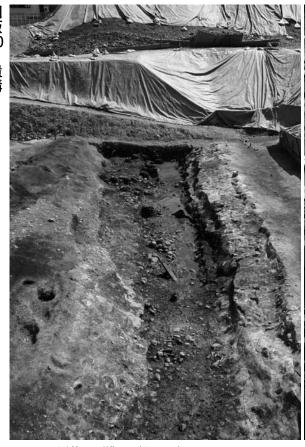


1区第2面溝1 (北から)

2区第2面溝1 (北から)



1区第2面溝8(北から)





1 2区第2面溝8 (北から)

2 2区第2面溝8 馬下顎出土状況(西から)



3 1区第2面溝1杭列c断割り状況(北西から)

4 2区第2面路面4石敷部分(南から)



溝1出土土器

溝8出土土器1

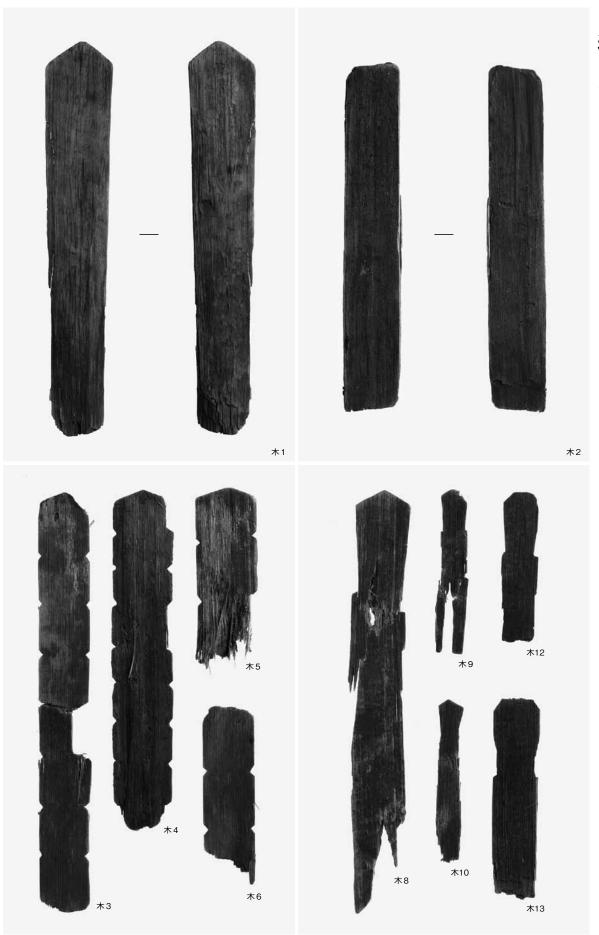


溝8出土土器2

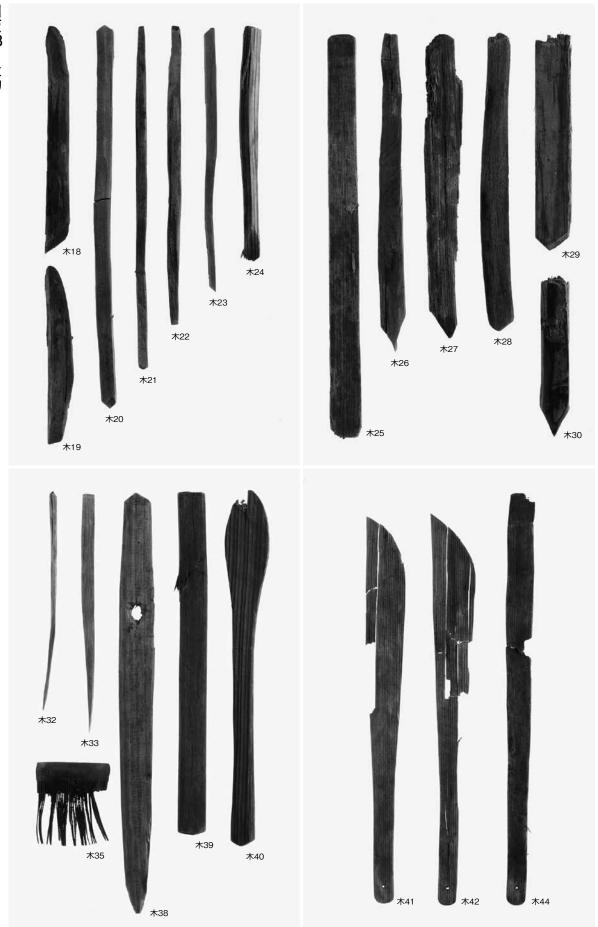
溝8出土土器3



土製品、銭貨、金属製品、石製品



溝8出土木製品1



溝8出土木製品2



溝8出土木製品3



溝8出土木製品4





木74

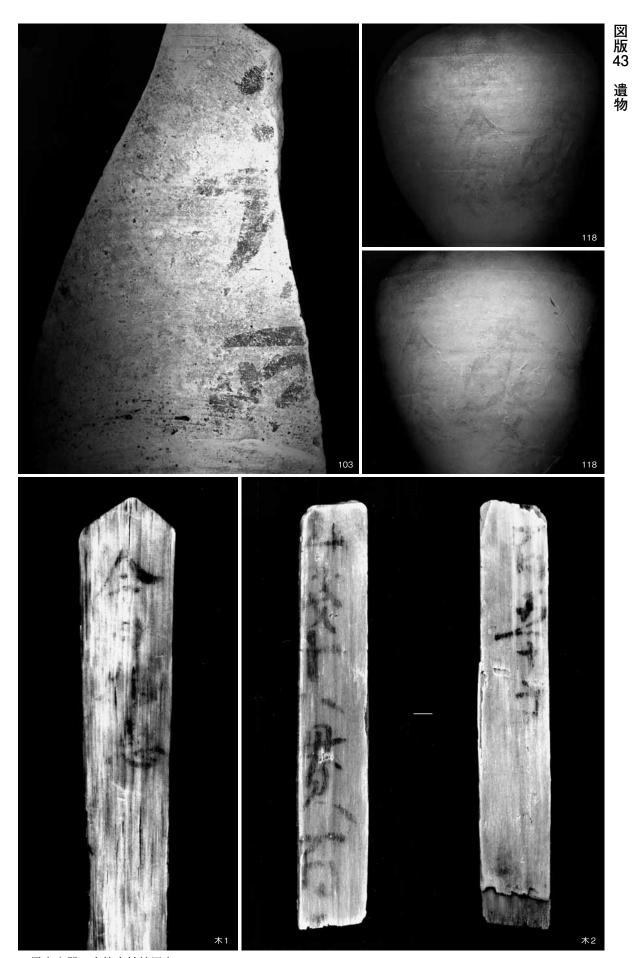




木75

溝8出土木製品5

墨書土器赤外線写真



墨書土器・木簡赤外線写真

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうにじょうにぼうじゅういっちょう・にしほりかわこうじあと、おどいあと								
書名	平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡								
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告								
シリーズ番号	2012-25								
編著者名	高橋 潔、モンペティ恭代								
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所								
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1								
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所								
発行年月日	西暦2014年2月28日								
がりがな 所収遺跡名	。。。。。 所 在 地		コ 市町村	ード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
マンカルきょうあと 平安京跡 おといあと 御土居跡	ままうとしなかす にしのきょうか にしのきょうか 東京 笠 事事 中京 空 本部 地大	中京区 tagentagi 空殿町38 tagentagentagentagentagentagentagentagen	26100	1 149	35度 00分 54秒	135度 43分 59秒	2012年5月 8日~2012 年9月7日	1, 224 m²	京都地方合同庁舎新築工事
所収遺跡名	種別 主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	縄文時代				石鏃		平安時代前期の西 堀川溝を良好た。 西側溝を良けた。 西側溝を出し中期がは、 西側ではいけてがは、 西地にのがは、は ではいた。 では、はでは、はでは、はでは、はでは、はでは、はでは、はでは、はでは、はでは、	
御土居跡	土塁跡	奈良時代 平安時代前期 平安時代中期 ~室町時代 室町時代 安土・桃山時代以降		溝、盛土、路面、 杭列 溝、井戸、土坑、 路面、柱穴列、氾 濫堆積 溝、落込み 堀、溝、土塁基底 部、盛土		瓦 土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、黑色 土器、輸入磁器、瓦、 土製品、金属製品、钱 貨、石製品、木製品 土師器、瓦器、輸入磁 器、施釉陶貨、石製品 土師器 土師器 土師器 土師器 土師器 土師器 土師器 土師器 土類品 土面器 土類品 土面器 土類品 土面器 土類品 土面器 土類品 土面器 土類品 土面器 土面。 五製品 土面。 五製品 土面。 五製品 土面。 五製品 大面。 五製品 大面。 五型。 五型。 五型。 五型。 五型。 五型。 五型。 五型。 五型。 五型			
						銭貨			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-25 平安京右京二条二坊十一町・ 西堀川小路跡、御土居跡

発行日 2014年2月28日

編 集 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1

 \mp 602 - 8435 Tel 075 - 415 - 0521 http://www.kyoto-arc.or.jp/

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地

 $\mp 604 - 0093$ Tel 075 - 256 - 0961